伊丹市埋蔵文化財調査報告書第 34 集

兵庫県伊丹市

御願塚古墳発掘調査報告書

－第８・９・10次調査－

2008 年３月

伊丹市教育委員会

序

本市には、国指定史跡「有岡城跡」・「伊丹廃寺跡」とならんで、県指定史跡「御願塚古墳」が所在します。

御願塚古墳は、伊丹市域南郊から尼崎市域にかけて所在していた“猪名野古墳群”のひとつにあたります。その中で唯一、周濠が残り古墳の形態を留めていたことから、昭和41年に県の史跡に指定されました。その後、発掘調査により、現存する周濠の外に更に濠が巡る古墳であることがわかりました。

本報告書は、第8次・第9次・第10次の調査成果をとりまとめたものです。これらの調査で、当古墳が二重周濠をもつ帆立貝式古墳であるだけでなく、「造り出し」をもつことなどが新たにわかりました。

本報告書が、学術研究だけにとどまらず、郷土の歴史に関する資料として、また広く学校教育・社会教育の分野でも活用されることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査をはじめとして、本市の文化財行政全般にわたってご指導いただいている関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

伊丹市教育長　**中西　幸造**

例　言

1．本書は、兵庫県伊丹市御願塚４丁目に所在する御願塚古墳の発掘調査成果をまとめたものである。
2．本書に収めた調査成果及び調査期間は下記の通りである。

御願塚古墳第 8 次調査　　平成 10 年 5 月 29 日～8 月 21 日
御願塚古墳第 9 次調査　　平成 12 年 11 月 17 日～平成 13 年 1 月 31 日
御願塚古墳第 10 次調査　　平成 17 年 2 月 1 日～2 月 18 日

3．発掘調査は、伊丹市教育委員会生涯学習部社会教育課、小長谷正治（現伊丹市立博物館館長）・中畔明日香・細川佳子（元嘱託）が担当した。

発掘調査・整理作業の体制は以下のとおりである。

発掘担当者　　小長谷正治　中畔明日香　細川佳子
調査補助員　　瀬川眞美子　高須賀由美　岡野理奈　川見典久　栗原早苗　亀家千代
整理補助員　　瀬川眞美子　吉川敬子　岡野理奈　岩田朱美　丸岡たかみ　三輪隆子

4．本報告の執筆は、第１章・第２章を中畔が、第３章を中畔・小長谷・瀬川が、補論Ⅱを和島恭仁雄が、第４章を中畔・瀬川が担当した。補論Ⅰについては、奈良県立橿原考古学研究所共同研究員奥田尚氏に執筆頂いた。また、記して感謝いたします。
5．編集は中畔の指示のもと、瀬川・吉川が担当し、和島が補佐した。
6．発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料は、伊丹市教育委員会が保管している。
7．本報告書をまとめるにあたって、花園大学高橋克壽准教授からさまざまなご教示を頂いた。記して感謝いたします。
8．今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたり、上記のほか多くの方々や機関からご助言、ご指導、ご協力を頂いた。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）

兵庫県教育委員会文化財室
兵庫県立考古博物館（旧兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）
尼崎市教育委員会
本田喜雄　櫃本誠一　川口宏海　和田晴吾　小川良太　水口富夫（故人）　村上泰樹
山下史朗　篠宮　正　鐘方正樹　上田　睦　河内一浩　関　真一　青木美香　永井正浩
大野　薫　沼澤　豊　渡辺伸行　柏原正民　山本　誠　小栗明彦　花谷　浩

凡　例

1．本書で示す方位は、日本測地系国土座標第Ⅴ系にしたがった。標高は、東京湾平均海面値（T.P.）を基準とした。
2．本書の土色表記は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。

本 文 目 次

序文
例言
凡例
第１章　位置と環境 …… 1
第２章　調査経過 …… 9
第３章　調査成果 …… 11
　第１節　御願塚古墳第 8 次調査 …… 11
　第２節　御願塚古墳第 9 次調査 …… 65
　第３節　御願塚古墳第 10 次調査 …… 89
補論
　Ⅰ　土製品の表面に見られる砂礫 …… 101
　Ⅱ　御願塚古墳に関する資料（古文書）から …… 105
第４章　総括 …… 121
参考文献

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡位置図 …… 1
第 2 図　猪名野古墳群分布図 …… 4
第 3 図　御願塚古墳第１次調査トレンチ設定図 …… 5
第 4 図　御願塚古墳第２～ 10 次調査調査区設定図 …… 6
御願塚古墳第 8 次調査
第 5 図　外濠部平面図・断面図 …… 13・14
第 6 図　第Ⅰ～Ⅳトレンチ平面図 …… 16
第 7 図　第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチ平面図・断面図 …… 18
第 8 図　第Ⅱトレンチ平面図・断面図 …… 19
第 9 図　第Ⅱトレンチ埴輪列平面図・立面図 …… 20
第 10 図　埴輪の各部名称 …… 22
第 11 図　口縁部形状模式図 …… 23
第 12 図　突帯形状模式図 …… 23
第 13 図　第Ⅱトレンチ出土韓式系土器 …… 34
第 14 図　第Ⅱトレンチ出土埴輪（1） …… 40
第 15 図　〃　（2） …… 41
第 16 図　〃　（3） …… 42
第 17 図　〃　（4） …… 43
第 18 図　〃　（5） …… 44

第19図　第Ⅱトレンチ出土埴輪　（6）…… 45
第20図　〃　（7）…… 46
第21図　第Ⅱトレンチ出土土師器・須恵器…… 47
第22図　第Ⅱトレンチ出土須恵器…… 48
第23図　第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチ出土埴輪（1）…… 49
第24図　〃　（2）…… 50
第25図　外濠部出土埴輪（1）…… 51
第26図　〃　（2）…… 52
第27図　〃　（3）、第Ⅱ・Ⅲトレンチ・外濠部出土遺物 …… 53
御願塚古墳第9次調査
第28図　平面図・断面図…… 66
第29図　墳頂部の埴輪列と段築部の埴輪列平面図・立面図…… 69
第30図　墳頂部出土埴輪…… 78
第31図　段築部出土埴輪（1）…… 79
第32図　〃　（2）…… 80
第33図　〃　（3）…… 81
第34図　〃　（4）…… 82
第35図　〃　（5）、出土遺物 …… 83
御願塚古墳第10次調査
第36図　平面図・断面図…… 90
第37図　出土埴輪（1）…… 95
第38図　〃　（2）…… 96
第39図　〃　（3）、出土遺物 …… 97
第40図　御願塚古墳平面図復元一案……122
第41図　御願塚古墳断面図復元一案……123

図　版　目　次

御願塚古墳第8次調査

図版1－1　第Ⅰ・Ⅲトレンチ全景（西北より）
2　第Ⅰトレンチ全景（西北より）
3　〃　南壁断面と平坦面（西北より）
4　〃　石列検出状況（北東より）
5　〃　石列検出状況（西北より）
図版2－1　第Ⅱトレンチ全景（西北より）
2　〃　拡張前（西北より）
3　〃　と第Ⅳトレンチ（北より）
4　〃　北壁断面（南西より）
5　〃　埴輪列検出状況（東南より）

図版３－１　第Ⅱトレンチ北側埴輪列　埴輪Ａ～Ｈ（南西より）
２　〃　南側埴輪列　埴輪Ｉ～Ｎ（北東より）
３　第Ⅱトレンチ北側埴輪列　埴輪Ａ～Ｈ（東南より）
４　〃　南側埴輪列　埴輪Ｉ～Ｎ（東南より）
５　〃　〃　埴輪Ｉ～Ｎ（西北より）
６　第Ⅱトレンチ北側埴輪列掘り方　（東南より）
７　〃　南側埴輪列掘り方　（東南より）
８　〃　〃　と埴輪Ｏ　（西北より）
図版４－１　第Ⅲトレンチ全景（西北より）
２　〃　北壁断面と葺石転落状況（南西より）
３　第Ⅲトレンチから造り出し（第Ⅱトレンチ）を見る（北東より）
４　第Ⅳトレンチ全景
５　〃　南壁断面（北東より）
図版５－１　外濠部全景（東より）
２　〃　西壁断面と外濠畦断面（東北より）
３　〃　外濠内埴輪出土状況（東北より）
図版６　出土遺物（１）
図版７　〃　（２）
図版８　〃　（３）
図版９　〃　（４）
図版10　〃　（５）
図版11　〃　（６）
図版12　〃　（７）
図版13　〃　（８）
図版14　〃　（９）
図版15　〃　（10）
図版16　〃　（11）
図版17　〃　（12）

御願塚古墳第９次調査

図版１８－１　調査時航空写真（南より）
２　全景　墳頂部から段築部を望む（南東より）
図版１９－１　墳頂部の埴輪列（南東より）
２　墳頂部の埴輪列と東壁断面（西より）
３　墳頂部の埴輪列（東より）
４　埴輪１Ａと東壁断面（西より）
５　墳頂部の埴輪列掘り方（西より）
６　〃　（東より）
図版２０－１　段築部の埴輪列と葺石（北西より）
２　段築部から墳頂部を見る（北西より）
３　葺石と葺石転落状況（南東より）

図版 20 － 4　段築部の埴輪列と東壁断面（西より）
5　段築部の埴輪列（西南より）
図版 21　出土遺物（1）
図版 22　〃　（2）
図版 23　〃　（3）
図版 24　〃　（4）
図版 25　〃　（5）
御願塚古墳第 10 次調査
図版 26 － 1　全景（南西より）
2　外濠検出状況（南西より）
3　埴輪・須恵器出土状況（北より）
4　北壁断面（南より）
5　東壁断面（西より）
図版 27　出土遺物（1）
図版 28　〃　（2）
図版 29　〃　（3）

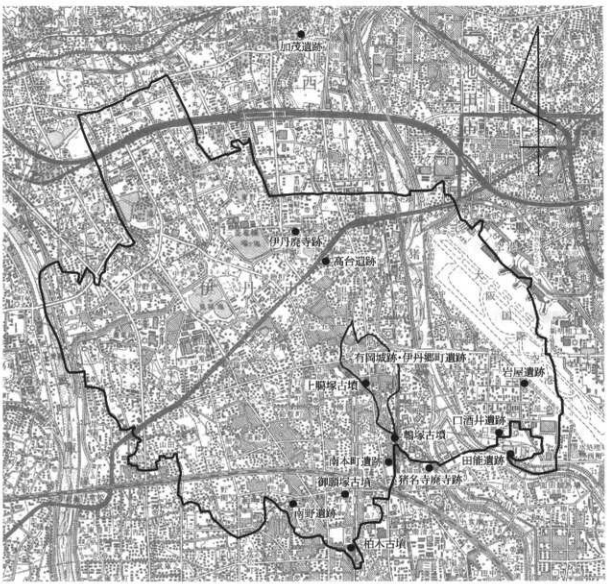
表 目 次

表 1　猪名野古墳群一覧…… 3
表 2　御願塚古墳発掘調査一覧…… 7
御願塚古墳第 8 次調査
表 3　埴輪観察表（1）…… 54
表 4　〃　（2）…… 56
表 5　〃　（3）…… 58
表 6　〃　（4）…… 60
表 7　形象埴輪観察表…… 62
表 8　土師器・須恵器・韓式系土器観察表（1）…… 62
表 9　〃　（2）…… 63
表 10　遺物観察表…… 63
御願塚古墳第 9 次調査
表 11　埴輪観察表（1）…… 84
表 12　〃　（2）…… 86
表 13　形象埴輪観察表…… 86
表 14　遺物観察表…… 88
御願塚古墳第 10 次調査
表 15　埴輪観察表…… 98
表 16　形象埴輪観察表…… 100
表 17　遺物観察表…… 100

第１章　位置と環境

御願塚古墳の所在する伊丹市は兵庫県の南東端にあり、猪名川と武庫川の２つの河川に挟まれ、山も海も持たない比較的平坦な地形である。伊丹台地（段丘）が市域のほぼ中央に位置し、北から南に向かって標高約 40 mから５mと緩やかに傾斜して、尼崎市の平野部に続いている。

猪名川の東側には口酒井遺跡・田能遺跡・岩屋遺跡などの縄文時代末期から弥生時代の遺跡が発見されている。台地の上では、高台遺跡第４地点において、縄文時代晩期～奈良時代にかけての集落跡が発見されている（伊丹市教育委員会 1998）。奈良時代のはじめ頃に建立された伊丹廃寺跡は、その北西 500 mにある。また、台地の中央から南東にかけ、段丘縁に沿って有岡城跡・伊丹郷町遺跡（戦国～江戸時代）が、その南に南本町遺跡（古墳～奈良時代）がある。台地中央から尼崎市域にかけては中期のものを中心に古墳が点在している。川西市の加茂遺跡（弥生時代）や尼崎市の猪名寺廃寺跡（奈良時代）も、同台地上にある。



第１図　遺跡位置図（平成 14 年　S＝１/50,000「大阪西北部」に加筆）

（1）猪名野古墳群

伊丹市域から尼崎市域にかけては、かつて古墳時代中期を中心として、数多くの古墳が分布していた。明治 18 年の測量図を見ると、現在、古墳の位置であるところに小山の記載が見られ、この地域に古墳が点在していたことがわかる。古墳の分布を見ると、伊丹台地上に形成されたことが推察される。残念ながら本格的な発掘調査が行われないまま、池田山古墳・園田大塚山古墳（尼崎市）を含めて多くの古墳が消滅し、現在は御願塚古墳など数基しか残っていない。これらの古墳を総称して、"猪名野古墳群"と呼んでいる。

猪名野古墳群の多くの古墳は、伊丹台地上に築造されていた（第２図「猪名野古墳群分布図」）。同じ伊丹台地上にある有岡城跡・伊丹郷町遺跡内上臈塚砦の推定地点から、近年古墳基底部のくびれ部が発見され、前期（４世紀後半）の前方後円墳「上臈塚古墳」の存在が明らかになった（伊丹市教育委員会 2001、伊丹市・六甲山麓遺跡調査会 2003、浅岡 2001 他）。また、その 100 m東でほぼ同時期の埴輪円筒棺が発見されている（兵庫県教育委員会 2006）。同遺跡南端には「鴨塚古墳」が残り、隣地調査で出土した埴輪から前期（４世紀末）に築造された古墳であることがわかってきた（伊丹市教育委員会 1992・2005、廣瀬 2003 他）。また、御願塚古墳の北東にある南本町遺跡からは、中期末１基・後期前葉３基の計４基の古墳が新たに検出されている（兵庫県教育委員会 1998 他）。御願塚古墳南西にある南野遺跡で発見された「南野古墳」も、当古墳群に含まれるものと考えられる（伊丹市教育委員会 1999）。市域の南端に残る柏木古墳も発掘調査で周濠が見つかり、出土した埴輪から５世紀中頃の古墳であることがわかっている（伊丹市教育委員会 1999）。伊丹台地の市域内における北端には７世紀前半の緑ヶ丘古墳群があった（伊丹市役所 1971）。南本町遺跡からほど近くには食満１・２号墳や南清水古墳・園田大塚山古墳（いずれも尼崎市域）があった。

当古墳群は従来は中期に限定され、古墳が点的に築造されたように考えられてきたが、このように近年の発掘調査で発見された古墳を合わせてとらえ直すと、古墳時代前期後半から後期にかけて、長い期間にわたり、古墳を築造してきた地域といえる。そして、古墳の築造が停止された後、当古墳群の北端に伊丹廃寺が、東端に猪名寺廃寺が建立されている。どちらも建立した氏族は不明であるが、古墳時代・奈良時代を通じて、この地域が常に中央政権と連携した地域であり、その政権に従う氏族を首長とした地域であったことが推察される。

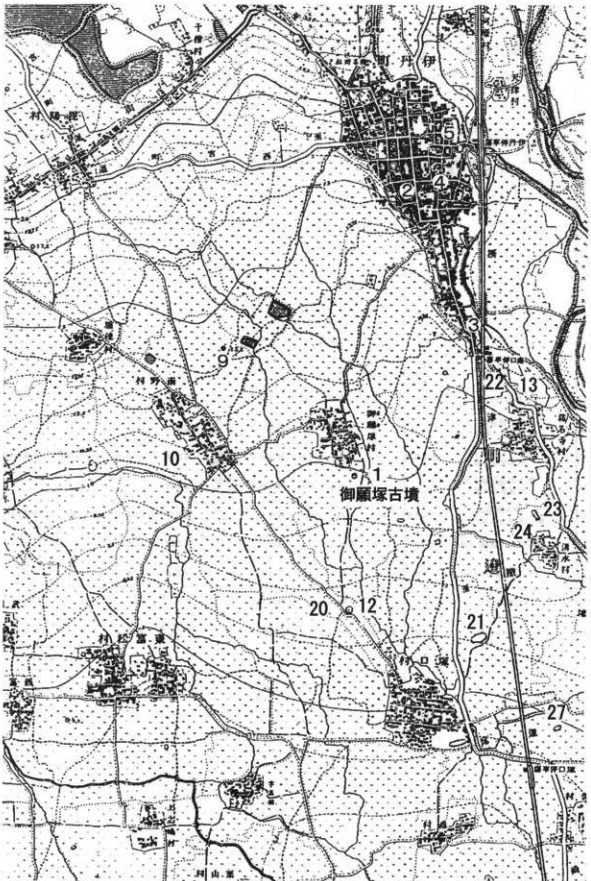
（2）御願塚古墳

御願塚古墳は旧御願塚村にあり、江戸時代以降、墳頂に宮が鎮座する（祭神は孝徳天皇、当初は孝謙天皇）。棟札から延宝９年（1681）に上葺が建立されたことがわかる（「補論Ⅱ」参照）。その際、墳頂は大きく削平されているようである。しかしながら、猪名野古墳群の中で唯一全容を残す古墳として、保存が必要との声が地元の人々を中心にあがり、昭和 40 年（1965）に伊丹市の、翌 41 年に兵庫県の史跡に指定された。昭和 42 年３月には、伊丹市史編纂事業の一環として当古墳の実測が行われた。それによると、墳丘の全長は 52 m、前方部は前幅 19 m・長さ 13 m・高さ２m、後円部は直径 39 m・高さ７mの帆立貝式古墳である。

その頃、古墳は墳丘の崩落がひどく、また、古墳周辺の市街地化が進み、周濠には下水が入り込んでいた。昭和 43 年度に、古墳北側の周濠外堤側に、下水道の配管が施工された。それに合わせ、周濠内に溜まった汚泥をさらい、外堤側に石積みの護岸を施して、遊歩道を整備しようという計画が、昭和 44 年４月に決定した。その工事に伴い、同年８月から行われたのが第１次調査である（伊丹市教育委員会 1971）。

	市	古墳（遺跡）名		墳丘	周溝	規模（m）	埋葬形態	墳輪	出土品	築造時期	調査歴	報告書発行年・元
1	伊丹	**御願塚古墳**	残存（墳内）	帆立貝（盛り出し）	2重	52	不明	Ⅳ期（円・形）	須恵器 土師器	5C後半	S44市～（計10回）	伊丹市1971、伊丹市1993
2	〃	上鶴塚古墳	埋没発見	前方後円？	あり	70	残存せず	Ⅱ期（円・形）	ガラス小玉	4C後半	S60市、H8県（震災）	伊丹市2001、六甲山麓2003
3	〃	鞠塚古墳	残存	円？	不明	径20～30	不明	Ⅱ期（円・形）	なし	4C後半	H元市、H10県（震災）	伊丹市1992、伊丹市2005
4	〃	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第204次調査（1基）	埋没発見	－	－	－	埴輪円筒棺	Ⅱ期（円）	なし	4C後半	H10県	兵庫県2006
5	〃	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203・217・231次調査（1基）	埋没発見	円？	あり	不明	残存せず	Ⅴ期（円・形）	須恵器	6C前半	H7・8・9市（震災）	伊丹市2007
6	〃	満塚	消滅	不明			残存せず	不明			－	－
7	〃	温塚	消滅	不明			残存せず	不明			－	兵庫県1984
8	〃	掛塚	消滅	不明			残存せず	不明			－	－
9	〃	破塚	消滅	不明			残存せず	不明			－	－
10	〃	南野遺跡（1基）	埋没発見	方？	あり	不明	残存せず	Ⅴ期（円）	須恵器	5C末～6C前半	H8市（震災）	伊丹市1999
11	〃	平塚古墳	残存	方？	不明	一辺16	不明	不明	－	－	未	－
12	〃	柏木古墳	残存（墓地）	円か前方後円？	あり	径55	不明	Ⅲ期（円・形）	なし	5C前半	H7県（震災）	伊丹市1999
13	〃	黄金塚古墳	残存	円	不明	10弱	不明	不明	須恵器	－	未	伊丹市史1
14	〃	南本町遺跡第3次南本町1号墳	埋没発見	円	あり	15～16	残存せず	Ⅴ期（円・形）	須恵器	6C前半	H7・8・9県	兵庫県1998
15	〃	南本町遺跡第3次南本町2号墳		？	あり	不明	残存せず	Ⅴ期（円・形）	須恵器			
16	〃	南本町遺跡第3次南本町3号墳		？	あり	不明	残存せず	Ⅴ期（円・形）	須恵器			
17	〃	南本町遺跡（南①区埋没古墳STO1）	埋没発見	方？	あり	9以上	残存せず	Ⅴ期（円）	須恵器	6C前半	H9県	兵庫県2007
18	〃	（伊丹）台地東縁（2基）	消滅	不明			残存せず	－	須恵器	7C前半	－	伊丹市史1
19	〃	緑ヶ丘古墳群（2基）	消滅	不明			残存せず	－	須恵器	7C前半	－	伊丹市史1
20	尼崎	猪名野古墳	消滅	不明			残存せず	不明			－	－
21	〃	池田山古墳	消滅	前方後円	あり？	71	石槨？	－	鏡・刀・鉄鏃・土師器	4C後半	－	兵庫県1925
22	〃	堂塚古墳	消滅	不明			現存せず	不明			－	－
23	〃	園田大塚山古墳	消滅	前方後円	不明	42	粘土槨・竪穴式土坑	－	鏡・刀・鉄鏃か、須恵器	6C前半	S45・54・55・58・59・61	尼崎市1987
24	〃	南清水古墳	残存（墳内）	帆立貝	あり？	46	不明	－	－	6C？	未	尼崎市史11
25	〃	食満1号墳	一部残存	不明							未	尼崎市史11
26	〃	食満2号墳	消滅	不明			残存せず	不明			－	－
27	〃	御園古墳	残存（墓地）	前方後円？	不明	60	粘土槨・組合式石棺	（円）	直刀 須恵器	5C末、6C	未	尼崎市史11
28	〃	岡院の石棺		－	－	－	石棺	－	－	5C	－	－
29	〃	伊居太古墳	一部残存	不明		92	現存せず	不明		5C	S25・40	尼崎市史11

表１　猪名野古墳群一覧

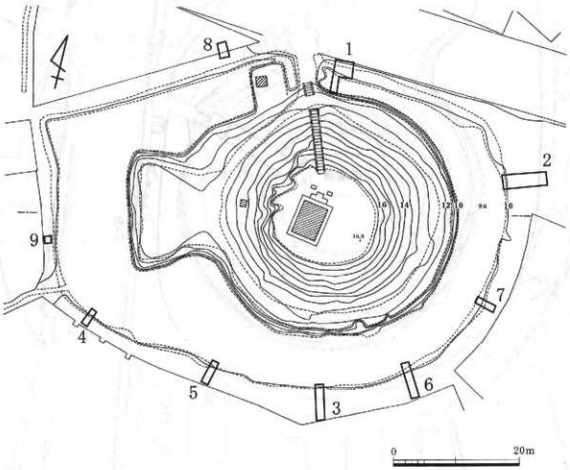


第２図　猪名野古墳群分布図（明治１８年測量　1/20,000 仮製地形図　「伊丹町」に加筆）

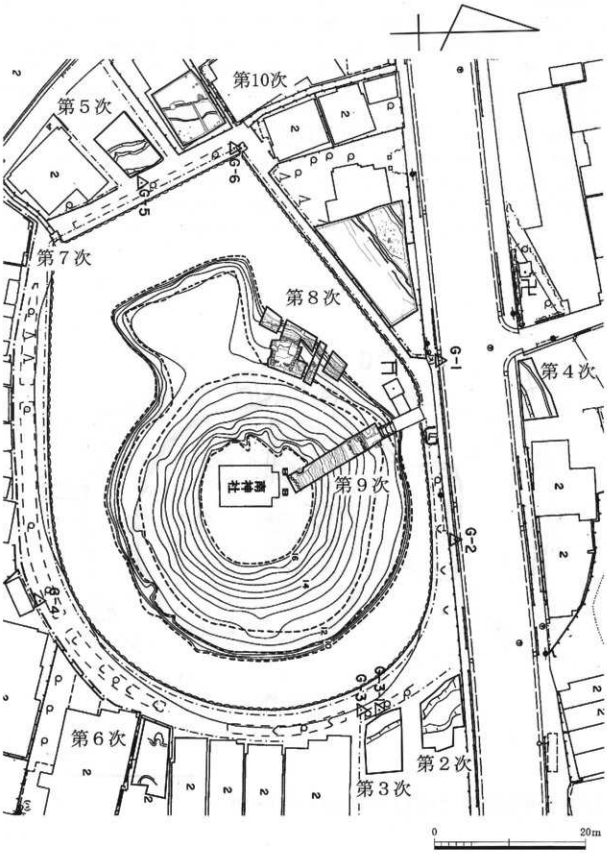
第１次調査

この調査では、周濠底・外堤の遺存状況を確認するために、計９ヵ所にトレンチが入れられている（第３図）。それによると、外堤の層序は「表土 10 － 15cm 下に赤みがかった粘土質の薄い土層があり、その下すぐ礫を混じた黄褐色の地山層になっている」（伊丹市教育委員会 1971/4 頁）。東から南側の周濠は明治・大正期に水田として、「深く掘り下げられ」（同 / ５頁）ているが、濠底が遺存する北側東半部（第１トレンチ周辺）で確認すると、「深さが外堤部に見える地山面より約 1.0 m低くなっている」（同 /6 頁）。「墳丘についていえば、封土は地山面の上にそのまま土を盛ったようであり、その二段築成の封土の下段部と墳頂ちかい現在の截頭周縁部あたりとの二段に埴輪をめぐらしていたものと想定されるにいたった」（同 /8 頁）としている。ここでいう外堤部とは周濠外側の堤のことである。

周濠北側（第１トレンチ内）の濠底から出土した埴輪はすべて円筒埴輪片で、形象埴輪は出土していない。外堤部は「礫を含んだ地山の上に盛土したらしい」（同 /8 頁）が、高さ・幅は不明と書かれている。



第３図　御願塚古墳第１次調査トレンチ設定図（S = 1/600）



第４図　御願塚古墳第２～10次調査調査区設定図（S＝1／500）

周濠外側の敷地において店舗・個人住宅の建設工事に伴い、数次の調査（第２～７次調査）が行われた（第４図）。それにより、当古墳の周濠に並行して、外側にもう一重の濠（以後、「外濠」と呼ぶ）が検出された。現在残存している周濠（以後、「内濠」と呼ぶ）の外側に「堤」が築かれ、さらに外濠が巡る二重の濠をもつ古墳であることが明らかになってきた（伊丹市教育委員会 1993・1999 他）。

第２次調査

後円部北東、外堤の規模を確認するために行われた第２次調査で、周濠にほぼ沿って巡る溝を検出した。溝底はレンズ状を呈す。溝の埋土からは、御願塚古墳と同種の円筒埴輪片が出土し、この溝が当古墳の外濠であることが裏付けられた。また、埴輪片は「古墳側から入り込んだと考えられ」、堤とそこに樹立していた埴輪列の「存在がほぼ確実なものとなった」と報告されている（同 1993）。

第３次調査

第２次調査の南側隣地において、前調査で発見された外濠の続きを検出した。「当地点では幅５m以上に広がり」、「内側はやや急勾配」、「外側は緩やかに立ち上がっていく」。なお、外濠の外側の立ち上がりは調査区外となる（同 1993）。

第４次調査

後円部北側で行われた。外濠の外側の立ち上がりは「2.4 ～ 2.5 mの平坦な底面が続き」、再度「緩やかに落ちていく」ことが確かめられた（同 1993）。

第５次調査

前方部正面で行われた。前調査区同様、外濠の外側は平坦な面をもち、立ち上がる（同 1994）。

第６次調査

後円部の東南で行われた。外濠は検出されたが、遺存状況は悪く、形状はゆがんでいる（同 1999）。

第７次調査

前方部南西隅にある既存排水施設付け替え工事による調査である（未報告）。

（中畔）

調査次数	調査期間	調査面積	調査場所	調査内容
第１次	69/08/25 ～ 70/03/31	―	周濠外縁部（９ヵ所）	周濠（内濠）範囲を確認
第２次	87/12/14 ～ 87/12/26	40㎡	堤東側	外濠を発見
第３次	92/01/20 ～ 92/01/25	37㎡	堤東側	〃　確認
第４次	92/12/11 ～ 92/12/16	26㎡	堤北側	〃　確認
第５次	93/04/22 ～ 93/04/29	42㎡	堤西側	〃　確認
第６次	95/12/01 ～ 95/12/13	75㎡	堤東側	〃　確認
第７次	97/04/30 ～ 97/04/30	３㎡	堤西側	
第８次	98/05/29 ～ 98/08/21	180㎡	堤北側、後円部掘部北側	外濠の確認、造り出し（埴輪列）の発見
第９次	00/11/17 ～ 01/01/31	33㎡	後円部北側	墳丘・第１段テラス（埴輪列）の発見
第 10 次	05/02/01 ～ 05/02/18	52㎡	堤西側	外濠を確認

表２　御願塚古墳発掘調査一覧

第２章　調査経過

（1）第８次調査

当古墳を“史跡公園”として整備するため、古墳の北西側の土地を平成９年度に取得した。この土地を含め周濠外側の遊歩道と墳丘裾部の環境整備及び周濠内の浚渫を行うため、平成 10 年度に調査を行った。これは墳丘部の初調査である。調査後、整備工事に着手し、平成 11 年度に竣工式典を開催した。以下、調査日誌をもとに略記する。

５・29　調査開始
６・１　周濠内を土嚢で堰き止める。ポンプにて水をあげる。
６・５　外濠部の重機掘削を開始する。
６・８　人力による掘削・精査を開始する。
６・９　再度、重機により掘り下げを行う。
６・11　地山面検出。人力により精査。外濠の位置確認。
６・15　外濠内の掘削開始。埋土上層より埴輪片とともに瓦器椀出土。
　　前方部にほど近い後円部の裾部にトレンチ２本設定（北より第Ⅰ・Ⅱトレンチとする）。
６・16　第Ⅰ・Ⅱトレンチの掘削を開始する。
６・18　第Ⅱトレンチに平坦な面を確認。須恵器・埴輪片出土。造り出しの可能性大。
６・23　造り出しにて埴輪列Ａ～Ｆ確認。
　　櫃本誠一氏来訪、「造り出しと見て間違いない。形状・規模を確認することが望ましい」との指導を受ける。
６・24　全景写真撮影。造り出しの規模確認のため、両側に 1.5 m拡張する。
６・30　第Ⅰトレンチの北側に新トレンチ設定（第Ⅲトレンチとする）。
７・１　造り出し南端検出のため、最南側に第Ⅳトレンチ設定。
７・９　和田晴吾氏来訪、「造り出しで間違いない。さらに拡張して規模をきちんと確認すべき」との指導を受ける。
７・14　外濠部の埋め戻し開始（～７/17 終了）。
７・21　造り出しの北南両端をともに拡張（北側埴輪列を北に 0.3 m、南側を南に 0.9 m拡張）。
７・23　北側埴輪列でさらに埴輪２基確認（全部で８基に／Ａ～Ｈ）。南側にも埴輪列（５基／Ⅰ～Ｍ）確認。
７・29　造り出し北側及び後円部とのとりつき部で、葺石の堆積を検出（墳丘盛土流出による？）。
　　埴輪Ｍから西側は大きく破壊されている。
７・31　埴輪Ⅰ東側より埴輪Ｏを発見。
８・４　庁内にて記者発表。
　　埴輪Ｃ内部より、埴輪口縁部・須恵器（有蓋高杯）・土師器小型壺を発見。
８・11　作図終了後、埴輪の取り上げ開始。
８・17　第Ⅱトレンチの埋め戻しを開始する。
８・21　調査終了。

（2）第9次調査

後円部墳頂に鎮座する南之神社参拝のために取り付けられた階段及び手すりの改修工事に伴い、平成12年度に発掘調査を実施した。以下、調査日誌をもとに略記する。

11・17　調査開始

11・29　既存石段・手すりを撤去後、人力掘削開始。

11・30　モルタル・コンクリート製の基礎及び、木製の基礎検出。江戸時代の陶磁器発見。

12・1　全景写真撮影。調査区を西側に0.4 m拡張し、土層確認のサブトレンチとする。

12・12　墳頂部にて円筒埴輪列検出。

12・13　墳丘斜面確認のため、調査区東側に幅0.7 mのサブトレンチを設定。

12・14　段築部に、斜面から転落した葺石の堆積を発見。

12・26　段築部にて円筒埴輪列（第1段テラス）発見。

12・27　全景写真撮影。仮養生。

1・10　墳頂部・第1段テラスの埴輪列の検出作業。

1・11　兵庫県教育委員会の調査にあわせて航空写真撮影実施。

1・15　調査区平面・断面の実測開始。

1・24　原位置樹立の埴輪の取り上げ。

1・31　全作業完了。

（3）第10次調査

個人住宅建設に伴う発掘調査（国庫補助事業）。平成16年11月30日付で届出がなされ、遺跡が破壊される範囲を記録保存するための発掘調査（19㎡）及び学術調査（範囲内容確認調査／33㎡）として行った。以下、調査日誌をもとに略記する。

2・1　調査区設定。

2・2　重機掘削後、人力により精査。遺構（外濠）検出。
　　外濠内掘削。

2・7　全景写真撮影。

2・8　平面・断面の実測。

2・9　調査終了。

2・18　埋め戻しほか全作業終了。

（中畔）

第３章　調査成果

第１節　御願塚古墳第８次調査

調査面積　外濠部：120㎡、墳丘部（４ヵ所）：60㎡
調査期間　平成10年５月29日～８月21日
調査主体　伊丹市教育委員会
調査担当者　小長谷正治　中畔明日香

１．調査の概要

御願塚古墳は、標高９ｍ前後の比較的平坦な地形のところに築かれた帆立貝式古墳である。墳頂部に社殿が営まれているとはいえ、ほぼ完存した古墳としては当地域では唯一のものであり、周辺の市街化に合わせて、史跡公園計画が持ち上がったことはすでに前章で述べた。

しかし、墳丘や濠の正確な規模や形状、埴輪の配列や葺石などについては、過去の７次の調査では十分な情報を得られていない。そこで、購入した古墳北西側の土地の公園整備及び古墳環境整備（周濠内浚渫等）にあわせて発掘調査を実施したものである。

調査区は、内濠外側と、その対岸となる墳丘くびれ部にほど近い、後円部裾側の２ヵ所に設定した。公園用地側の調査区は、過去の調査事例から二重周濠の外濠が検出される可能性があり、いっぽう後円部の調査区設定については、周濠浚渫工事に際して、墳丘裾部の状況が把握できる可能性が期待された。同時に、墳丘測量図にみられる墳丘の等高線が反対側の裾部と大きく異なることから、「造り出し」がみつかることも予測された。なお、現在の前方部平坦面の高さに合うように、後円部中段に遊歩道が巡っているが、これは墳丘第１段テラスを反映していると見られてきた。墳丘側へのトレンチの拡張はこの遊歩道手前までとした。

（１）外濠部

公園予定地の敷地の形状に合わせて、南北15ｍ・東西13ｍの調査区を設定し、調査を開始した。地山直上までの表土などを重機で掘削し、その後、人力で掘削・精査、図面作成・写真撮影を行った。また、調査区脇の周濠（内濠）内を土嚢で堰止めた上、ポンプにて排水し、内部を残土置き場とした。調査終了後、残土はすべて調査区内に埋め戻した。また、検出された外濠内は堆積状況を確認するため、濠内に畦を設定し、断面実測を行った。

（２）墳丘部

当初、２ヵ所の調査区を設定し、調査を開始した。調査の進行に合わせて、調査区の拡張・新規設定を適宜行った（詳細は第２章参照）。調査区は、設定した順に第Ⅰ～Ⅳトレンチとした（第６図）。これらのトレンチは、すべての掘削を人力で行った。残土は、人力による埋め戻しを考慮し、それぞれの調査区脇に土嚢にて囲い、仮置きした。造り出し上で原位置で出土した円筒埴輪は、実測終了後、すべて取り上げた。

以下、各トレンチの概要を述べる。

第Ⅰトレンチは、遊歩道下から内濠までの幅１ｍ・長さ5.8ｍのトレンチである。第Ⅱトレンチは、当初第Ⅰトレンチの南側に第Ⅰトレンチと同じく幅１ｍで設定した。しかし、推定された後円部第１段テラスより低い位置で埴輪列が見つかったため、そこが「造り出し」と判断され、その規模や形状

を把握するために拡張を数度行い、最終的には幅約５m・長さ 6.4 mとなった。第Ⅲトレンチは、幅 2.5 m・長さ３mのトレンチで、第Ⅰトレンチの北側に位置する。墳丘（後円部）裾から周濠（内濠）にかけての残存状況を確認するために設定した。第Ⅳトレンチは、幅 2.6 m・長さ 2.3 mのトレンチで、第Ⅱトレンチの南側に位置する。造り出しの西側、墳丘くびれ部や前方部の形状を確認するために設定した。

２．層序

外濠部・墳丘部の調査区を合わせて報告する。墳丘に古墳造営時の旧表土が残っている。当時の地表面が残っている場合は、旧表土（10YR ２/ ３黒褐色土層）が約 0.2 m、地山上層（7.5YR ４/ ４褐色粘質土層）が約 0.4 ～ 0.5 m、地山下層（2.5Y ６/ ６明黄褐色砂礫層）と続く。また、江戸時代の社殿建立の際に後円部頂が大きく削平されており、墳丘にはその流出土が厚く堆積していた。

これに対して、墳丘外（堤・外濠）では、後世の削平や撹乱によってほとんどは地山下層での遺構検出となる。

堤（外濠内側）の残存部上には地山直上に 10YR ４/ １褐灰色粘質土が約 0.15 ～ 0.3 m堆積していた。耕作に利用されてきたことが考えられる。

いっぽう、外濠内の埋土は断面観察によると６層確認された。

３．調査成果

（１）外濠部（第５図　図版５）

推定されていた位置に近いところで、外濠を検出した。埋土を見る限り、水の溜まっていた形跡はない。埴輪の出土から、堤上に埴輪が樹立されていたことが考えられる。

発掘調査により、削平された堤上面のレベルで幅 4.7 m、深さ 0.3 mの外濠が確認された。現在の内濠とさきいに並行している。そのため、内濠は後世多くの改変を受けているが、この調査区に隣接する部分に関しては、築造時に近い形状を保っている可能性が高い。円筒埴輪や蓋・家形などの形象埴輪片が、埋土下層から出土した。形象埴輪片は、外濠埋土断面観察のために設定した畦の東側に集中していた。埋土上層には、埴輪片とともに瓦器片が含まれていた。

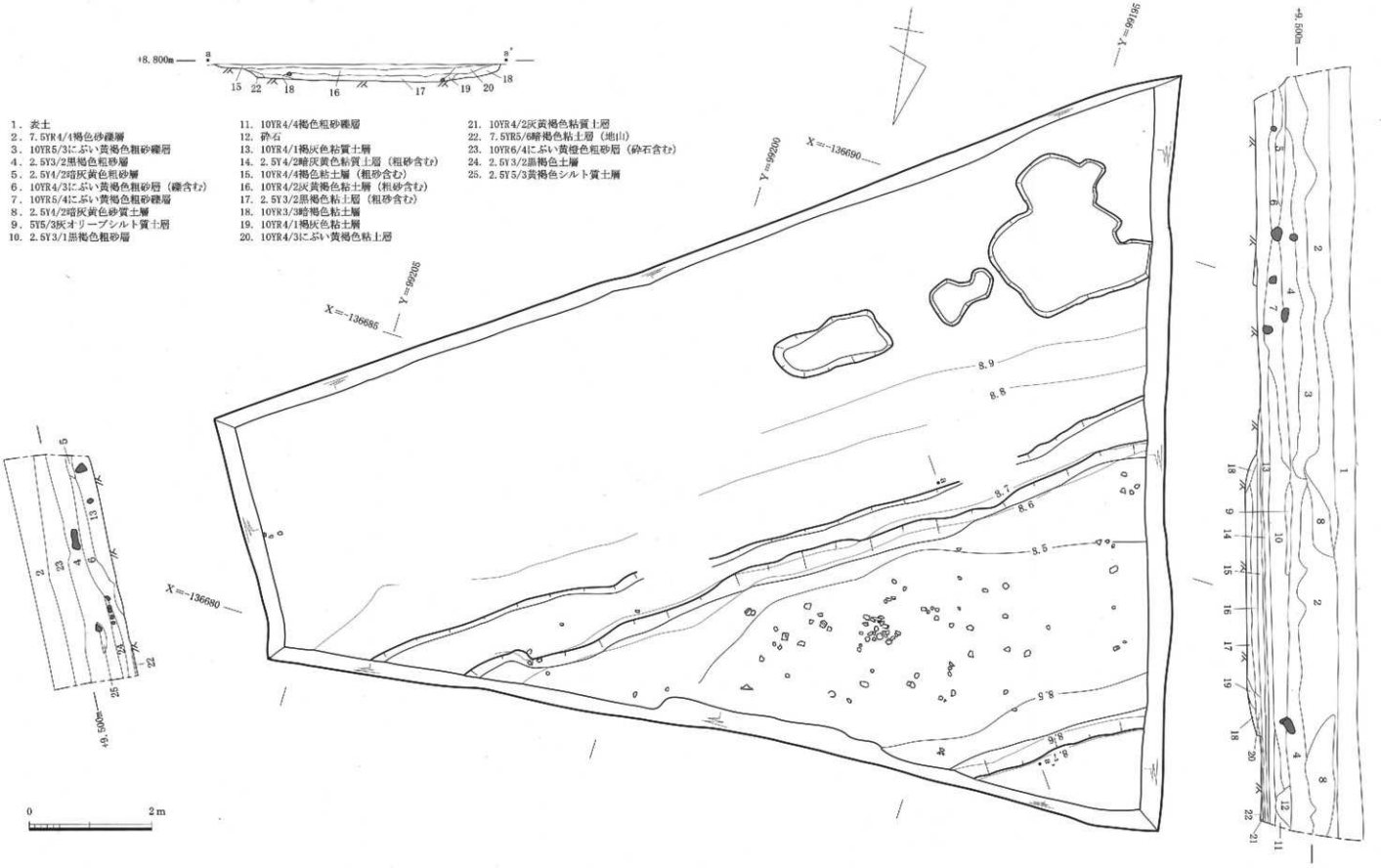
堤は、今回検出された外濠と内濠までの距離から推定すると、下端で幅約６mとなる。堤の高さは標高 8.9 m、外濠外側の残存部の高さは 8.7 mである。堤が外濠外側より若干高い。調査区東側の堤は、水田耕作に関わると思われる施設により破壊されていた。堤上のちょうど中央付近と推定される部分では、形状の定まらない浅い土坑が３基検出され、埴輪の据付掘り方の可能性が考えられる。

なお、外濠の外側に、さらに区画の溝が回り、いわゆる外堤状になっていたかどうかについては確認できていない。またその部分に埴輪が樹立されていたかどうかもわからない。これまでの過去の調査で、外濠外側は平坦面を持ち立ち上がることが確認されている。今回についても調査区北端の外濠外側が平坦であるため、その可能性が高い。

（２）墳丘部（第６～８図　図版１～４）

両端に埴輪列をもつ「造り出し」が確認された。神社境内としての現状保存（樹木の維持ほか）の関係上、造り出し全体を確認するには至らなかったが、おおよその構造が判明した。

以下に各トレンチについて述べる。



第５図　外濠部平面図・断面図

<第Ⅰトレンチ>

腐葉土・墳丘流出土の堆積は、0.4 ～ 1.4 mと幅がある。トレンチ内の墳丘裾（地山直上）の最下層には、ビニールが入っていた。墳丘流出土の下に、墳丘盛土（7.5YR 4/ 6 礫混褐色粘質土層）があり、その下に古墳築造時の旧表土が確認できる。

内濠から 1.8 mの位置（標高 8.7 m）に、20㎝大の不定形の石が並べられていた。そこから墳丘側には、幅約 1.5 mの平坦な面（標高 8.7 ～ 8.8 m）が広がり、もと墳丘の葺石だったと考えられる約 10㎝大の石が溜まっていた。そこから円筒・形象埴輪片や須恵器片が出土した。この平坦面の高さは、後に述べる造り出し上面よりも低い。造り出しに隣接する位置であるため、造り出しに付随する施設、あるいは造り出しを載せる基壇状のものと思われる。また、この平坦面は、地山下層（礫層）上面を掘り残して成形してあった。

この平坦面に据えられた石列は、それを起点（境）として内濠への傾斜が始まるので、平坦面の際に並べられた見切りの石列となっている。また、この石列の下（標高 8.5 m）には葺石が留まっていた。平坦面から下の傾斜角は、25 度と比較的ゆるやかである。しかし下方のほとんどが、撹乱されている。

トレンチ東端は、標高約 9.8 mである。そこから内濠側の 0.6 mの間は、前述した平坦面（8.7 m）に続いて、断面で地山・旧表土・墳丘盛土の層序が確認できる。平坦面に続くきわめてゆるやかな傾斜（～ 9.6 m）面では、埴輪列は見つかっていないが、墳丘第１段テラスにかかっている可能性がある。

<第Ⅱトレンチ>

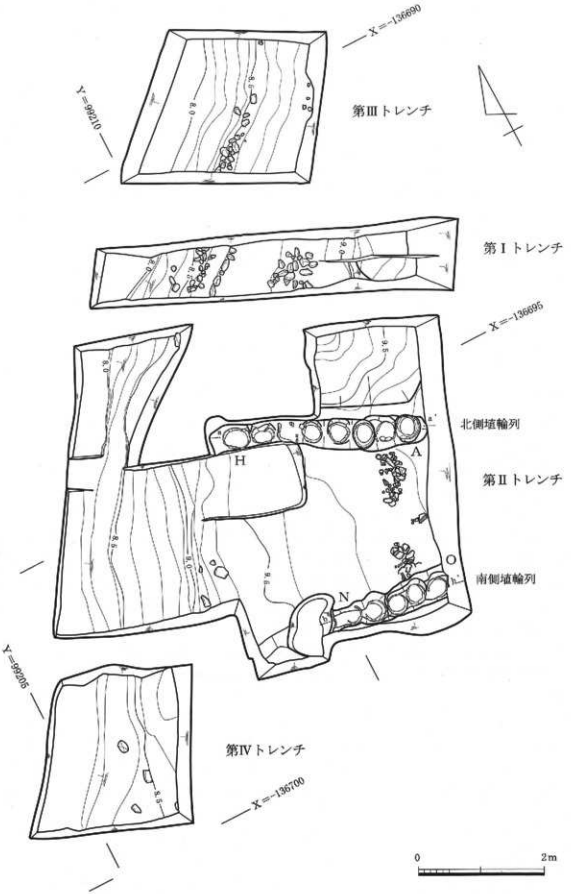
第Ⅰトレンチと同様に、トレンチ西端内濠内からはビニールが見つかっており、撹乱されている事がわかる。最上層は腐葉土。その下は、江戸時代の瓦片・遺物が含まれる褐色土層が 0.1 ～ 0.3 m、墳丘流出土が 0.05 ～ 0.4 m堆積する。以下、第Ⅰトレンチ同様、墳丘盛土・旧表土・地山と続く。

ここでは両側に円筒埴輪列をもつ「造り出し」を検出した。埴輪列と埴輪列は、内濠に向かって若干ハの字状に広がる。埴輪列は、北側に埴輪８基（Ａ～Ｈ）、南側に埴輪７基（Ｉ～Ｏ）が並ぶ。埴輪Ａから東には、埴輪はなかった。埴輪列間は、後円部側の埴輪ＡとＩでは心々間で 2.6 mの間隔がある。すべての埴輪は、基底部が原位置に据わった状況で検出されたが、後世の削平により埋設部分及びその直上のみ残存したものと考えられる。整理において、埴輪内部や周辺より見つかった破片と接合できたものも多いが、完全に復元できた埴輪はない。

造り出し北側の斜面も一部検出できた。それは北側埴輪列のすぐ外側から落ちだしている。北側埴輪列の外側を造り出し端とすると、造り出し上面の幅は、後円部側が約 3.8 m、内濠側が 4.5 mに復元できる。

検出した造り出しの高さは、後円部側で標高 9.8 m、内濠側で 9.6 mである。現存する埴輪列の埴輪の埋まり方や断面観察から考えると、本来 9.8 mで平坦な面をもっていたと推定される。第Ⅰトレンチで検出された造り出し北側裾に展開する平坦面より約１m高く、逆に第Ⅰトレンチで推定された第１段テラス（標高 10.0 m前後）よりも若干低い。なお、造り出しと後円部とは、直角に取り付かず、漸移的に接続する。

トレンチ北東隅の拡張部分で、造り出しの斜面を検出する際、10㎝に満たない大きさの円礫がまとまって見つかった。それを取り除くと、非常に緩やかな傾斜を持つオチが検出された。これらの石は、墳丘本体の葺石か第１段テラスと造り出しとの間の段差（小斜面）に葺かれた石が転落して溜まったものだろう。



第6図　第Ⅰ～Ⅳトレンチ平面図

造り出し直上からは、大量の須恵器片が出土した。須恵器片は、ほとんどすべてが細かく割れていた。当初置かれた状態を保っていると判断されるものは１点もない。だが、埴輪Ｎの北西でまとまって出土しており、この位置に置かれた可能性は高い。埴輪Ｎから内濠側には大きな木の根痕があり、円筒埴輪は確認できなかった。そのため、マツリを行うために埴輪を抜いたのか、もともと途切れた部分があったのかは決めかねる。

また、造り出し西端、つまり内濠側端では、埴輪列は見つかっていない。造り出しと内濠とが接する部分が、地山下層（礫層）が剥き出しとなるほど削られており、本来あるべきはずの墳丘盛土・旧表土・地山上層という層序は失われてしまっていた。そのため、築造当初は造り出し上面にコの字ないしロの字形に埴輪列を回していたが、後世の墳丘盛土の流出や人為的な破壊によってそれが失われてしまった可能性が高い。それらを考慮して、造り出しの長さを推定すると、４ｍ以上となる。なお、造り出し東端（後円部との境）の埴輪列も見つかっていない。

＜第Ⅲトレンチ＞

上から、腐葉土・江戸時代以降の堆積土・墳丘流出土の順に、0.9 ～ 1.2 ｍ堆積する。地山の上には、埴輪片しか含まない墳丘流出土が堆積しており、このトレンチ内は浚渫時の攪乱の形跡はない。

トレンチの後円部側検出面の高さは、標高 8.8 ｍである。ほぼ第Ｉトレンチで検出された平坦面と同じ高さである。このトレンチでは平坦な面は確認されず、すべてが斜面（標高 8.8 ～ 8.0 ｍ）であった。第Ｉトレンチで検出された平坦面の高さ（8.7 ｍ）や、第１段テラスの高さ（10.0 ｍ前後／推定）、造り出しの高さ（9.8 ｍ）に照らしてみると、結果としてトレンチ全体が、後円部第１段テラスより外側におさまると考えられる。斜面の傾斜角は 30 度で、傾斜はほぼ均一である。攪乱の痕跡がないため、トレンチ西端の低い平坦面（標高約 8.0 ｍ）が、築造時の内濠底であった可能性が高い。だが、基底石や転落した葺石はなかった。

いっぽうで、トレンチのほぼ中央（標高 8.5 ｍ）付近で、墳丘（後円部）から流出したものと思われる葺石や円筒埴輪片が溜まっていた。その部分の高さは、第Ｉトレンチで検出された平坦面と内濠の境を示す石列の下に葺石が留まっていた高さ(8.5 ｍ)と合致する。この付近が墳丘裾かと思われる。

＜第Ⅳトレンチ＞

ここでもトレンチ西端内濠埋土からビニールなどが見つかった。上から攪乱土・腐葉土が 0.4 ～ 0.9 ｍ堆積している。トレンチの西半分は、攪乱を受けている。墳丘側は、葺石と考えられる 15 ～ 20 ㎝大の石や埴輪片を含む土が標高 8.5 ～ 8.8 ｍあたりに最大 0.4 ｍ堆積する。

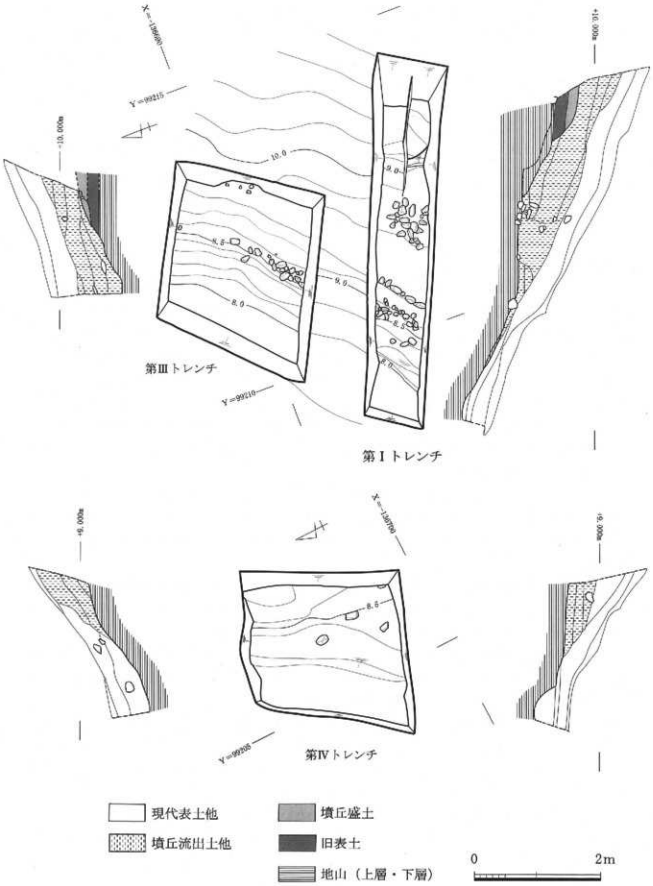
トレンチ北東隅に平坦な面を検出した。高さは、標高約 8.6 ～ 8.7 ｍである。第Ｉトレンチの平坦面とほぼ同じレベル値であり、土層も同じである。そのため、第Ｉトレンチの平坦面と同様、造り出しに隣接する平坦面（基壇状部分）であると考えられる。

この平坦面から外側の斜面は、大きく破壊されていたため、基底石・内濠底は確認できなかった。

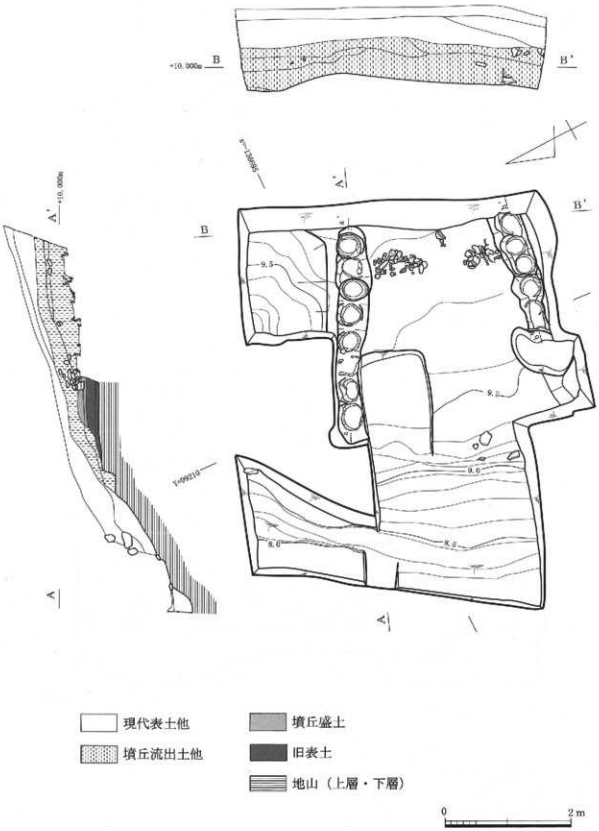
トレンチ南端は、前方部に限りなく近く、調査範囲は前方部のくびれ部分にあたると考えられる。

トレンチ南東隅は、標高 8.5 ｍと平坦面より低い。なお、前方部裾は確認できないので、前方部の裾の位置は、第Ⅳトレンチ調査区のさらに南側と思われる。

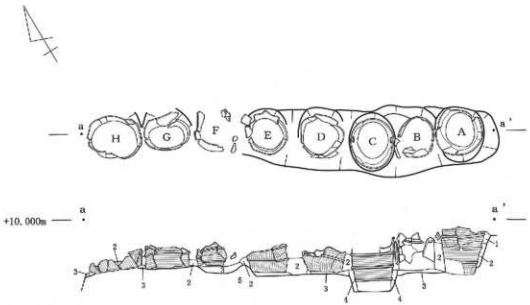
このトレンチからは、形象埴輪・須恵器は出土していない。　（中畔）



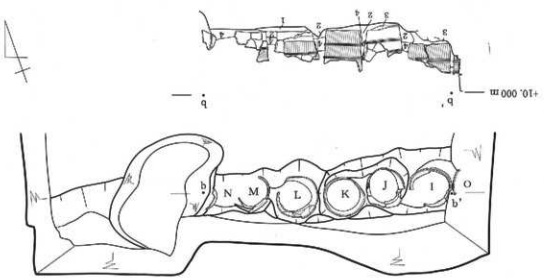
第7図　第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチ平面図・断面図



第８図　第Ⅱトレンチ平面図・断面図



北側埴輪列



南側埴輪列

1．7.5YR4/3褐色土層（粗砂混）
2．7.5YR4/4褐色粘質土層（粗砂～1cm大の小石混）
3．7.5YR4/4褐色シルト質土層（埴輪据え置き時に高さ調整のために置いた土）
4．7.5YR4/4褐色粘質シルト層
5．10YR2/3黒褐色土層（旧表土）

0　1m

第9図　第Ⅱトレンチ埴輪列平面図・立面図

４．出土遺物

今回の出土遺物は埴輪がその大半を占めているが、祭祀に使用されたと思われる土師器・須恵器もあり、後世の堆積層からは中近世の遺物が出土している。トレンチごとに、それぞれについて報告するが、中近世の遺物は最後にまとめて記述している。

埴輪の属性について

埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪が見られる。ここでは第Ⅱトレンチ（造り出し）に樹立していた埴輪、第Ⅰ～Ⅳトレンチ・外濠部出土の埴輪片、および形象埴輪[(1)]について報告する。

円筒埴輪は上部を失っているものがほとんどで、全形を復元できる個体は少ないが、口縁部の出土状況から可能な限りの復元を試みている。朝顔形埴輪は円筒埴輪の上に肩部～口縁部が載る形をとるので、それ以外の破片では円筒埴輪と区別がつかないため、肩部以上で朝顔形と判断できるものについて項目を設けている。

報告にあたっては、個別説明のほかに、掲載しているすべての埴輪に対して観察表を作成しているが、特に円筒埴輪・朝顔形埴輪に関しては特徴を的確に把握するために、次のような諸属性を取り上げて説明することにした。属性としているのは焼成状態、形態、法量、口縁部形状、突帯形状、色調、器面調整、透かし孔、突帯間隔設定技法であるが、特徴的な事柄に対しては備考を設けて注記している。

各属性は今後の調査によって埴輪資料が充実した際に、今回の調査成果と合わせて埴輪の型式を捉えることができるよう分類している。

焼成状態

出土した円筒埴輪・朝顔形埴輪には外面に黒斑があるものはなく、すべて窖窯焼成と考えられる。焼成状態には土師質（軟質）、土師質（硬質）、須恵質が観察でき、土師質（軟質）の割合が多く、大半を占めているが、須恵質のものも１/３程度見られる。

形態

完形に復元可能な資料が数点あるが、いずれも口縁部は樹立部分との接合面を失っていることから、突帯間隔や透かし孔の位置を加味して図上復元している。したがって、仮定ではあるが、円筒埴輪では３つの規格を提示している。朝顔形埴輪は第９次調査で１個体のみ完形に図上復元している。全形を把握できない大半の資料は「部位」として残存部分を表記している。その場合は、基底部から上が残っている場合は１段目－２段目－３段目…、最上段から下が残っている場合は最上段－上から２段目－同３段目…と記述している。今回の調査で想定した埴輪の形態は、次の円筒埴輪３形態と朝顔形埴輪１形態である。

円筒埴輪　―　５条突帯６段構成　　６条突帯７段構成　　７条突帯８段構成

朝顔形埴輪　―　５条突帯６段構成

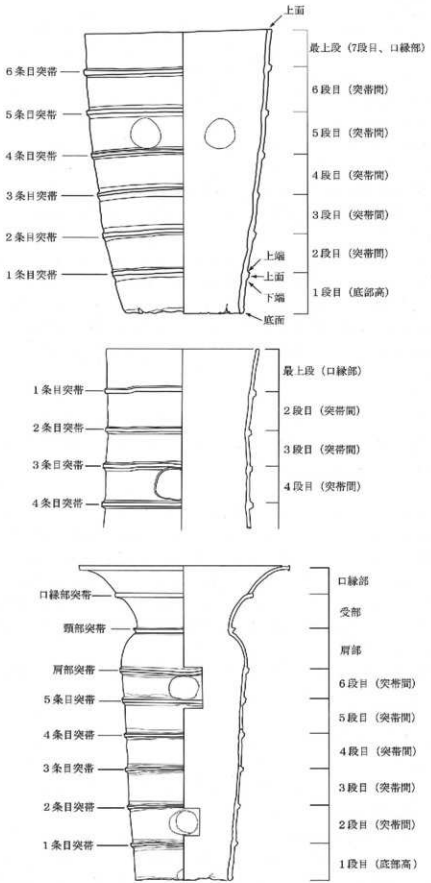
法量

１　器高・底径・口縁部径

器高は完形の資料がないため、すべて復元高である。（数字）は残存高を示している。底径（底部径）は外法で計測しており、断面が楕円形を呈する埴輪は長軸×短軸でそれを表している。口縁部径（口径）は外法で計測している。

２　底部高・突帯間隔・最上段高

１段目の底縁から１条目突帯の上縁までの間を底部高とし、突帯間隔は突帯の上縁と１段上の突帯上縁との間の距離としている。最上段高は口縁部上端から下の突帯上縁の距離である。観察表の突帯間隔の欄は、１段目が残っている場合は下から２段目・３段目…、最上段が残っている場合は上か



第10図　埴輪の各部名称

ら２段目・３段目…の数値である。

口縁部形状

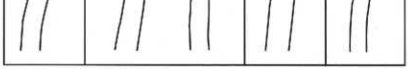
樹立している埴輪の大方は上部が失われていることから、分類対象となる口縁部はほとんどが破片によるものである。

a　直線的、外反気味に立ち上がり、上面は内傾する広い平坦面である。上端は肥厚し、引き出された端部は面を持っている。

b　直線的に立ち上がり、上面は水平な平坦面（b'）か丸くおさめている。

c　直線的に立ち上がり、上面が外傾している。

d　直線的に立ち上がり、上面が内傾している。



第 11 図　口縁部形状模式図

突帯形状

突帯の形状は１個体の埴輪においても調整の仕方などによるばらつきが認められることから、なるべく同じ条件で観察・分類を行うため、１条目突帯をその基準としている。欠損していれば２条目、３条目の順で繰り上げて観察している。

突帯の形状は基本的に断面形が台形であるが、上面が強いナデによりM字形になるものもみられる。M字形のものは突帯ｂ・ｄで確認することができるが、上面以外の特徴は同じである。それらをb' d'としている。

a　断面は山形を呈し、突出度が高いもの（幅２cm前後、高さ１cm以上）

b　幅が広く、突出度の高いもの（幅２cm前後、高さ 0.8cm前後）

c　幅が狭く、突出度の高いもの（幅 1.5cm前後、高さ 0.8cm前後）

d　幅が広く、突出度の低いもの（幅２cm前後、高さ 0.5cm以下）

e　幅が狭く、突出度の低いもの（幅 1.5cm前後、高さ 0.5cm以下）

突帯は粘土貼り付け後、ナデを行って整形・調整されているが、１段目突帯に突帯の上面を板状工具で押圧する「押圧技法」（川西 1978）で整形されたものがみられる。

第 12 図　突帯形状模式図

色調

色調は土色帖（凡例２参照）を用いた肉眼観察による。基本的に土師質の埴輪は橙色を呈し、須恵質の埴輪は灰色・灰黄色を呈している。

器面調整

1　外面調整

外面調整は１段目・突帯間・最上段（口縁部）に分けて観察している。タテハケによる１次調整の後、ヨコハケによる２次調整を行う個体と、１次調整のタテハケのみの個体に大別され、前者には１段目への２次調整の有無が加わる。２次調整のヨコハケには次の４種（一瀬 1988、埋蔵文化財研究会 2003）を確認している。

Bb 種　ハケ工具幅が狭く、突帯間に２周以上のヨコハケを施している。

Bc 種　ハケ工具を器壁から離さずに、突帯間を１周の動作のヨコハケで埋めている。静止痕は突帯に対してほぼ垂直に残っており、静止痕の間隔も細かい。

Bd 種　Bc 種と同様にヨコハケを施すが、静止痕が斜めに傾くものである。

Ca 種　１ストロークが比較的長い連続的なヨコハケ。

2　内面調整

内面調整は斜め・タテ方向に指ナデ上げを施すものと、ハケ調整（タテハケ・ヨコハケ）を施すものに分けられ、その割合は７：３である。前者はほとんどの個体で突帯貼り付け位置に指オサエやヨコナデを加えている。

透かし孔

透かし孔の配置は基本的に３・５段目であるが、３・６段目に設けられているもののほかに、埴輪 17 のように各段に透かし孔を持つもの、２・５・６段（第９次調査・朝顔形埴輪２Ａ）の変則的なものがある。いずれも直交方向に２孔１対で設けられている。透かし孔は円形であるが、突帯間隔が狭い場合や横断面が楕円形を呈する円筒埴輪には明らかに楕円形に穿孔されたものが見られる。

突帯間隔設定技法

確認している突帯間隔設定の痕跡は１・２条の凹線によるものである。１条の場合の凹線幅は３～５㎜、２条の場合は２㎜幅の凹線が２条廻る。凹線を廻らせるための設定工具が、器面に触れた痕跡は観察できなかった。

＜第Ⅱトレンチ＞

１．埴輪

１）円筒埴輪（第 14 ～ 20 図、図版６～ 10）

埴輪Ａ　残存高 36.5㎝、底部径 31.5㎝、底部高 9.2 ～ 9.6㎝、突帯間隔は 9.9 ～ 10.3㎝である。突帯剥離面に突帯間設定の凹線が認められ、凹線までの間隔は１段目で９㎝、２段目以上は 10㎝である。突帯の形状は（ｂ）で、幅 2.5㎝、高さ 0.8㎝を測る。基底は３㎝幅の２枚の粘土帯を交互に貼り合わせて輪を形作っている。その上に幅 2.5㎝、３㎝、４㎝の粘土紐を積み上げている。

外面調整は１段目を含め、タテハケによる１次調整の後、Bc 種ヨコハケによる２次調整を施す。静止痕の間隔は、１段目６～ 6.7㎝、２段目以上４～ 4.5㎝。ハケ工具原体には５～９本 /㎝が使用されていることから、１次・２次調整は同一原体で行われた可能性がある。底部端縁をナデ調整する。

内面調整は斜め・タテ方向に指ナデ調整し、粘土紐の継目には丁寧にナデを加えている。下端はナデ調整を行う。３段目に 6.5 × 8.7㎝の２孔１対の円形透かし孔を持つ。

胎土は１～４㎜大の石英粒、雲母、クサリ礫を含んでいる。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈している。底面に棒状圧痕、簾状圧痕が残る。

埴輪Ａ内から出土している埴輪 22 は、胎土・焼成状態・調整などから口縁部の可能性が考えられる。口縁の形状は（ｂ）で、口縁部径は 32.0㎝である。

外面調整はタテハケによる１次調整の後、Ｂc 種ヨコハケを施し、内面調整はヨコハケによる。ハケ原体は条数５～９本 /㎝である。

埴輪Ｂ　残存高 27.5㎝、底部径は 28.6㎝、底部高は 12.9 ～ 13.1㎝、突帯間隔は 10.1 ～ 10.3㎝。突帯の形状は（ｂ'）で、幅 2.2㎝、高さ 0.7㎝を測る。粘土紐は２～ 2.5㎝幅と 3.5 ～４㎝幅のものを積み上げている。

風化が著しく外面調整は不明瞭であるが、１段目以外にわずかに１次調整のタテハケと２次調整のヨコハケが観察できる。内面調整は斜め方向の指ナデの後、突帯貼付け位置をヨコナデする。

３段目に２孔１対の円形透かし孔を持つ。胎土は１～５㎜の石英・長石・チャートが目立ち、雲母、クサリ礫を含んでいる。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈している。基底部外縁端は人為的に打ち欠いている。

埴輪Ｃ　残存高 39.9㎝、底部径は 32.2㎝、底部高は 9.4 ～ 9.5㎝、突帯間隔は 9.2 ～ 9.7㎝。突帯の形状は（ｂ）で、幅 2.0㎝、高さ 0.8㎝を測る。基底は４～５㎝幅の粘土帯２枚を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に 1.5 ～３㎝幅の粘土紐を積み上げる。

外面調整はタテハケによる１次調整を行っているが、２段目に僅かに観察できるだけである。１段目はハケ状工具によるナデ上げ・ヨコナデを行い、下端をヨコナデする。２段目以上はＢc 種ヨコハケ（板ナデ）を施すが、ヨコハケ原体条数は緻密で抽出できない。静止痕の間隔は４～ 4.5㎝である。内面調整は斜め方向に強く指ナデを施した後、粘土紐の接合位置付近に横位の爪状痕が帯状に残る。下端に指オサエを加える。

３段目に７× 7.4㎝の２孔１対の円形透かし孔を持つ。胎土は１～２㎜の石英・長石粒が多く、クサリ礫、砂粒を含んでいる。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈する。

内側に落ち込んだ状態で検出された埴輪 16 が上部である可能性が高いが、接合面を失っているため判断できない。

埴輪Ｄ　最上段との接合面を失っているが、全形は６条突帯７段構成と推定される。復元高 65㎝、口縁部径 44.2㎝、底部径 28㎝× 24.5㎝で、自重に拠ってやや楕円形になっている。底部高 9.7 ～ 10.7㎝、突帯間隔は２段目 9.3㎝、３段目 9.1㎝、４段目 9.5㎝、５段目 10㎝、最上段高 8.5㎝である。

突帯剥離面に突帯間設定の幅４㎜程の凹線が見られ、凹線までの間隔は１段目９㎝、２段目以上は約 9.5㎝である。突帯は幅 2.2㎝、高さ 0.6㎝で、形状は（ｂ'）であるが、１条目突帯に限り上面に板押圧を加えたあと、ナデ調整を行っており、断面台形を呈している。口縁の形状は（ｂ）である。

基底は４～６㎝の粘土帯２枚を交互に貼り合わせて輪を形作り、その上に２～３㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整の後、２段目以上にＢd 種ヨコハケによる２次調整を施している。最上段は突帯間幅が狭いにも関わらずヨコハケを２周させている。静止痕の間隔は 4.5 ～ 10㎝で、一定していない。ヨコハケ工具原体は４～７本 /㎝で、タテハケには原体幅約５㎝、４～７本 /㎝の工具が使用されている。外面１段目下端をナデ調整する。

内面調整は５段目以下には斜め方向の指ナデの後、突帯貼付け位置にヨコナデ、指オサエを加える。６段目と最上段はヨコ方向に指ナデを施した後、突帯貼り付け位置をヨコナデ、指オサエする。

３段目と５段目に直交方向に、８×７㎝の２孔１対の円形透かし孔を持つ。底面に棒状圧痕、木目痕が残る。胎土は１～３㎜の石英・長石粒を含む。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。

埴輪E　残存高 19.9㎝、底部径 29.8㎝、底部高 9.4㎝、突帯間隔 9.7㎝。突帯の形状は（ｂ）で、幅 2.0㎝、高さ 0.8㎝を測る。１条目突帯上面に板押圧の痕跡が残る。基底は幅３㎝の２～３枚の粘土帯を貼り合わせて形作り、その上に２～3.5㎝幅の粘土紐を積み上げる。

外面調整はタテハケによる１次調整のみで、ハケ工具原体は５～６本 /㎝である。内面調整は指オサエ、斜め方向の指ナデ、ヨコナデ、ハケナデを施しているが、粘土紐の継目は大変目立つ。

胎土は 0.2 ～ 1.2㎜の礫・長石・石英、砂粒、クサリ礫を含み粗い。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈す。底面に棒状圧痕が残っている。

埴輪F　残存高 24.0㎝、底部径 30.6㎝、底部高 8.5㎝、突帯間隔は２段目 8.8㎝、３段目 9.4㎝である。突帯の形状は（ｃ）で、幅 1.5㎝、高さ 0.7㎝を測る。基底部外縁端は人為的に打ち欠いている。基底の様子は分からないが、２～3.5㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整のあと、２段目以上に Bd 種ヨコハケによる２次調整を施す。静止痕の間隔は 2.5 ～ 3.5㎝で細かいピッチを刻む。ヨコハケ原体条数は緻密で 10 ～ 12 本 /㎝、タテハケ原体は５本 /㎝である。

内面調整はタテ方向に強い指ナデを行った後、１段目に原体幅２㎝のハケナデを施している。突帯貼付け位置はヨコナデ、指オサエを加え、粘土紐の接合痕を丁寧にナデ消している。

透かし孔は３段目に２孔１対で穿孔されるもので、径 7.5㎝の円形である。胎土は長石・石英粒、砂粒、雲母、クサリ礫を含んでいる。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。

埴輪G　残存高 23.8㎝、底部径 32.4 × 18.7㎝、底部高 12 ～ 12.5㎝、突帯間隔 9.5㎝を測る。横断面が楕円形を呈する円筒埴輪である。突帯の形状は（ｂ′）で、幅 2.5 ～ 3.0㎝、高さ 0.8㎝を測る。

基底は幅 5㎝ほどの粘土帯１枚で形作られ、その上に２～３㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整のあと、Bc 種ヨコハケによる２次調整を施す。２段目は突帯間を１周のヨコハケで施し、静止痕の間隔は 3.8 ～ 5㎝である。１段目は突帯間隔が広く、１周のヨコハケでは満たすことが出来ないため、ヨコハケを２周させている。その後に、部分的に斜め方向の強いナデ上げを行う。静止痕の間隔は１周目が５㎝、２周目は 3.5㎝で、静止痕が斜めに傾いている。タテハケ原体は７本 /㎝、ヨコハケ原体は７～８本 /㎝である。

内面調整はタテ・斜め方向の強い指ナデを施し、突帯貼付け位置は細かくヨコナデしている。

３段目に２孔１対の円形透かし孔を持つと思われる。胎土は２～４㎜の礫、長石・石英粒、クサリ礫、雲母、砂粒を含んでいる。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。底面に藁状圧痕、７㎜幅の棒状圧痕が残っている。

埴輪H　残存高 21.8㎝、底部径 32.9㎝、底部高 10.5 ～ 11.3㎝、突帯間隔 9.8㎝。突帯の形状は（ｃ）で、幅 1.6㎝、高さ 0.7㎝である。基底は幅７～８㎝の２枚の粘土帯を同じ側に貼り合わせて輪を形作っており、その上に２～3.5㎝幅の粘土紐を積み上げている。接合痕が良く観察できる。

外面調整はタテハケによる１次調整だけで、ハケ原体は８本 /㎝、原体幅は約３㎝である。タテハケはやや斜め方向に丁寧に施されている。底部下端にナデ調整を加える。内面調整はタテ・斜め方向のハケナデ、指ナデを施し、底部下端をヨコナデする。突帯貼付け位置にはヨコナデを施している。

胎土は２～８㎜の長石・石英粒、クサリ礫、砂粒を多く含む。土師質（硬質）である。色調は１段目と２段目以上とでは明瞭に異なっている。１段目は内外面ともに明赤褐色を示し、それ以外は内外面ともに灰褐色を呈している。また、２段目の内外面調整の残り具合は悪いが、１段目は明瞭に残っ

ている。おそらく１条目突帯以下が埋められていて、風化を免れたためだと思われる。

埴輪Ｉ　残存高 20.5㎝、底部径 32.0 × 26.5㎝、底部高 10.3 ～ 10.7㎝、突帯間隔 9.5㎝。突帯の形状は（ｃ）で、幅 1.6㎝、高さ 0.7㎝を測る。横断面が楕円形を呈する円筒埴輪である。

基底は幅４㎝ほどの２枚の粘土帯を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に２～ 2.5㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整は１段目がタテハケ、２段目はタテハケと斜めハケによる１次調整だけで、ハケ原体は８本 /㎝、原体幅は約３㎝である。タテハケは垂直方向に丁寧に施されている。

内面調整は斜め方向のハケナデを施し、突帯貼付け位置は細かく指オサエする。下端はヨコナデを行う。底面に棒状圧痕、藁状圧痕、木目痕が残っている。胎土は１～５㎜の長石・石英粒、砂粒、雲母を含んでいる。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。

埴輪Ｊ　残存高 30.3㎝、底部径 28.8㎝、底部高 7.5 ～ 9.5㎝、突帯間隔 9.5㎝。１条目突帯剥離面に突帯間設定の幅５㎜の凹線が残っており、１段目の凹線までの間隔は 6.5 ～ 8.5㎝である。

突帯の形状は（ｂ）で、幅 2.3㎝、高さ 0.7㎝を測る。基底は 3.5 ～５㎝幅の２枚の粘土帯を交互に貼り合わせて輪を作り、その上に２～ 4.5㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整は表面の風化によりかなり不明瞭であるが、３条目突帯上面にタテハケが認められ、タテハケによる１次調整が行なわれていたことが分かる。１段目はナデ上げを施し、２段目以上は Bd 種ヨコハケによる２次調整を施す。静止痕の間隔は４㎝前後である。内面調整はタテ・斜め方向の強い指ナデを施している。

３段目に２孔１対の円形透かし孔を持つと思われる。底面に棒状圧痕、木目痕が残っている。

胎土は２～４㎜程の長石・石英・黒色粒・チャート、砂粒、ケサリ礫を含んでいる。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈している。

埴輪Ｋ　残存高 31.5㎝、底部径 29.6㎝、底部高 10.7 ～ 10.9㎝、突帯間隔 9.9 ～ 10.2㎝。３条目突帯剥離面に突帯設定の痕跡が破線状に残っている。突帯の形状は（ｄ'）で、幅 2.2㎝、高さ 0.5㎝を測る。

基底は７～８㎝幅の粘土帯３枚を時計回りに貼り合せて輪を形作り、その上に 1.5 ～ 2.5㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整だけで、ハケ原体は４～５本 /㎝である。３段目の外面調整は２段目以下に比べて風化によりかなり不明瞭となっていることから、２条目突帯までが埋まっていた可能性がある。内面調整は板状工具による斜め方向のナデを丁寧に施し、突帯貼り付け位置と下端に指オサエを加えている。粘土帯付近は接合痕を良く残している。

３段目に２孔１対の円形透かし孔を持つ。胎土は１～２㎜の長石・石英・チャート、砂粒を含んでいる。土師質（軟質）で、内外面ともに橙色を呈する。底面に 0.8 ～ 2.2㎝幅の棒状圧痕が残っている。出土状況から埴輪 18 が上部片である可能性が高いが、接合面を失っているため判断できない。

埴輪Ｌ　残存高 24.8㎝、底部径 30.0㎝、底部高 8.5㎝、突帯間隔 8.6㎝。突帯剥離面に突帯間設定の３㎜幅の凹線が見られ、凹線までの間隔は１段目 8.3㎝、２段目 8.5㎝である。突帯の形状は（ｄ）で、幅 2.0㎝、高さ 0.5㎝を測る。基底は５㎝幅の粘土帯をおそらく２枚以上貼り合わせて輪を形作り、その上に２㎝、３㎝、3.5㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整は１段目と３段目が風化と剥離により不明瞭になっているが、２段目の様子からタテハケによる１次調整だけと判断できる。タテハケは真っ直ぐ丁寧に施されている。ハケ原体は８本 /㎝で、原体幅は 2.7㎝である。

内面調整は、基底の粘土帯にタテナデを施し、それ以上は粘土紐ごとに斜め方向の指ナデを施して

いる。ナデは接合位置にほとんど及んでおらず、接合痕が大変目立っている。

３段目に２孔１対の円形透かし孔を設けている。胎土は２～６㎜の石英・長石粒などが多く、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質（硬質）で、内外面ともに橙色を呈する。

埴輪M　４段目の一部を欠いているが、全形は５条突帯６段構成に復元できる。高さ 61.7㎝、口縁部径 36.0㎝、底部径 24.3㎝、底部高 11.0 ～ 11.6㎝、突帯間隔 10.0 ～ 10.2㎝、最上段高 10.2㎝である。

口縁の形状は（b）。突帯の形状は（b'）で、幅 2.2㎝、高さ 0.6㎝を測る。基底は幅６㎝程の粘土帯を２枚以上貼りあわせて輪を形作り、その上に２～３㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整を行っているが、突帯付近や１段目でわずかに確認できるだけである。１段目は板状工具によるナデ上げを施し、２段目～５段目はBb 種ヨコハケによる２次調整を施しており、突帯間を１周のヨコハケで満たすことが出来ないため、ヨコハケを２周させている。静止痕の間隔は１周目が 3.8 ～５㎝、２周目は 4.5 ～７㎝、静止痕はやや斜めに傾いている。最上段はヨコハケを２周させ、口縁部に強いヨコナデを加えている。ヨコハケ原体は４～７本 /㎝である。

内面調整は１段目～２段目には斜め方向の指ナデ、３段目～最上段はヨコナデ、突帯貼り付け位置は指オサエを行う。粘土紐の接合痕がナデ消されずに良く残っている。

３段目に２孔１対の円形透かし孔が残っている。おそらく５段目にそれと直交する透かし孔を持っていたと推測される。底面に棒状圧痕が残っている。胎土は砂粒、１～ 10㎜の石英・長石粒などを多く含んでいる。須恵質で、内外面ともに灰黄褐色を呈する。

埴輪N　おそらく横断面が楕円形の円筒埴輪になると思われる。残存高 17.0㎝、底部径 30.0㎝、底部高 10.5㎝である。突帯の形状は（c）で、幅 1.7㎝、高さ 0.7㎝を測る。基底は幅６㎝程の粘土帯を２枚以上貼り合わせて輪を形作っていると考えられ、その上に１～２㎝幅の粘土紐を積み上げる。

外面調整はタテハケによる１次調整だけで、２段目はその後にヨコナデを施して、タテハケをナデ消している。ハケ原体は９本 /㎝である。内面調整は粘土帯を斜め方向に指ナデし、突帯貼り付け付近は広く指オサエしている。２段目は斜め方向のナデを行う。粘土紐の接合痕は内面調整を施しているにも関わらず大変目立っている。底面に棒状圧痕、藁状圧痕が残っている。胎土は砂粒、１～５㎜の石英・長石粒などが目立っている。土師質（硬質）で、内外面はにぶい橙色～橙色を呈している。

埴輪O　最上段との接合面を失っているが、全形は７条突帯８段構成と推定される。復元高 64.9㎝、口縁部径 37.4㎝、底部径 24.0㎝、底部高 8.2㎝、突帯間隔 7.8 ～ 9.0㎝、最上段高 5.7 ～ 6.5㎝である。

７条目突帯剥離面に突帯間設定の２㎜幅の凹線が２条見られる。凹線までの間隔は最上段で 7.5 ～８㎝である。口縁の形状は（b）で、上面は強いヨコナデによりM字状になっている。

突帯の形状は（b）で、幅 1.8㎝、高さ 0.7㎝である。上端は接合痕を丁寧にナデているが、下端は接合痕が良く残っており、１次調整のタテハケが突帯を越えて施されているようすが観察できる。基底は５～６㎝幅の粘土帯を時計回りに３枚貼り合わせて輪を形作り、その上に 1.5 ～３㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整のあと、１段目を除いてBc 種ヨコハケによる２次調整を施す。静止痕の間隔は３～７㎝で一定しておらず、４・７段目の静止痕はやや傾いている。最上段はヨコハケを２周させており、静止痕の間隔はいずれも 8.5㎝である。タテハケは原体幅約 5.5㎝で、６本 /㎝、ヨコハケ原体は６本 /㎝。突帯間に施されているヨコハケの幅とタテハケ原体幅はほぼ同じであることから、同一工具を使用していたと推測できる。

内面調整は１段目～５段目にタテ方向に強い指ナデを施している。６・７段目はヨコ方向の強い指

ナデ、最上段はヨコハケの後、突帯貼り付け位置と粘土紐接合痕に指オサエを行う。ヨコハケ原体は６本/㎝で、外面調整のハケ工具と同一と考えられる。

透かし孔は8.5×５㎝の楕円形で、３段目と６段目に２孔１対で穿孔されているが、直交していたたかは不明である。透かし孔の形状は、突帯間幅が他の埴輪と比べてかなり狭いことに規制された結果であろう。最上段に逆「ノ」字状のヘラ記号が付けられている。底面に棒状圧痕、藁状痕が残っている。胎土は１～４㎜の石英・長石粒が目立ち、砂粒を多く含んでいる。須恵質で、灰色を呈す。

埴輪16　上から５段目までの破片である。埴輪Ｃ内に落ち込んだ状態で検出したもので、出土状況・内外面の調整・胎土・焼成状態などから埴輪Ｃの上部と考えられるが、接合面を失っているため確定できない。残存高45.3㎝、口縁部径38.5㎝、最上段高10.2～10.7㎝。突帯間隔は２段目9.6～9.8㎝、３段目9.1～9.3㎝、４段目9.7㎝である。３条目突帯剥離面に突帯間設定の２㎜幅の凹線がわずかに観察できる。口縁の形状は（b）、突帯の形状は（b）で、幅2.0㎝、高さ0.8㎝を測る。

外面調整はタテハケによる１次調整の後、Bc種ヨコハケ（板ナデ）を施すが、ヨコハケ原体条数は緻密で抽出できない。２段目～３段目は突帯間を１周のヨコハケで施し、静止痕の間隔は3.5～5.7㎝である。最上段は突帯間隔が広く、１周のヨコハケでは満たすことが出来ないため、ヨコハケを２周させている。静止痕の間隔は１周目が３～６㎝、２周目は4.7～5.7㎝である。そのあと上端をヨコナデする。

内面調整は斜め方向に強くナデを施し、突帯貼り付け付近は広く指オサエ・ヨコナデをする。その後、斜め・ヨコ方向に横位の爪状圧痕を残す。最上段は斜め方向のナデの後、上端を丁寧にヨコナデしている。胎土は１～２㎜の長石・石英・チャート・黒色粒、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質（軟質）で、橙色を呈している。３段目に「×」状のヘラ記号を描いている。

４段目に９×7.7㎝の２孔１対の円形透かし孔を持つ。埴輪Ｏ・埴輪17を除き、検出している円筒埴輪の透かし孔は１段置きに配置されている。埴輪16が埴輪Ｃの上部であると仮定した場合、３段目と５段目に直交方向に２孔１対の円形透かし孔を持つ７条突帯８段構成の円筒埴輪に復元することができるが、高さは76㎝となり、全形を復元している円筒埴輪（埴輪Ｄ・Ｋ・Ｍ・Ｏ）の高さが61.7～65㎝であることを考えると、約１段分高いものとなる。第９図で埴輪が据えられていた状態を見てみると、他の埴輪より１段分深く埋められている様子が分かる。埴輪Ｃは他の埴輪より器高が高かったと考えられるが、おそらく、深く埋設することで埴輪列の高さを調整していたものと推測される。

埴輪17　上から４段目までの破片である。埴輪Ｃ内および周辺から検出されたものであるが、周囲に樹立している埴輪とは形状が異なるため、墳丘上から流出した埴輪と考えられる。

残存高37.0㎝、口縁部径38.2㎝、最上段高10.5～10.7㎝、突帯間隔は10.0～10.4㎝である。口縁の形状は（b）で、端部が外反し、上面は強いヨコナデによりM字形を呈する。突帯の形状は（b'）で、幅2.1㎝、高さ0.7㎝である。埴輪製作においては1.8～３㎝幅の粘土紐を積み上げているが、接合痕はほとんどナデ消されている。

外面調整はタテハケによる１次調整だけで、最上段はその後に端部を強くヨコナデする。ハケ原体は６本/㎝である。内面調整は斜め方向に強い指ナデを施した後、突帯貼り付け位置には２条の強いヨコナデ、最上段端部は丁寧にヨコナデを行う。

径６～７㎝の円形透かし孔が各段ごとに直交する位置に２孔１対で穿孔されている。このような透かし孔の配置を持つ円筒埴輪は他に確認していない。胎土は２～５㎜の石英・長石・チャート、砂粒を含む。土師質（硬質）で、橙色を呈す。

埴輪18　上から3段目までの破片である。埴輪K内に落ち込んだ状態で検出されたもので、出土状況・内外面の調整・胎土などから埴輪Kの上部と考えられるが、接合面を失っているため確定できない。残存高34.0cm、口縁部径32.6cm、最上段高10.7cm。突帯間隔は2段目が10cm、3段目は10.5cmである。1条目突帯剥離面に突帯間設定の4mm幅の凹線が見られ、凹線までの間隔は最上段で10.8cmである。口縁の形状は（c）で、端部が僅かに外反する。突帯の形状は（d'）で、幅2.3cm、高さ0.5cmである。

外面調整はタテハケによる1次調整だけで、最上段はその後に端部をヨコナデする。ハケ原体は4～5本/cmである。

内面調整は板状工具による斜め方向のナデを施し、突帯貼り付け位置と粘土紐接合痕に指オサエを加えている。胎土は3mmの長石・石英・チャート、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質で、内外ともに橙色を呈している。

埴輪18が埴輪Kの上部であると仮定した場合、全形を5条突帯6段構成に復元することができ、高さ63cmで、3段目と5段目に直交方向に2孔1対の円形透かし孔を持つ円筒埴輪となる。

埴輪19　埴輪N西側の土坑から出土した埴輪である。埴輪Gに対面する埴輪と考えられるが残りが悪く、樹立していなかった。基底部には径22cmの破片と、緩く湾曲する直線的な破片があり、横断面が楕円形の円筒埴輪であった可能性がある。実測図は底部径22cmで復元している。底部高は8.7cmで、突帯の形状は（e）で、幅1.5cm、高さ0.5cmである。

基底は幅4cm程の粘土帯で形作られ、その上に2～3cm幅の粘土紐を積み上げているようである。

風化が著しく内外面の調整は不明瞭であるが、2段目の外面にB種ヨコハケが観察できる。

胎土はクサリ礫、2～3mmの石英・長石・チャート、砂粒を多く含む。土師質（軟質）で、橙色を呈している。底面に棒状圧痕が残っている。

埴輪20　埴輪H の西側で検出した円筒埴輪の基底部である。底部径26.8cm、底部高は9.8cm。突帯の形状は（d）で、幅2.0cm、高さ0.5cmを測る。基底は約6cm幅の粘土帯の上に、1.5～2cm幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる1次調整の後、2段目以上はB種ヨコハケによる2次調整を施し、下端はヨコナデする。タテハケ原体は4本/cm、ヨコハケ原体は5本/cmである。

内面調整はタテ方向の強い指ナデを行っている。胎土は2～6mmのチャート・石英・長石、砂粒、クサリ礫、雲母を含む。土師質（硬質）で、にぶい赤褐色を呈す。底面に棒状圧痕が残る。

埴輪21　造り出し西側際で検出した埴輪である。底部径32.0cm、底部高11.0cmを測り、底部下端を打ち欠いている。突帯の形状は（a）で、幅2.0cm、高さ1.1cmを測る。

胴部径32.0cmを測り、粘土紐接合面で大きく剥離している。突帯と本体の境目には丁寧な調整がほとんどなされておらず、突帯粘土幅がそのまま観察できる。

外面調整はタテハケ（8本/cm）による1次調整を行い、内面は風化により調整が不明瞭であるが、斜め方向にハケナデを施しているようである。円形透かし孔が穿孔されているが、配置は不明。

胎土は2～3mmの長石・石英・チャート、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質（軟質）で、橙色を呈す。今回の調査では2列の埴輪列を閉じる南北方向の埴輪列を確認することができていないが、埴輪20・21がその痕跡である可能性も考えられる。

埴輪22～32　円筒埴輪の口縁部である。口縁部形状から、（b）埴輪22～25、（c）埴輪26～31、（d）埴輪32に分類することができる。いずれも上面は強いナデにより、M字形をなすものが多い。

最上段の外面調整を観察した限りでは、タテハケによる1次調整だけのものはほぼ土師質に、2次調整のヨコハケを施すものは土師質（硬質）・須恵質に焼成されている。しかし、外面調整と口縁

形状とは互いに規制されていない。

埴輪 23 は接合しないが埴輪Ｍの口縁部である。弧状のヘラ記号が付けられている。

埴輪 26 は埴輪Ｏと同じ特徴を持つものである。口縁部径 36.0㎝、最上段高 5.8㎝、突帯間隔 8.9㎝。口縁の形状は（ｃ）で、やや外反気味に立ち上がる。突帯の形状は（ｅ）で、幅 1.6㎝、高さ 0.5㎝を測り、上端は丁寧なヨコナデ調整をするが、下端は雑なヨコナデや連続の指オサエを行う。外面調整はタテハケによる１次調整の後、２次調整のＢc 種ヨコハケを施しており、静止痕の間隔は 3.4 ～ 7.4 ㎝である。口縁部に逆「ノ」字状のヘラ描きを付している。

透かし孔は残存状態から楕円形と思われる。最上段高・突帯間隔が狭い、透かし孔、内外面の調整、突帯調整の様子、胎土などが埴輪Ｏと共通しており、同類型の埴輪と考えられる。

埴輪 27 は口縁部径 32.4㎝、最上段高 9.9㎝、突帯間隔 9.2㎝を測り、口縁の形状は（ｃ）で、少し傾きながら立ち上がる。突帯の形状は断面台形（ｄ）で、幅 2.0㎝、高さ 0.5㎝を測り、突帯付近を幅広くヨコナデしている。外面調整はタテハケ（板ナデ）による１次調整の後、Ｂd 種ヨコハケによる２次調整を行っている。静止痕の間隔は３㎝前後、ヨコハケ原体は 11 ～ 13 本 /㎝で非常に密で抽出し難い。

最上段は１周のヨコハケでは満たすことができずヨコハケを２周させるが、上半に加えられた２周目のヨコハケは雑である。内面調整は斜め方向のハケナデの後、突帯貼り付け位置および接合痕に指オサエを加えている。内外面は同一のハケ原体を使用している。埴輪Ｃ内からの出土であるが、樹立している埴輪に同じ特徴を持つものは見られない。

埴輪 32 は口縁部形状が（ｄ）である。上端は丸みを帯び、強くヨコナデしている上面は内側に若干肥厚する。外面調整は２次調整にＢ種ヨコハケを施し、内面は強くヨコナデする。

埴輪 33 ～ 43　突帯部付近の破片で、突帯の形状により５種類に分類している。（ａ）埴輪 42・43、（ｂ）埴輪 38 ～ 41、（ｃ）埴輪 34、（ｄ）埴輪 35 ～ 37、（ｅ）埴輪 33。

埴輪 40 は接合しないが埴輪Ｇの短軸側の一部分であろう。透かし孔を持っているが、既に埴輪Ｇには長軸側の３段目に透かし孔の穿孔が認められるため、おそらく５段目以上に位置すると思われる。突帯は（ｂ'）で、幅 2.3㎝、高さ 0.7㎝。外面の２次調整はＢc 種ヨコハケ（７本 /㎝）で、静止痕はやや傾いている。静止痕の間隔は約５㎝である。

埴輪 41 は突帯部下端に３個の刻み目が残っている。左から右に抜けており、突帯部調整後につけられた痕跡である。ハケ工具のアタリとも考えられるが、他例がなく詳細は不明である。外面調整はタテハケによる１次調整の後、Ｂd 種ヨコハケを施しているが、１周のヨコハケでは満たせなかったようで、ハケナデ状に２周目を施している。

埴輪 42・43 の突帯形状は（ａ）で、確認しているのはこの２点と埴輪 21 だけである。突帯と本体の接合面はほとんどナデ調整されておらず、突帯粘土幅がよく分かる。いずれも器壁は 1.5㎝と厚く、内外面はハケメ調整を行っている。

他に、ヘラ記号のある破片が出土している（埴輪 34・39・40・44・45）。ヘラ記号はヘラ描きによるものであるが、全体の様子は不明で、描かれている位置は分からない。描かれている位置の分かる個体では埴輪Ｍ・埴輪Ｏ・埴輪 25 が口縁部に、埴輪 16 は上から３段目に認められる。確認できる絶対数が少なすぎるが、口縁部やその近くに描かれているようである。

２）朝顔形埴輪（第 20 図、図版 11）

埴輪 46　埴輪Ｊ内に落ち込んだ状態で検出した朝顔形埴輪の受部～口縁部である。胎土・焼成状態からは埴輪Ｊと同一個体とは考えられず、また、周囲の埴輪とも様相を異にすることから、墳丘上の

埴輪が流れ落ちたものと考えられる。

口縁部径 55.7cm、最上段高 10.2cm、突帯部径 41.0cmを測る。口縁部はやや外反気味に大きく広がり、端部はさらに外反して先端部を外側へ引き出す。突帯は上面を強くヨコナデしたことで断面M字形となっている。外面調整は口縁部にタテハケ（5本/cm）を施したあと、突帯付近を強くヨコナデしている。受部は丁寧にヨコナデしている。内面は口縁部に斜め・ヨコ方向のハケ目（5本/cm）を施したあと、受部にヨコ・斜め方向の強い指ナデ調整をしている。内外面のハケは同一原体による。

胎土は2～7mmのチャート・石英・長石、クサリ礫、砂粒、雲母などを多く含んでいる。土師質（硬質）で、橙色を呈している。

埴輪47　口縁部突帯である。突帯部径は約41cmで、埴輪46と同じ大きさの口縁部になると思われる。突帯は強くヨコナデされ、幅2cm、高さ1.1cmのややM字形の断面台形となっている。

外面調整はタテハケ（7本/cm）を施し、突帯付近を強くヨコナデする。内面はタテハケ（7本/cm）のあと、受部をヨコナデしている。内外面のタテハケは同一原体による。胎土は1～2mmの長石・石英、砂粒を含んでいる。土師質（硬質）で、橙色を呈している。

埴輪48　頸部である。突帯は幅3cm、高さ1.5cmの断面台形である。突帯貼り付け位置を溝状にヨコナデした様子が観察でき、突帯貼り付け後に受部の外面にタテハケを施している。

内面は突帯までをヨコハケ調整、以下はナデ調整である。胎土は1～5mmのチャート・長石、砂粒を含む。土師質で、橙色を呈す。

3）形象埴輪（第20図、図版11）

造り出し（第Ⅱトレンチ）で出土した形象埴輪は蓋形埴輪である。

埴輪49　飾り板の破片である。タテハケの後、ミガキ状の調整を行っている。並行する2条の線刻と、上位の線刻と交差する1条の線刻が認められる。裏面は剥離が著しく線刻を確認できなかった。

埴輪50　笠部中位突帯付近である。突帯は幅2.3cm、高さ約0.5cmの扁平で幅広いものである。風化により調整はかなり不明瞭であるが、笠部は外面にヨコハケ調整を施し、内面はナデ、台部との接合部は指オサエしているようである。

埴輪51　笠部中位突帯付近である。突帯は幅2.2cm、高さ0.4cmで、断面形は扁平で幅広である。突帯部の復元径は37.8cmである。笠部はタテハケ（5本/cm）を施し、突帯周囲に幅広くヨコナデを行っている。笠下半部内面はヨコ方向に強く指ナデし、台部との接合位置には密に指オサエを加えている。

2．土師器（第21図　図版12）

52　小型壺である。埴輪C内からほぼ完形で出土しており、口縁部を一部欠損しているが、打ち欠いた様子は見られない。口径7.1cm、口縁部高2cm、器高7.1cm、胴部最大径8.4cmを測る。体部は扁球形で、底面は座りが良いように小さな平坦面を作っている。内湾気味の口縁部は外に開いて立ち上がる。外面体部下半はヨコ方向のヘラケズリを施し、上半部から口縁部は丁寧にヨコナデする。内面は底面を指ナデ、体部から口縁部はヨコナデ調整を行っている。胎土は1～2mm大の長石・石英粒、クサリ礫、雲母を含んでいる。

3．須恵器（第21・22図　図版12・13）

53　杯蓋である。口径12.7cm、器高4.8cmを測る。天井部は丸みを帯びており、口縁部は外反し、端部は内傾する。天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。天井部外面は回転ヘラケズリ調整を行っているが、その施される範囲は天井部全体の2/3以上に及んでいる。内面は丁寧な回転ナデ調整を行

い、中央部に不定方向のナデを施している。

54　杯身である。口径 10.4cm、器高５cmを測る。底部は丸みを帯びており、立ち上がりは高く、弓なりに内傾する。端部は内傾する広い凹面を呈しており、器壁は薄くシャープな感がある。受部は比較的長く上外方に延び、全体に鋭角的な作りである。受部内面に沈線が廻っている。

底部外面は回転ヘラケズリ調整し、その範囲は体部との境まで及ぶ。底部内面は回転ナデ調整を行う。内外面には風雨に晒されて荒れた状況が残り、底部外面はそれが大変顕著である。胎土には黒色微粒が多く含まれている。

55～57　有蓋高杯蓋である。内湾気味の口縁部が直下に下り、端部は内傾して段を持っている。天井部は少し丸みを帯びているが、53 に比べるとかなり平坦である。天井部と口縁部の境の稜は鋭さを失い、小さく突出するだけである。ツマミは高さを失っており、かなり扁平である。

天井部外面の回転ヘラケズリ調整は、全体の２/３程で、回転ナデの範囲が広くなっている。内面は回転ナデ調整を丁寧に行い、中央部に不定方向のナデを施す。

杯蓋・有蓋高杯蓋は破片を多く検出しているものの、全形を知り得る資料は少ないため、両者の区別はツマミの有無で判断しているが、口縁の形状でもその違いが認められる。杯蓋の口縁は外反し、端部は内傾しているが、段を有していない。それに対して、有蓋高杯蓋は口縁部がやや丸みを帯びて直下に下り、端部は内傾して、段を有するという特徴をもっている。

58～61　有蓋高杯である。59 は埴輪Ｃ内から割れた状態で小型壺とともに出土している。立ち上がりから受部にかけての破片が多く出土しているが、杯身との区別はつかない。立ち上がりは高く、54 のように外反するものと、58 のように直線的に内傾するものの二者があり、端部は内傾するもの、内傾して凹面をなしているもの、内傾して明瞭な段を有するものなど多様である。受部は長く上外方に延び、先端は比較的鋭い。杯底部はあまり丸みを帯びておらず扁平である。脚部はハの字形に外反して、裾が大きく広がる。端部は基本的に外傾面を呈しており、凹線を廻らす、直立する、あるいは強い回転ナデにより小さく外反するなど、端面にはかなりバラエティーが認められる。杯部外面底部を回転ヘラケズリする他は、丁寧に回転ナデ調整を施している。中位に円形透かし孔を三方に伴っている。

62～66　甕である。62 の口頸部は緩やかに外反し、口縁下に断面三角形の鋭い凸線を２条有する。凸線間には文様は無く、頸部上位に斜めに傾く波状文を施している。内外面は回転ナデ調整。

63 は小型の甕である。口頸部は外反し、端部が上方に延びる。肩部がなだらかに落ちた位置で最大径を持ち、やや角張った球体を呈している。外面体部上半はタテ方向に平行タタキ、下半はヨコ方向に平行タタキを施したあと、体部中位にカキ目調整を行う。内面底部は強く指ナデし、その他は回転ナデ調整する。口頸部から口縁部にかけては強い回転ナデによって鋭角的になっている。

64 は口頸部が緩やかに外反し、端部は肥厚せず上方に摘み上げている。断面三角形の鋭い凸線を２条廻らせ、各凸線下に波状文（10～14 本／１条）による文様帯を有する。外面肩部に平行タタキが認められ、他は回転ナデ調整を施している。

65 は口頸部が大きく外反し、口縁下端が凸線状を呈している。外面口頸部は回転カキ目調整、体部は平行タタキのあと回転カキ目調整を行っている。内面は口頸部を回転ナデ調整し、体部は同心円文の当て具痕をスリケシ調整している。

66 は大きく外反する口頸部は比較的短く、口縁端部は台形状に肥厚する。体部上位１/３にその最大径を持ち、扁球体を呈している。体部外面は２/３を正立状態で上方から下方へ平行タタキを施し、１/３は倒立させて体部から底部に向かって平行タタキを施している。ガラス質の自然釉が掛かっ

ている。内面は回転ナデ調整のあと、体部は同心円文の当て工具痕を半スリケシ調整している。

67・68　器台である。67は台部から脚部上半と脚部下半の資料である。接合面を失っているが、脚部の波状文、焼成状態、器面調整などが似通っていること、さらに同様の特徴を持った三角形透かしと長方形透かしを有する脚部片が認められることから、同一個体であると判断した。

高さ43.3cm、口径33.1cm、底径28.8cmを測る。台部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は上方で小さく外反し、端部は上方に伸びる。口縁下に2条、体部中位に1条の凸線を廻らせ、その間に波状文（8～10本/1条）を2条配している。体部中位以下の外面には平行タタキ痕が明瞭に残り、内面は同心円文の当て具痕をスリケシ調整している。脚部はハの字形に外反してひらき、裾部近くで「く」の字形に内湾する。端部は面をなしており、内面端部が接地している。

脚部は2条一組の凸線を4段に配し、凸線間に振幅の大きな波状文（8～10本/1条）が2条施されている。最上部には凸線が廻らず、クシ工具のアタリが屈曲部に残っている。凸線は上下に凹線を廻らせることで目立たせた隆起線である。透かし孔は上2段が長方形、下2段が三角形で、千鳥状に開けられている。内外面調整は回転ナデによる。

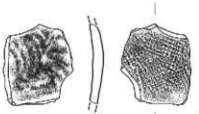
68は高さ36.5cm、口径33.6cm、底径26.3cmを測る。67に比べて台部の立ち上がりは直線的である。口縁部は外反し、端部は上方に伸びる。端面は強い回転ナデが加えられて凹面状を呈しており、内面にも凹線状のへこみが入る。口縁下に2条、体部中位に1条の凸線を廻らせ、凸線間に2条の波状文（10本/1条）を配している。外面には体部下半から底部に平行タタキが施され、凸線より下をカキメ調整している。内面は回転ナデで調整されているが、平行タタキが施される位置には同心円文の当て具痕が残り、意識的にスリケシ調整されている。

脚部はハの字形に外反してひらき、裾部近くで内湾する。端面は、内面端部が接地している。2条一組の凸線を3段に配しているが、下段は凹線の方が目立っている。最上部には凸線を廻らせていない。凸線で画された文様帯は3段で、カキ目を施したあと、上・下段は3条、中段は2条の波状文（10本/1条）を施している。透かし孔は三角形で、千鳥状に開けている。

内面は回転ナデ調整で、裾部や上部に指オサエを加えている。台部との接合面にクシ目を入れて接着し易くしている。

4．韓式系土器（第13図）

韓式系土器の破片1点（69）が出土している。外面に格子タタキが施され、内面は同心円文の当て具痕をスリケシ調整している。甕の体部片と思われる。土師質で、にぶい橙色を呈している。



（S＝1/3）　69

第13図　第Ⅱトレンチ出土韓式系土器

＜第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチ＞

1．埴輪

第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチ検出の埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪があり、墳丘流出土、内濠埋土、「造り出し」に隣接する平坦面直上からの出土である。いずれも破片で、墳丘上の埴輪が崩れ落ちたものと考えられるが、第Ⅰ・Ⅳトレンチは第Ⅱトレンチに隣接して設けられたトレンチであることから、造り出しから流れ込んだ可能性もある。

１）円筒埴輪（第 23・24 図　図版 16）

埴輪１～３　円筒埴輪の口縁部である。口縁部形状により（ｂ）埴輪１、（ｃ）埴輪２・３の２種類を確認している。埴輪３は口縁部径 30㎝を測り、口縁は大きく外反して、上面は強いヨコナデによりわずかにＭ字形をなしている。外面調整はタテハケによる１次調整の後、Ｂc 種ヨコハケ（８～15 本 /㎝）による２次調整を施し、内面はヨコハケ調整（９本 /㎝）する。外面にヘラ記号が描かれており、第Ⅱトレンチ埴輪Ｏや埴輪 26 と同じ記号になると思われる。

埴輪４～18　突帯部付近の破片である。突帯の形状により５種類に分類しているが、ａ類は出土していない。（ｂ）埴輪 12～18、（ｃ）埴輪６・７、（ｄ）埴輪８～11、（ｅ）埴輪４・５である。

埴輪４・５の突帯は幅 1.4～1.5㎝、高さ 0.5㎝の幅狭で扁平な断面台形である。いずれも外面にはＢ種ヨコハケによる２次調整を行い、内面は斜め・ヨコハケを施している。

埴輪７は突帯幅 1.4㎝、高さ 0.7㎝を測り、幅狭で突出度の高い断面台形の突帯である。タテハケによる１次調整のあと、Ｂ種ヨコハケによる２次調整を施している。ヨコハケは突帯上端まで及んでおり、２周以上させている。内面は強い指ナデを行っている。

埴輪９は円形透かし孔を持つ胴部片で、突帯は幅 2.1㎝、高さ 0.5㎝の幅広で突出度の低い断面台形である。外面はＢb 種ヨコハケによる２次調整を施しており、ヨコハケを２周させている。静止痕は上下で同じ位置にそろっている。

内面は斜め方向に幅広くナデ調整し、突帯貼り付け位置にはヨコナデを加えている。

埴輪 10 は外面にタテハケによる１次調整のあと、ヨコハケによる２次調整を施しているが、強いナデ上げにより、ほとんどナデ消されている。内面は強い指ナデによる。須恵器のように硬く焼き締まっている。

埴輪 19・20　円筒埴輪の基底部である。埴輪 20 は底部径 33.8㎝、底部高 10.5㎝、突帯は扁平で幅広な（ｄ）で幅 2.0㎝、高さ 0.4㎝を測る。外面調整はタテハケによる１次調整のあと、２段目以上はヨコハケ調整している。底面に幅２㎝程の棒状圧痕が残っている。

２）朝顔形埴輪（第 24 図　図版 16・17）

埴輪 21・22　口縁部突帯である。いずれも口縁部内外面はタテハケ調整している。

埴輪 23～25　頸部突帯である。突帯には断面三角形（埴輪 24）と断面台形（埴輪 23・25）があり、内面調整では前者は突帯貼り付け位置を境に受部側をタテハケ、肩部側をヨコハケ調整し、その間に指オサエを加えている。後者は受部を斜め・ヨコハケ調整し、接合部と肩部には指オサエ・ナデ・ヨコナデを行っている。埴輪 25 の外面調整は、受部に斜め方向の強い指ナデ、肩部にヨコハケを施し、突帯付近は幅広くヨコナデしている。肩部上位に透かし孔（円形？）を持つ。

３）形象埴輪（第 24 図　図版 17）

埴輪 26　蓋形埴輪の飾り板で、内縁を残す資料である。表面にはタテ方向にハケ調整が施され、内縁に並行するような２条の線が刻まれている。

埴輪 27　牛形埴輪の角 [2] の可能性がある。残存長 7.5㎝、最大幅 3.3㎝。先細りの円錐を内湾させた形である。中空で、内側に絞ったような痕跡が残っており、棒状の物に粘土板（紐）を貼り付けて形作ったようである。外面は丁寧にナデ調整を加えている。第Ⅲトレンチ内濠埋土からの出土である。

埴輪 28　家形埴輪の壁破片である。側廻突帯を大きく欠いているが、上に開口部が設けられている。内側には床状の表現がなされているが、約２㎝幅の張り出し部が廻るだけで、吹き抜け状になっている。壁から床までを一続きで形作っている。内外面の風化が著しく調整は不明瞭である。

<外濠部>

1．埴輪

遺物は外濠埋土内、あるいは外濠内に貼りついた状態で出土しており、堤に並んでいた埴輪が外濠内に落ち込んだものと思われる。出土している埴輪はいずれも破片で、かなり風化している。

1）円筒埴輪（第25・26図　図版14）

埴輪1～4　円筒埴輪の口縁部である。埴輪1は口縁端部を丸くおさめている（b）。外面は斜め方向のハケ調整を施し、口縁上端は幅広くヨコナデを行っている。内面は斜め方向に指ナデしている。

埴輪2の口縁部形状は（b）。外面調整はタテハケによる1次調整の後、Bd種ヨコハケによる2次調整を施す。タテ・ヨコハケ原体は6～9本/cmで、同一工具によるハケ調整と思われる。内面はタテハケの後、斜め方向の指ナデを行う。タテハケは外面調整のハケ工具と同一のものを使用しているようである。接合痕はナデ消されず目立っている。

埴輪3・4の口縁部形状は（a）で、口縁部径32.4～33.6cm、最上段高は9.1～10.0cm。突帯形状は（b'）で、幅2.2～2.7cm、高さ0.6～0.7cmである。外面調整は2次調整にB種ヨコハケを施し、ヨコハケの静止痕は垂直である。最上段はヨコハケを2周させている。ハケ原体は4～6本/cmで、ハケ調整が同一工具で行われたことが推測される。内面はヨコナデし、突帯貼り付け位置は指オサエを加えている。焼成は須恵質で、硬く焼き締まっている。胎土は石英・長石粒が大変多く目立っている。

埴輪5～16　突帯部付近の破片である。埴輪6は外面にヨコハケによる2次調整を施した後、3.5cm幅の鋸歯文の文様帯をヘラ描きする。突帯形状は（d'）で、幅2.3cm、高さ0.5cmを測る。

埴輪7・8は外面にタテハケによる1次調整を施しており、ハケ原体の条数は密である（9～10本/cm）。内面は指ナデ調整し、突帯貼り付け位置は指オサエしている。突帯形状は（d'）で、幅1.9～2.0cm、高さ0.4～0.5cmである。胎土には石英・長石・白色粒が大変多く目立っている。

埴輪15の突帯は断面三角形で、幅1.7cm、高さ0.7cmを測る。外面はヨコナデ、内面はヨコハケ（4～6本/cm）調整している。

埴輪16は突帯の形状は（b）を呈し、幅2.0cm、高さ0.7cmを測る。外面調整はタテハケによる1次調整のあと、2次調整のB種ヨコハケを施しており、静止痕は突帯に対してほぼ垂直である。ハケ原体条数は6本/cmで、タテ・ヨコハケ調整は同一工具によるものと思われる。胎土は1～6mmの石英・長石・黒色礫、砂粒が大変多く目立っている。

埴輪17～19　円筒埴輪の基底部である。埴輪17は土師質で、外面に1次調整のタテハケが残っている。内面調整は風化により不明瞭であるが、斜め方向にナデを行っているようである。

輪埴18は須恵質で大変硬く焼き締められている。外面は強く指ナデされ、下端にハケによる調整痕が見られる。内面は斜め方向に強い指ナデを施す。底面に棒状圧痕、藁状圧痕、粘土帯の貼り合わせ痕が残っている。

埴輪19は底部径28.0cmを測る。外面調整はタテハケによる1次調整のみで、ハケ原体の条数は密である（9～11本/cm）。内面は斜め方向に強い指ナデを施し、下端には指オサエを加えている。胎土、焼成、調整の様子から埴輪8の基底部であると推測される。

２）形象埴輪（第 26・27　図版 14 ～ 16）

形象埴輪は蓋形埴輪（埴輪 20 ～ 28）、家形埴輪（埴輪 29・30）、不明形象埴輪（埴輪 31）が出土している。

①蓋形埴輪

埴輪 20 ～ 23 は飾り板である。

埴輪 20 は器面にハケ調整（８本 /㎝）を施し、表裏に文様を刻んでいる。文様は相対して刻まれていないようであるが、内縁に沿って緩く弧線を描く２条の平行線と下端でそれと重なるであろう直線が配されている。赤色顔料がわずかに残っている。

埴輪 21 は器面の摩滅が進んでいるが、わずかにハケ調整が観察できる。文様は表裏で若干異なっているが、基本的には内縁に沿うやや直線的な２条の平行線と、上方に２条の弧線を刻んでいる。図向かって左の面の弧線は上部で閉じている。

埴輪 22 は器表面に不定方向にハケ調整（８～９本 /㎝）を施し、表裏に２条の平行する弧線を刻んでいるが、線刻は粗雑で、相似形にはなっていない。

埴輪 23 は器面の摩耗が著しいが、片面にハケ調整（９本 /㎝）が残っている。表裏で文様の描き方が異なっており、図向かって右の面は２条の平行線が鈍角に屈曲して開き、反対の面には緩く弧を描く２条の線を刻んでいる。この面に赤色顔料がわずかに残っている。

埴輪 24・25 は飾り板の交差部分の破片である。相対する２枚の飾り板を繋げてから、直交する他の２枚の飾り板を取り付けたようすがわかる。かなり風化しているが表面に施されたハケ調整が部分的に観察できる。飾り板に線刻は観察できない。赤色顔料がごくわずかに残っている。

埴輪 26 は飾り板受部である。内面上部には飾り板の剥離面が残っている。摩耗により内外面の調整は不明瞭であるが、塗布された赤色顔料がわずかに観察できる。胎土は精良である。

埴輪 27 は笠部中位突帯付近で、突帯を挟んで上下笠部が残っている。突帯は幅 2.2㎝、高さ 0.5㎝を測り、断面形は扁平で幅広である。表面は風化しており外面調整は不明瞭であるが、笠下半部内面は同心円状に強いヨコナデを行い、台部との接合位置には指ナデ、指オサエをしている。表面には赤色顔料が塗布された形跡がある。

埴輪 28 は笠下半部である。「く」の字状を呈し、屈曲部から上はタテハケ、下はヨコハケを施している。ヨコハケは向かって右から左へ工具を動かして、2.5㎝間隔の真直ぐな静止痕を残している。これは、方形板の右側が上に重なるような笠部をヨコハケの静止痕で表現しているものである。ハケ原体の条数は５本 /㎝。内面は横位に強いヨコナデを施している。

②家形埴輪

埴輪 29 は家形埴輪の屋根部分で、四注部のコーナーにあたる。幅４㎝、高さ 0.6㎝の水平方向に廻る突帯が残っている。摩耗のため内外面の調整は不明瞭である。外面に赤色顔料が薄く残っている。

埴輪 30 は屋根と壁の接合部分である。内部には幅 2.1㎝、高さ 1.1㎝の張り出し部が廻り、貼り付け位置を強くヨコナデしている。壁内面は斜め方向に指ナデを行う。屋根部分は摩耗が著しく、調整や網代などの表現は観察できない。

③不明

埴輪 31 は種別不明の破片であるが、径 4.5㎝程の筒状ないし棒状のものに取り付き、それを中心に３方向に延びていたようである。表面の調整は不明である。

その他の遺物（第27図）

ここでは第Ⅱ・Ⅲトレンチ、外濠部で出土した埴輪以外の遺物についてまとめて報告する。

1～4　外濠部外濠埋土からの出土である。

1は須恵器杯身で、口径10.8㎝、器高4.0㎝を測る。内外面はロクロナデし、口縁端部は強いヨコナデにより玉縁状を呈する。7世紀後半。

2・3は瓦器椀である。2は口径11.8㎝で、内面に平行線状ミガキがわずかに残っている。外面口縁部はヨコナデ、体部は指オサエする。3は粘土紐を貼り付けただけの形骸化した高台である。摩耗が著しく調整は不明瞭である。13世紀後半。

4は白磁椀の高台である。高台径7.0㎝、内面見込みに沈線が1条廻る。高台立ち上がりはケズリ調整を施し、外面は無釉である。これらの遺物は外濠の埋没時期を示すものである。

5・6　造り出し（第Ⅱトレンチ）検出時に後世の堆積層から出土したものである。

5は丁銀形土製品である。残存長6㎝、幅3㎝、厚さ1㎝。一見、元文元年（1736）～文化2年（1805）鋳造の元文丁銀、あるいは文政3年（1820）～天保8年（1837）鋳造の文政丁銀を模しているように思われるが、「文」字・「寶」字・「大黒・恵比寿像」の下に、おそらく「大黒・恵比寿像」が横位に配されているようである。型作りで、裏面には押圧時の指頭圧痕が残っている。上部に円孔が穿たれていることから、御守りとして首にかけていたものと考えられる。

6は左巻き三巴文軒丸瓦である。外縁幅は2㎝、外縁高は0.5㎝である。文様の出は浅く、扁平な感じを受ける。

7～9　第Ⅲトレンチの近世の堆積土から出土したものである。

7はロクロ成形の土師質土器皿である。口唇部に煤が付着している。

8は手捏ねの土師質土器皿である。口唇部に煤の付着が見られる。9は瀬戸・美濃焼天目碗高台である。外面は露胎、内面に鉄釉がかかる。（瀬川）

5．小結

今回の調査では、多くの新しい知見が得られた。以下、調査結果を述べたい。

① 外濠が内濠に並行して見つかった。また、外濠埋土内からは、円筒埴輪とともに形象埴輪が出土した。そして内濠と外濠の間の堤上には、埴輪が樹立していた可能性が高くなった。堤は、下端で推定幅6ｍ。外濠の外周が外堤状となるかどうかについては、確認できなかった。

② 今回検出された堤の位置は、内濠をはさんで造り出しの対岸（正面）にあたる。蓋・家形などの形象埴輪が出土した。

③ 堤は、過去の外濠部の調査成果を含め、ほぼ標高8.7～8.8ｍに揃っているが、古墳築造時の面は、後世削平を受けており、本来はそれより高い位置に面があったと考えられる。

④ 造り出し北側（第Ⅰトレンチ）で、造り出し裾の平坦面を画する石列が見つかった。その高さは標高8.7ｍである。地山上層（粘土層）を掘り下げ、地山下層（礫層）で成形されている。

⑤ 内濠底は標高約8.0ｍである。第1次調査によると、濠の深さは「地山を約1ｍほど掘り下げた程度」と推察されているが、今回の調査で検出した地山上層上面（標高9.4ｍ）からの深さは、1.4ｍとなる。

⑥ 幅3.8～4.5ｍ・長さ4ｍ以上の「造り出し」を確認した。造り出しからは2列の埴輪列を検出した。

⑦ 造り出しは地山を削り残して成形されており、古墳築造時に造り出しも造られたことがわかる。

⑧　造り出し南側埴輪列の埴輪Ｎより西には埴輪が見つからなかった。埴輪が見つからなかった地点の内側から、須恵器がまとまって出土した。

⑨　造り出しの内濠側は、大きく破壊されており、埴輪列は確認されなかったが、本来埴輪列は、他の古墳造り出し同様、ロの字ないしコの字に囲んでいたものと考えられる。

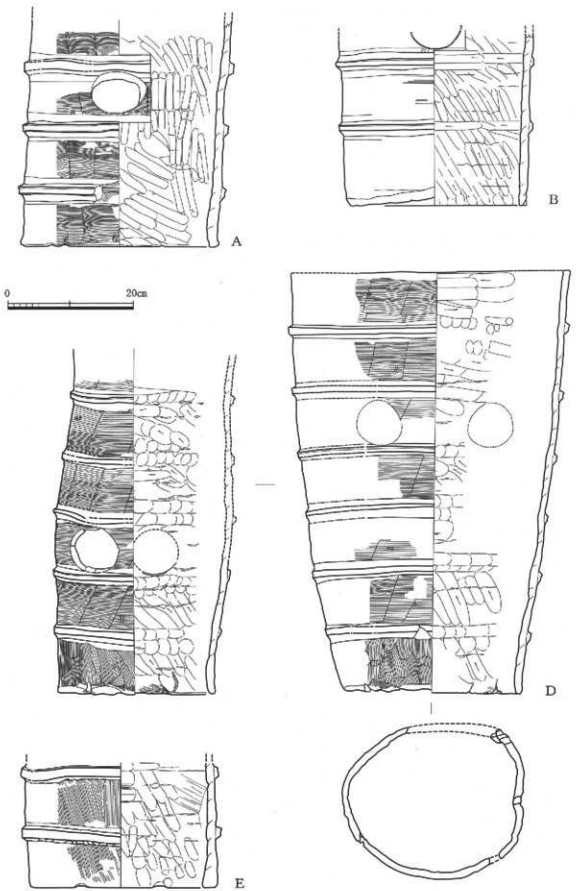
⑩　造り出し南側（前方部とのくびれ部分）では、形象埴輪・須恵器は検出できず、マツリの跡は確認されていない。

（中畔）

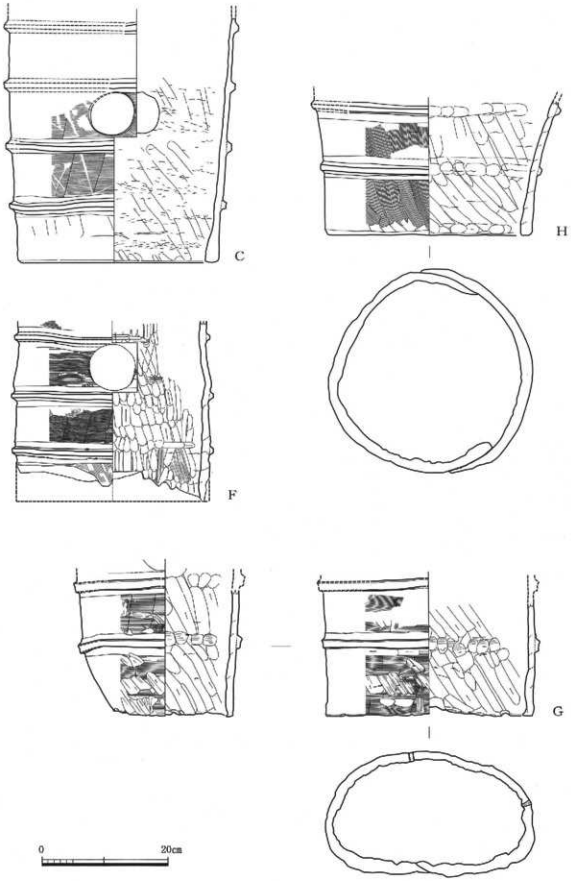
註

（１）形象埴輪については高橋克壽氏にご教示いただいた。

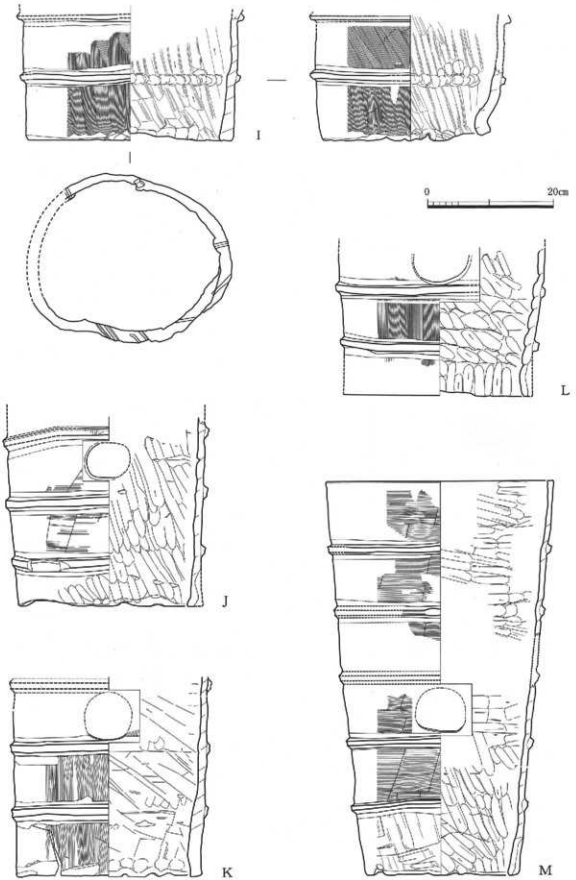
（２）牛形埴輪の出土は全国でも数例しか確認されていない。本例は中空であることや、他の形象埴輪と胎土が異なることなどから、土師器甕・甑などの把手の可能性も考えられる。



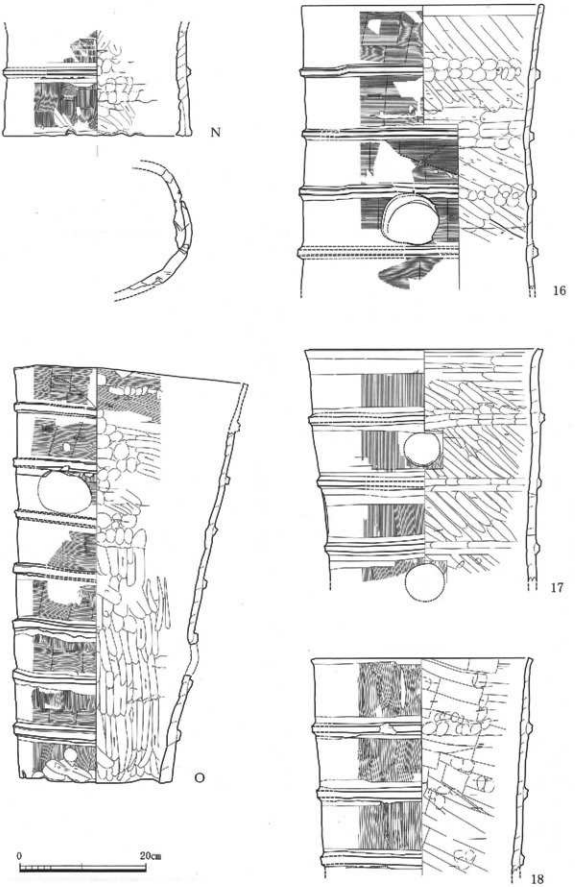
第14図　第Ⅱトレンチ出土埴輪（1）



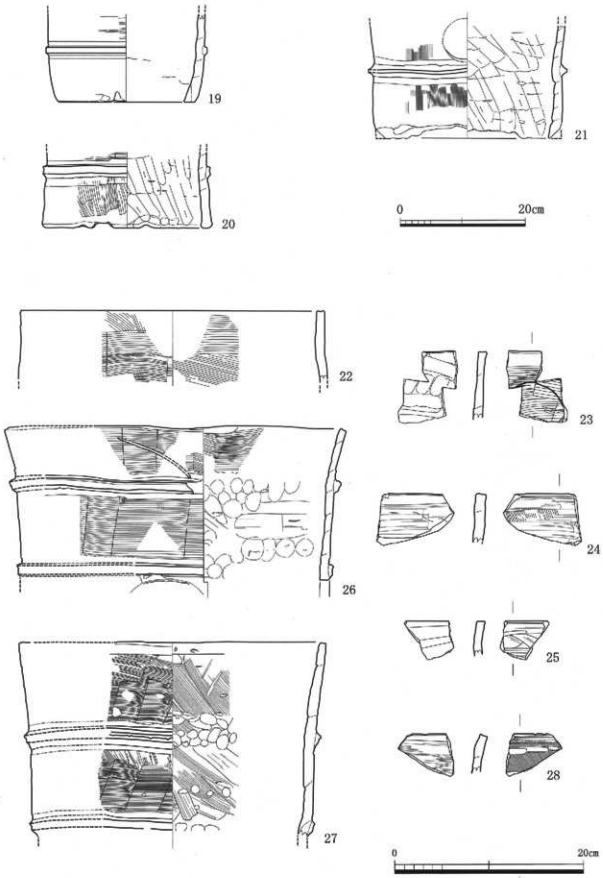
第15図　第Ⅱトレンチ出土埴輪（2）



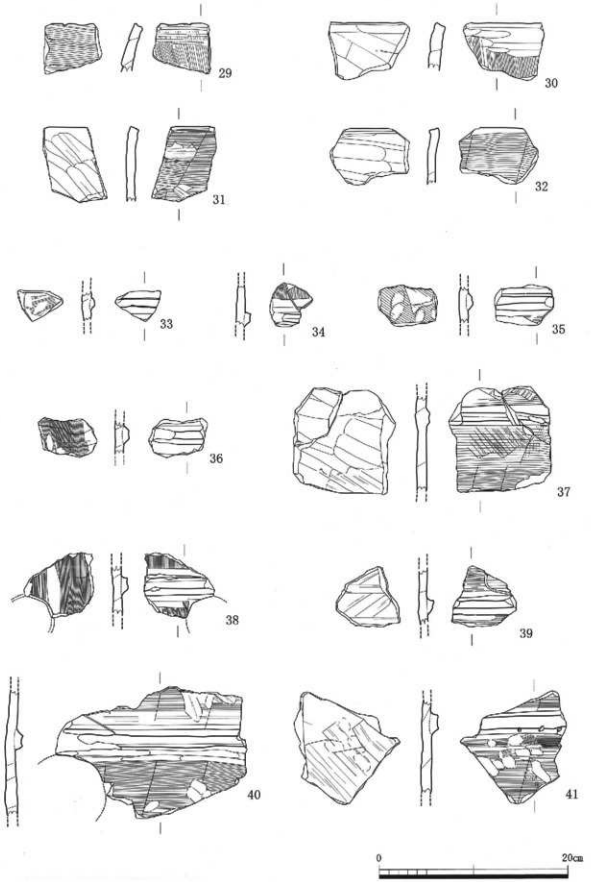
第16図　第Ⅱトレンチ出土埴輪（3）



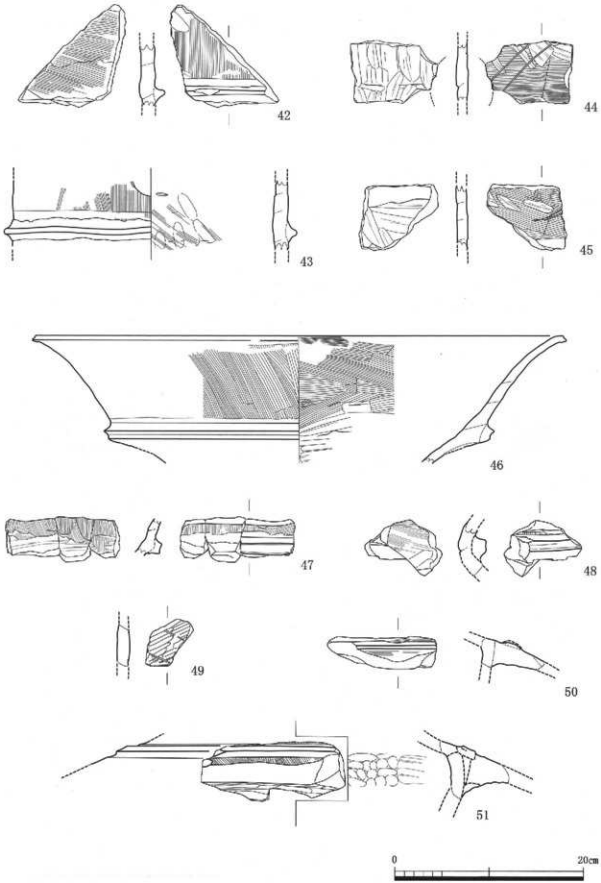
第17図　第Ⅱトレンチ出土埴輪（４）



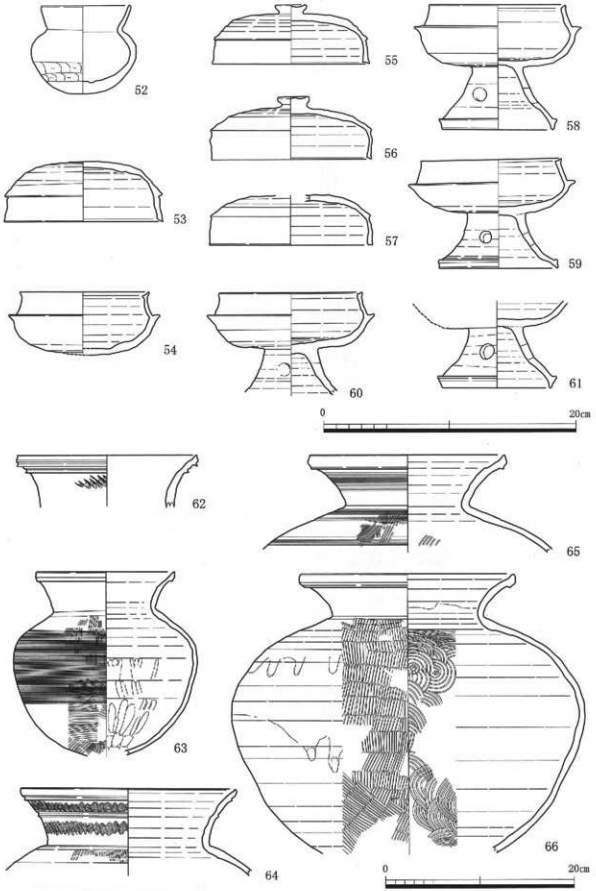
第18図　第Ⅱトレンチ出土埴輪（5）



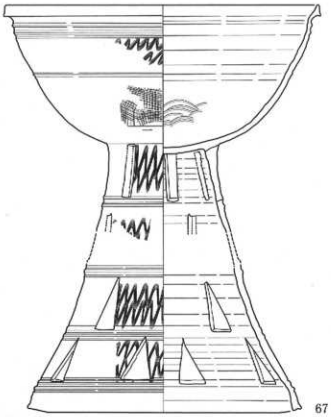
第19図　第Ⅱトレンチ出土埴輪（６）

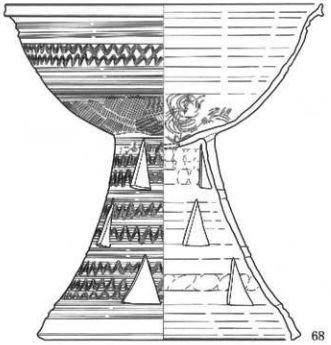


第20図　第Ⅱトレンチ出土埴輪（7）

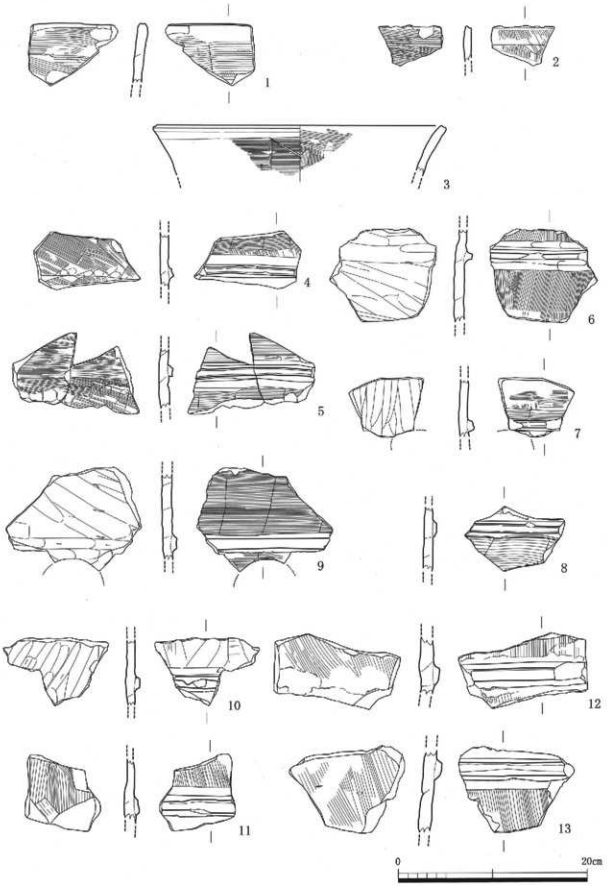


第21図　第Ⅱトレンチ出土土師器・須恵器

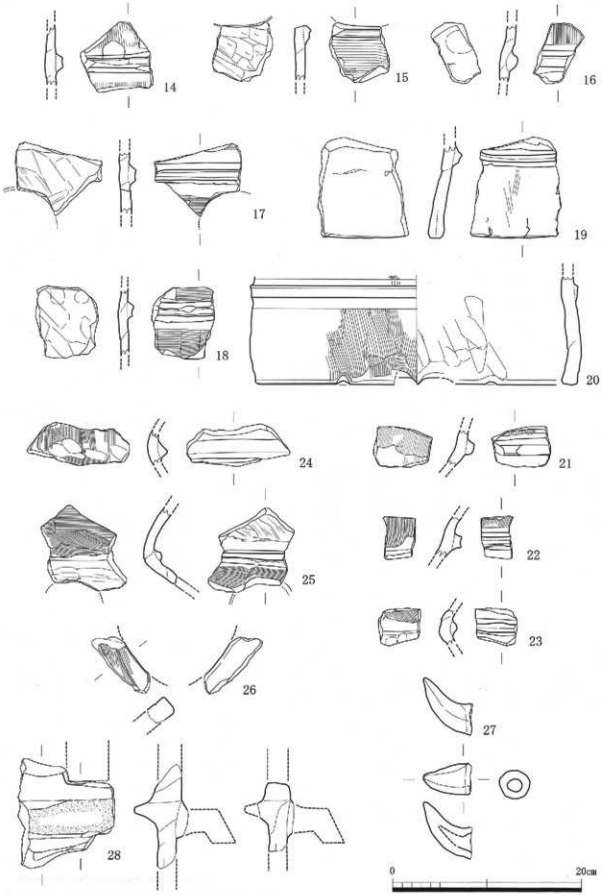




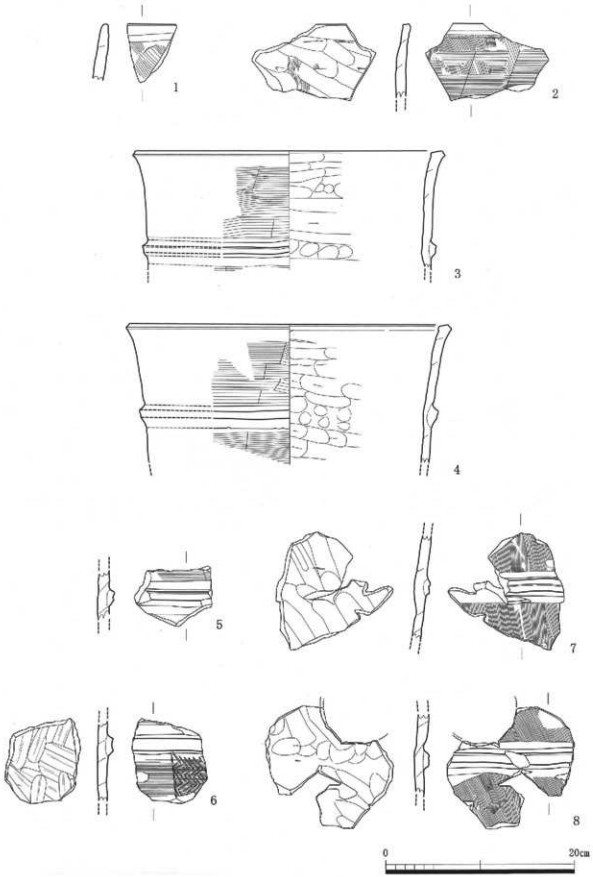
第22図　第Ⅱトレンチ出土須恵器



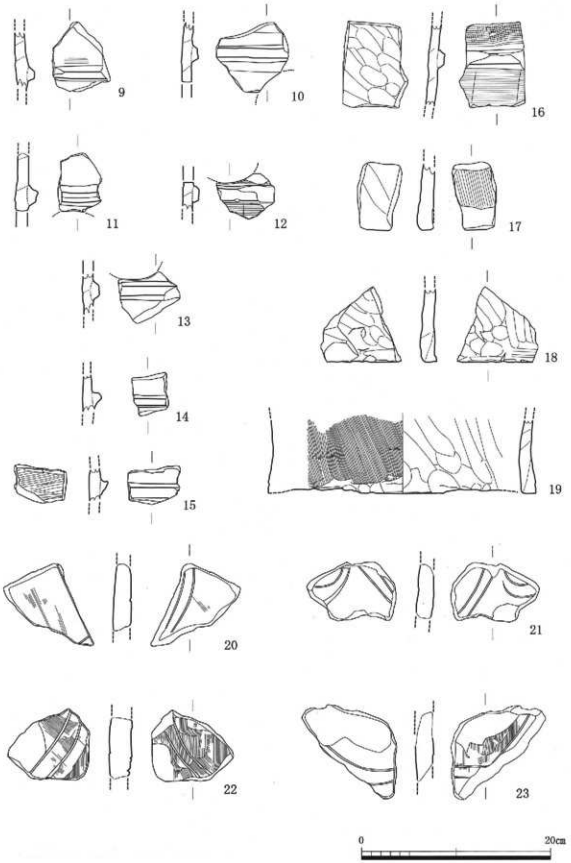
第23図　第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチ出土埴輪（1）



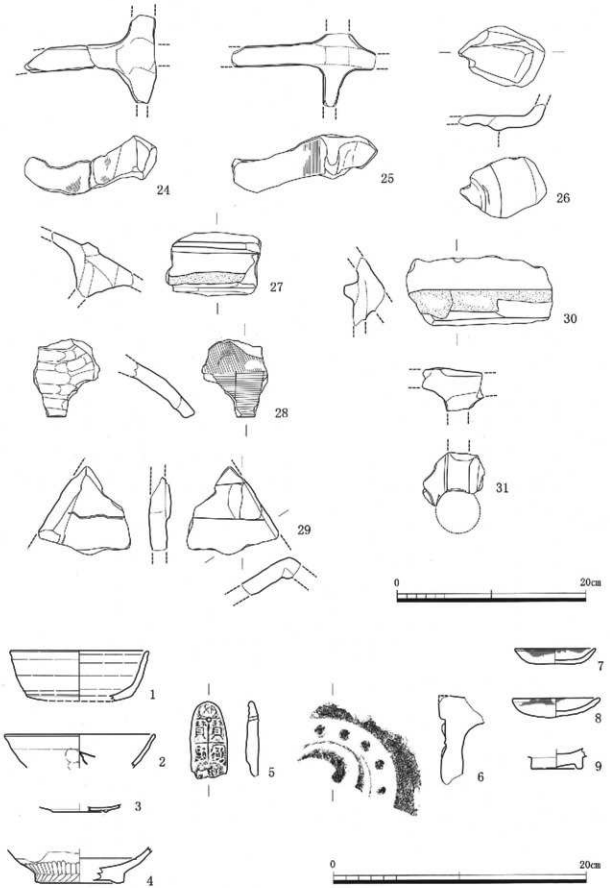
第24図　第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳトレンチ出土埴輪（2）



第 25 図　外濠部出土埴輪（1）



第26図　外濠部出土埴輪（2）



第27図　外濠部出土埴輪（3）、第Ⅱ・Ⅲトレンチ・外濠部出土遺物

遺物番号	出土位置	種別	部位	法量						強度	口縁部	突帯		焼成
				器高	底径	口径	底厚	突帯間隔	最上段幅	1段目/以上	形状	形状	幅/高S	
埴輪A	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～3段目	(36.5)	31.5	—	9.2～9.6	9.9～10.0 9.9～10.3	—	1.1～1.5 1.7	—	b	2.5 0.8	土師質
埴輪B	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(27.5)	28.6	—	12.9～13.1	10.1～10.3	—	1.0～1.4 1.5	—	b'	2.2 0.7	土師質
埴輪C	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～3段目	(39.9)	32.2	—	9.4～9.5	9.2～9.3 9.6～9.7 9.4～9.6	—	0.7～1.2 2.2	—	b	2.0 0.9	土師質
埴輪D	第Ⅱトレンチ	円筒	6条7段	65.0	28 × 24.5	44.2	9.7～10.7	10.0 9.8 9.1 9.3	8.5	0.9～1.2 1.3	b	b'	2.2 0.6	土師質 (硬質)
埴輪E	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(19.9)	29.8	—	9.4	9.7	—	1.2～1.4 1.3～2.3	—	b	2.0 0.8	土師質
埴輪F	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～3段目	(24.0)	30.6	—	8.5	9.4 8.8	—	0.9～1.3 1.5	—	c	1.5 0.7	土師質 (硬質)
埴輪G	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～3段目	(23.8)	32.4 × 18.7	—	12～12.5	9.5	—	1.0～1.2 1.1～1.5	—	b'	2.5～3.0 0.8	土師質 (硬質)
埴輪H	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(21.8)	32.9	—	10.5～11.3	9.8	—	1.0～1.2 1.1～2.0	—	c	1.6 0.7	土師質
埴輪I	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(20.5)	32.0 × 26.5	—	10.3～10.7	9.5	—	1.0 1.2～2.2	—	c	1.6 0.7	土師質 (硬質)
埴輪J	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～3段目	(30.3)	28.8	—	7.5～9.5	9.5	—	1.0～1.2 1.0～2.5	—	b	2.3 0.7	土師質 (硬質)
埴輪K	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～3段目	(31.5)	29.6	—	10.7～10.9	9.9～10.2	—	1.0～1.6 1.7～2.2	—	d'	2.2 0.5	土師質
埴輪L	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(24.8)	(30.0)	—	8.5	8.6		1.0～1.5	—	d	2.0 0.5	土師質 (硬質)
埴輪M	第Ⅱトレンチ	円筒	5条6段	61.7	24.3	36.0	11～11.6	10～10.2	10.2	0.8～1.0 1.0～1.8	b	b'	2.2 0.8	脆悪質
埴輪N	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(17.0)	(30.0)	—	10.5	—	—	1.5 1.5～1.8	—	c	1.7 0.7	土師質 (硬質)
埴輪O	第Ⅱトレンチ	円筒	7条8段	64.9	24.0	37.4	8.2	8.6 (8.0～8.2) 8.2～8.7 8.3～9.0 7.8～8.1 8.2～8.6	5.7～6.5	0.8～1.5 1.9	b	b	1.8 0.7	脆悪質
埴輪16	第Ⅱトレンチ	円筒	最上段～5段目	(45.3)	—	38.5	—	9.6～9.8 9.1～9.3 9.7	10.2～10.7	0.9 0.8～1.0	b	b	2.0 0.8	土師質
埴輪17	第Ⅱトレンチ	円筒	最上段～4段目	(37.0)	—	38.2	—	10.0～10.4 10.2～10.4	10.5～10.7	1.1～1.4 1.3～1.5	b	b'	2.1 0.7	土師質 (硬質)
埴輪18	第Ⅱトレンチ	円筒	最上段～3段目	(34.0)	—	32.6	—	10.0 10.5	10.7	0.7～1.2 1.0～1.3	c	d'	2.3 0.5	土師質
埴輪19	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(14.0)	(22.0)	—	8.7	—	—	1.2～1.3 1.3～2.0	—	e	1.5 0.5	土師質
埴輪20	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(12.1)	26.8	—	9.8	—	—	1.1 1.6～1.8	—	d	2.0 0.5	土師質 (硬質)
埴輪21	第Ⅱトレンチ	円筒	1段目～2段目	(17.9)	(32.0)	—	11.0	—	—	1.0～1.6	—	a	2.0 1.1	土師質
埴輪22	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	32.0	—	—	—	1.0	b	—	—	土師質
埴輪23	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.7～1.0	b	—	—	脆悪質

表3　第8次調査埴輪観察表（1）

色調	外面調整			内面調整	透かし孔	突帯貼付	備考
	1次調整	2次調整	1段目(最上段)		配置	設置技法	
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (5～8本/cm)	Bc種ヨコハケ (5～9本/cm)	タテハケ+ Bc種ヨコハケ	斜め、タテ方向の指ナデ。粘土紐の継ぎ目は丁寧にナデを加える。	3段目	匹線	底面に棒状圧痕。外面調整のタテ・ヨコハケは同一原板。突帯上部にハケ原板のトアタリが残る。
7.5YR6/8 橙色	タテハケ	ヨコハケ	—	斜め方向の指ナデ。突帯貼付け位置はヨコナデ。	3段目	—	基底部外端線を打ち欠いている。風化が著しく外面調整は不明瞭。
7.5YR6/8 橙色	タテハケ	Bc種ヨコハケ (板ナデ)	ナデ上げ	斜め方向の指ナデ。糸底が残位に残る。	3段目	—	外面基底部端にヨコナデ。ハケ原板の条痕は非常に粗で、抽出できない。6条7段に復元できる。
10YR6/4 にぶい黄橙色	タテハケ (4～7本/cm)	Bd種ヨコハケ (4～7本/cm)	タテハケ (4～7本/cm)	斜め方向の指ナデ。最上段と6段目はヨコナデ。突帯貼付け位置はヨコナデ・指オサエ。	3・5段目 (直交)	回線	最上段はヨコハケを2周させる。外面底部端をナデ調整する。
7.5YR6/8 橙色	タテハケ (5～6本/cm)	×	タテハケ (3～6本/cm)	指オサエ、斜め・ヨコ方向の指ナデ、ハケナデ。	—	—	底面に棒状圧痕。
7.5YR6/8 橙色	タテハケ (5本/cm)	Bd種ヨコハケ (10～12本/cm)	タテハケ (5本/cm)	タテ方向の指ナデ。1段目は1単位2cmのハケナデを施す。突帯貼付け位置はヨコナデ・指オサエを加えている。粘土紐継目は丁寧にナデ消されている。	3段目	—	Bd種の単立板ピッチは細かい。ハケ原体の条痕は非常に粗で、板ナデのよう。基底部を打ち欠いている。
5YR6/6 橙色	タテハケ (7本/cm)	Bc種ヨコハケ (7～8本/cm)	タテハケ+ Bb種ヨコハケ	斜め方向の強い指ナデ。突帯貼付け位置は細かくヨコナデする。	3段目	—	横断面が楕円形を呈する円筒埴輪。1段目のヨコハケは2周し、斜め方向のナデ上げを施す。
5YR5/6 明赤褐色	タテハケ (8本/cm)	×	タテハケ (8本/cm)	斜め・タテ方向のハケナデ・指ナデ。下端付近をヨコナデ。	—	—	外面タテハケは丁寧。外面底部下端をナデ調整する。
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (8本/cm)	×	タテハケ 斜めハケ (8本/cm)	斜め方向のハケナデ。突帯貼付け位置は細かく指オサエする。下端付近をヨコナデする。	—	—	横断面が楕円形。外面タテハケは丁寧。底面に棒状圧痕、籠状圧痕、本目痕。
7.5YR6/8 橙色	タテハケ	Bd種ヨコハケ	ナデ上げ	斜め・タテ方向の強い指ナデ。	3段目	匹線	3条目突帯端面にタテハケ残る。
5YR6/6 橙色	タテハケ (4～5本/cm)	×	タテハケ (4～5本/cm)	板状工具による斜め方向のナデ。突帯貼付け位置は粗く指オサエする。	3段目	回線？	埴輪18の下部から？5条6段に復元できる。
7.5YR7/6 橙色	タテハケ (8本/cm)	×	タテハケ (8本/cm)	粘土帯はタテナデ。それ以上は斜め方向の細かい指ナデ。	3段目	匹線	外面タテハケは丁寧
10YR6/2 灰黄褐色	タテハケ	Bb種ヨコハケ (4～7本/cm)	タテハケ+ 板状工具による なで上げ	1段目～2段目は斜め方向の指ナデ。3段目～最上段はヨコ方向の指ナデ。突帯貼付け位置は指オサエ。	3段目	—	ヨコハケは突帯間を2周する。底面に棒状圧痕。
7.5YR6/4 にぶい橙色	タテハケ (9本/cm)	×	タテハケ (9本/cm)	粘土帯は斜め方向の指ナデ。1条目突帯貼付け直上は指オサエ。2段目以上は斜め方向のナデ。	—	—	外面タテハケは丁寧に施される。底面に棒状圧痕。横断面が楕円形を呈する円筒埴輪か。
5YR5/1 灰色	タテハケ (6本/cm)	Bc種ヨコハケ (6本/cm)	タテハケ (6本/cm)	5段目まではタテ方向の強い指ナデ。6～7段目はヨコ方向の強い指ナデ。最上段はヨコ方向の後、突帯貼付け位置に指オサエ。	3・6段目	回線	最上段のヨコハケは2周する。透かし孔は楕円形で3・6段目に穿孔。最上段にへラ記号。
5YR6/6 橙色	タテハケ	Bc種ヨコハケ (板ナデ)	Bc種ヨコハケ (板ナデ)	斜め方向の強いナデ。突帯貼付け位置に指オサエ・ヨコナデ。斜めのヨコ方向に横位の爪状圧痕を加えている。最上段は斜め方向のナデの後、上端を丁寧にヨコナデしている。	4段目	回線	埴輪Cの上部か？。6条突帯7段構成、高さ64cm。透かし孔は3・4段に復元できる。3段目にへラ記号。最上段はヨコハケを2周する。
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (6本/cm)	×	タテハケ (6本/cm)	斜め方向の強い指ナデ。突帯貼付け位置に2条のヨコナデ。最上段端部はヨコナデする。	2～4段目 (直交)	回線？	埴輪Kの上部か？5条突帯6段構成、高さ63cmに復元できる。
5YR6/6 橙色	タテハケ (4～5本/cm)	×	タテハケ (4～5本/cm)	板状工具による斜め方向のナデ。突帯貼付け位置は指オサエする。	—	回線	埴輪Gの上部か？5条突帯6段構成、高さ63cmに復元できる
5YR6/8 橙色	—	B種ヨコハケ	—	不明瞭	—	—	埴輪Gと対面位置の埴輪か
5YR5/4 にぶい赤褐色	タテハケ (4本/cm)	B種ヨコハケ (6本/cm)	タテハケ (4本/cm)	タテ方向の指ナデ	—	—	
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (8本/cm)	×	タテハケ (8本/cm)	斜め方向のハケナデ?	—	—	円形透かし孔を持つ。風化が著しく内面調整は不明瞭。
10YR7/6 明黄褐色	タテハケ (5本/cm)	—	Bc種ヨコハケ (5～9本/cm)	ヨコハケ(5～7本/cm)	—	—	埴輪Aの口縁部か
2.5Y6/2 灰黄色	—	—	B種ヨコハケ	ヨコ方向のナデ、指オサエ	—	—	埴輪Mの口縁部 弧状のへラ描き

遺物番号	出土位置	種別	部位	法量						器壁厚	口縁部	突帯		焼成
				器高	底径	口径	最深部	突帯間隔	最上段高	1段目/以上	形状	形状	幅／高さ	
埴輪24	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	1.2	b	—	—	土師質
埴輪25	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.8	b	—	—	土師質
埴輪26	第Ⅱトレンチ	円筒	最上段～2段目	(16.7)	—	36.0	—	8.9	5.8	0.8 0.9	c	e	1.6 0.5	須恵質
埴輪27	第Ⅱトレンチ	円筒	最上段～2段目	(25.5)	—	32.4	—	9.2	9.9	0.9～1.1	c	d	2.0 0.5	土師質 (硬質)
埴輪28	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.8～1.0	c	—	—	土師質 (硬質)
埴輪29	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.1	c	—	—	土師質
埴輪30	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	1.2	c	—	—	土師質
埴輪31	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.8～1.0	c	—	—	土師質 (硬質)
埴輪32	第Ⅱトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.9	d	—	—	須恵質
埴輪33	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.8～1.0	—	e	1.4 0.4	土師質
埴輪34	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.7～1.0	—	c	1.6 0.6	土師質
埴輪35	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9	—	d	1.9 0.5	土師質
埴輪36	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9	—	d	2.0 0.5	土師質 (硬質)
埴輪37	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.1	—	d	2.1 0.4	土師質
埴輪38	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.0	—	b	2.1 0.6	土師質 (硬質)
埴輪39	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9	—	b	1.8 0.7	土師質 (硬質)
埴輪40	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.8～1.2	—	b'	2.3 0.7	土師質 (硬質)
埴輪41	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.8～1.1	—	b	2.4 0.8	土師質 (硬質)
埴輪42	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.5	—	a	1.7 1.1	土師質
埴輪43	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.5	—	a	2.3 1.0	土師質
埴輪44	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯間	—	—	—	—	—	—	1.0～1.3	—	—	—	土師質 (硬質)
埴輪45	第Ⅱトレンチ	円筒	突帯間	—	—	—	—	—	—	1.0	—	—	—	土師質 (硬質)
埴輪46	第Ⅱトレンチ	朝顔	受部～口縁部	(13.5)	—	55.7	—	—	10.2	0.7～1.2	—	—	2.1 1.1	土師質 (硬質)
埴輪47	第Ⅱトレンチ	朝顔	口縁部 突帯	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	土師質 (硬質)
埴輪48	第Ⅱトレンチ	朝顔	隣接突帯	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	土師質

表4　第8次調査埴輪観察表（2）

色調	外面調整			内面調整	透かし孔配置	突帯形成技法	備考
	1次調整	2次調整	1段目(最上段)				
7.5YR6/8 橙色	タテハケ	—	タテハケ(7本/cm)+ヨコナデ	ヨコ方向のハケナデ	—	—	ハケ痕体の条痕は非常に密で抽出できない
7.5YR6/4 にぶい橙色	—	—	ヨコハケ(5.4/cm)	ヨコナデ	—	—	ナデ上げの後、ヨコハケ調整する。
7.5YR5/3 にぶい褐色	タテハケ	Ba種ヨコハケ(6本/cm)	Ba種ヨコハケ(6本/cm)	最上段:ヨコハケ(6.4/cm)、2段目以下はヨコナデ、突帯貼り付け位置に指オサエ。	6段目？	—	埴輪Oと同じ特徴を持つ 透かし孔は円形 最上段にヘラ記号
7.5YR6/8 橙色	タテハケ	Bd種ヨコハケ(板ナデ)	Bd種ヨコハケ(板ナデ)	斜め方向にハケナデ(板ナデ)、突帯貼り付け位置・接合痕に指オサエ	—	—	最上段はヨコハケを消さるが、2段目のヨコハケは埴である。ハケ痕体の条痕は疎密で、抽出できない。
7.5YR6/4 にぶい橙色	タテハケ	—	タテハケ(12本/cm)	ヨコハケ	—	—	
7.5YR6/6 橙色	タテハケ	—	タテハケ(5〜6本/cm)+ヨコナデ	ヨコハケ(5〜6本/cm)	—	—	
10YR6/4 にぶい黄橙色	タテハケ	—	タテハケ(8本/cm)+ヨコナデ	斜め方向のナデ上げ、ヨコナデ	—	—	
5YR5/4 にぶい赤褐色	—	—	Bd種ヨコハケ(7本/cm)	斜め方向の強い指ナデ	—	—	ヨコハケを2周する
10YR6/2 灰黄褐色	—	—	B種ヨコハケ(5〜7本/cm)	強くヨコナデ	—	—	
5YR6/8 橙色	—	—	—	ヨコハケ(9本/cm)	—	—	
7.5YR5/4 にぶい褐色	タテハケ(8本/cm)	—	—	不明瞭	—	—	V字状のヘラ描き
7.5YR6/6 橙色	—	ヨコハケ	—	斜めハケ(6本/cm)、指ナデ	—	—	
7.5YR6/4 にぶい橙色	—	—	—	タテハケ(10〜13本/cm)	—	—	タテハケの条痕が非常に密
7.5YR5/6 明褐色	タテハケ	Bb種ヨコハケ(4〜7本/cm)	—	斜め方向の強い指ナデ	—	—	ヨコハケは2周させる
7.5YR5/4 にぶい褐色	タテハケ(12本/cm)	×	—	タテハケ(12本/cm)	—	—	タテハケの条痕が非常に密 円形透かし孔を持つ
10YR6/4 にぶい黄橙色	—	ヨコハケ(4本/cm)	—	斜めヨコナデ	—	—	ヘラ記号
5YR6/6 橙色	—	Bb種ヨコハケ(7本/cm)	—	斜め方向の指ナデ、突帯貼り付け位置は指オサエする。	5段目？	—	埴輪Gの短軸型(5段目以上)か。 円形透かし孔を持つ。ヘラ記号あり。
5YR6/8 橙色	タテハケ	Bd種ヨコハケ(7本/cm)+ハケ(板)ナデ	—	斜め方向のハケナデ	—	—	突帯下段に施み目
7.5YR7/6 橙色	タテハケ(6〜9本/cm)	×	—	ヨコハケ(6〜9本/cm)	—	—	突帯貼り付けがよく分かる。
10YR6/6 明黄褐色	タテハケ(8〜9本/cm)	×	—	斜め方向の指ナデ、ハケナデ	—	—	突帯貼り付けがよく分かる。 円形透かし孔あり
7.5YR5/4 にぶい褐色	—	B種ヨコハケ(9本/cm)	—	タテ方向のナデ	—	—	平行線状のヘラ記号。円形の透かし孔を持つ。
7.5YR6/4 にぶい橙色	—	Bb種ヨコハケ(8本/cm)	—	斜めヨコ方向のナデ	—	—	ヨコハケを2周以上施す。2条のヘラ記号。
5YR6/8 橙色	—	—	タテハケ(5本/cm)	口縁部はヨコ・斜めハケ、受部は強いヨコ方向のナデ	—	—	埴輪内から出土。口縁部タテハケ調整の後、突帯上端をヨコナデする
7.5YR6/6 橙色	—	—	タテハケ(7本/cm)	口縁部はヨコハケ(7本/cm)、受部はヨコナデ	—	—	突帯以下外面調整はヨコナデ
7.5YR6/6 橙色	—	—	—	受部はヨコハケ、以下はヨコナデ	—	—	突帯貼り付け後に、受部の外面は2次調整タテハケ、ヨコナデ調整。突帯貼り付け位置は丁寧にヨコナデ

遺物番号	出土位置	種別	部位	法量						最厚部	口縁部	突帯		焼成
				最高	底径	口径	底部高	突帯間隔	最上段高	1段目/以上	形状	形状	幅/高さ	
埴輪1	第Ⅲトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	1.0	b	—	—	軟質
埴輪2	第Ⅰトレンチ	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	c	—	—	土師質
埴輪3	第Ⅰトレンチ	円筒	口縁部	—	—	30.0	—	—	—	—	c	—	—	土師質
埴輪4	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	e	1.4/0.5	軟質
埴輪5	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.8～1.1	—	e	1.3/0.5	土師質
埴輪6	第Ⅳトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.8～1.1	—	c	1.4/0.7	軟質
埴輪7	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9	—	c	1.4/0.7	土師質(硬質)
埴輪8	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	d	1.9/0.4	軟質
埴輪9	第Ⅳトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.0	—	d	2.1/0.5	土師質(硬質)
埴輪10	第Ⅳトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.8	—	d	1.8/0.5	軟質
埴輪11	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.1	—	d	2.1/0.5	土師質
埴輪12	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.4	—	b	2.7/0.7	土師質
埴輪13	第Ⅲトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.2～1.4	—	b	2.2/0.7	土師質(硬質)
埴輪14	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	2.2/0.7	土師質
埴輪15	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	2.0/0.6	土師質(硬質)
埴輪16	第Ⅲトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	2.2/0.7	土師質
埴輪17	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.2	—	b	2.5/0.7	土師質(硬質)
埴輪18	第Ⅰトレンチ	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b'	2.0/0.7	土師質(硬質)
埴輪19	第Ⅰトレンチ	円筒	基底部	—	—	—	8.8	—	—	1.0～1.7	—	b	2.3/0.8	土師質(硬質)
埴輪20	第Ⅰトレンチ	円筒	基底部	—	33.8	—	10.5	—	—	1.2～1.7	—	d	2.0/0.4	土師質(硬質)
埴輪21	第Ⅰトレンチ	朝顔	口縁部突帯	—	—	—	—	—	—	1.0～1.2	—	—	1.6/0.9	土師質
埴輪22	第Ⅰトレンチ	朝顔	口縁部突帯	—	—	—	—	—	—	0.8～1.2	—	—	1.9/0.9	土師質(硬質)
埴輪23	第Ⅰトレンチ	朝顔	頸部突帯	—	—	—	—	—	—	0.9	—	—	1.7/0.7	土師質(硬質)
埴輪24	第Ⅲトレンチ	朝顔	頸部突帯	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.2/0.8	土師質
埴輪25	第Ⅰトレンチ	朝顔	頸部突帯	—	—	—	—	—	—	0.9～1.1	—	—	1.3/0.5	土師質(硬質)

表5　第8次調査埴輪観察表（3）

色調	外面調整			内面調整	透かし孔	突帯貼付	備考
	1次調整	2次調整	段目(最上段)		配置	設定技法	
10YR5/2 灰黄褐色	タテハケ	—	B種ヨコハケ (5～6本/cm)	タテハケ(6～7本/cm)	—	—	
7.5YR6/6 橙色	タテハケ	—	タテハケ (7本/cm) ＋ヨコナデ	ヨコハケ(7本／cm)	—	—	
7.5YR6/6 橙色	タテハケ	—	Bc種ヨコハケ (8～15本/cm)	ヨコハケ(9本／cm)	—	—	ヘラ記号
7.5YR6/4 にぶい橙色	タテハケ	B種ヨコハケ (11本/cm)	—	斜め方向のハケ(11本/cm)	—	—	内外面のハケ原体は同一
7.5YR6/6 橙色	—	B種ヨコハケ (8～9本/cm)	—	指ナデ、ヨコ方向のハケナデ(板ナデ)	—	—	
10YR5/2 灰黄褐色	タテハケ (6～9本/cm)	×	—	斜め方向の粗ナデ	—	—	
10YR7/4 にぶい黄橙色	タテハケ	Bb強ヨコハケ (10本/cm)	—	タテ方向の強い指ナデ	—	—	ヨコハケは突帯上端まで及び、2周以上施す。
10YR6/3 にぶい黄橙色	—	B種ヨコハケ (5本/cm)	—	ヨコ・斜めのナデ。突帯貼付け位置・接合痕を指ナデする。	—	—	
10YR6/4 にぶい黄橙色	—	Bb種ヨコハケ (9～10本/cm)	—	斜め方向の粗ナデ。突帯貼付け位置はヨコナデ。	—	—	ヨコハケは2周する。円形透かし孔を持つ
2.5Y6/1 黄灰色	—	ヨコハケ (板ナデか)	—	斜め方向の強い指ナデ	—	—	ヨコハケをナデ消している
10YR6/6 明黄褐色	タテハケ (5～6本/cm)	×	—	タテハケ(5～6本/cm)	—	—	内外面のハケ原体は同一
7.5YR5/4 にぶい褐色	タテハケ (5～6本/cm)	×	—	斜めハケ(5～6本/cm)	—	—	内外面のハケ原体は同一
5YR6/6 橙色	タテハケ (5～6本/cm)	×	—	タテハケ(5～6本/cm)	—	—	内外面のハケ原体は同一
5YR6/6 橙色	タテハケ (6本/cm)	×	—	ナデか?	—	—	
7.5YR6/4 にぶい橙色	タテハケ	ヨコハケ (4～5本/cm)	—	斜め方向のナデ(ハケナデ)	—	—	円形透かし孔を持つ
5YR6/6 橙色	タテハケ (10本/cm)	×	—	ナデ	—	—	
7.5YR5/3 にぶい褐色	タテハケ	B種ヨコハケ (7本/cm)	—	斜め方向のナデ	—	—	円形透かし孔を持つ
7.5YR6/6 橙色	—	Bc種ヨコハケ (7～9本/cm)	—	ナデ	—	節線	ヨコハケの静止痕の間隔は2～2.5cm 突帯剥離面に、突帯設定の痕跡あり。
7.5YR6/6 橙色	—	—	タテハケ	不明瞭	—	—	粘土帯を貼りあわせている
5YR6/6 橙色	タテハケ	ヨコハケ	タテハケ (5～6本/cm)	斜め方向の指ナデ	—	—	底面に棒状圧痕、篠状圧痕
7.5YR7/6 橙色	—	—	タテハケ (7本/cm)	タテハケ(8～9本/cm)	—	—	外面受部はヨコナデ
7.5YR6/6 橙色	—	—	タテハケ (7～8本/cm)	口縁部はタテハケ(8本/cm)、受部はヨコナデ	—	—	外面受部はヨコナデ
7.5YR7/6 橙色	—	—	—	受部はタテハケ(8本/cm)、肩部はナデ	—	—	
7.5YR6/6 橙色	—	—	—	受部はタテハケ(7～9本/cm)、頸部はヨコハケ(7～9本/cm)	—	—	
7.5YR6/6 橙色	—	—	—	受部はヨコハケ(7～9本/cm)、頸部はヨコナデ、接合部は指オサエ	—	—	外面受部はナデ上げ、肩部はヨコハケ(7～8本/cm)。肩部に透かし孔を持つ

遺物番号	出土位置	種別	部位	法量						器壁厚	口縁部	突帯		焼成
				器高	底径	口径	底部高	突帯間隔	最上段高	1段目/以上	形状	形状	幅/高さ	
埴輪1	外濠内	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	1.1	b	—	—	土師質
埴輪2	外濠内	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.7～1.0	b	—	—	須恵質
埴輪3	外濠内	円筒	最上段～2段目	(12.6)	—	32.4	—	—	10.0	0.9～1.1	a	b'	2.2 0.6	須恵質
埴輪4	外濠内	円筒	最上段～2段目	(14.7)	—	33.6	—	—	9.1	0.8～1.0	a	b'	2.7 0.7	須恵質
埴輪5	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.1～1.3	—	d'	1.9 0.5	土師質 (硬質)
埴輪6	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.1	—	d'	2.3 0.5	土師質 (硬質)
埴輪7	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.7～1.0	—	d'	1.9 0.4	須恵質
埴輪8	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.1	—	d'	2.0 0.5	須恵質
埴輪9	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	1.7 0.8	土師質
埴輪10	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	2.0 0.7	土師質
埴輪11	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.2	—	b	2.2 0.9	土師質
埴輪12	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	1.9 0.6	土師質
埴輪13	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	2.1 0.7	土師質
埴輪14	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.7 0.8	土師質
埴輪15	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.7 0.7	土師質 (硬質)
埴輪16	外濠内	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.0	—	b	2.0 0.7	土師質 (硬質)
埴輪17	外濠内	円筒	基底部	—	—	—	—	—	—	1.3～1.6	—	—	—	土師質
埴輪18	外濠内	円筒	基底部	—	—	—	—	—	—	1.1～1.6	—	—	—	須恵質
埴輪19	外濠内	円筒	基底部	(7.8)	28.0	—	—	—	—	0.9～1.5	—	—	—	須恵質

表6　第8次調査埴輪観察表（4）

色調	外面調整			内面調整	透かし孔配置	突帯貼付設定技法	備考
	1次調整	2次調整	最下(最上)段				
7.5YR7/6 橙色	タテハケ	—	タテハケ (5～7本/cm)	斜め方向の指ナデ、口縁はヨコナデ	—	—	外面口縁はヨコナデ
10YR6/2 灰黄褐色	タテハケ (6～9本/cm)	—	B種ヨコハケ (6～9本/cm)	タテハケ(9本/cm)の後、斜め方向に指ナデ、口縁はヨコナデ	—	—	外面口縁はヨコナデ。接合痕が目立つ
2.5Y7/1 灰白色	—	—	B種ヨコハケ (4～6本/cm)	ヨコナデ・指オサエ、突帯貼付け位置は指オサエ	—	—	外面口縁はヨコナデ、ヨコハケは2周する
2.5Y7/2 灰黄色	—	B種ヨコハケ (6～7本/cm)	B種ヨコハケ (4～6本/cm)	ヨコナデ、突帯貼り付け位置は指オサエ	—	—	外面口縁はヨコナデ、ヨコハケは2周する。2段目の静止痕はほぼ垂直。
7.5YR7/6 橙色	—	ヨコハケ (8本/cm)	—	ナデ、指オサエ	—	—	
7.5YR6/6 橙色	—	ヨコハケ (10本/cm)	—	指ナデ	—	—	突帯間に綾杉文をヘラ描きする
2.5Y6/1 黄灰色	タテハケ (9本/cm)	×	—	斜め方向に指ナデ	—	—	
2.5Y6/1 黄灰色	タテハケ (9～10本/cm)	×	—	斜め方向に指ナデ、突帯貼り付け位置は指オサエ	—	—	円形透かし孔を持つ
7.5YR6/6 橙色	—	ヨコハケ	—	不明瞭	—	—	
10YR7/3 にぶい黄橙色	—	—	—	不明瞭	—	—	透かし孔を持つ
10YR7/4 にぶい黄橙色	—	—	—	不明瞭	—	—	透かし孔を持つ
5YR6/6 橙色	—	B種ヨコハケ (6本/cm)	—	ナデ、指オサエ	—	—	ヨコハケの静止痕は垂直。円形透かし孔を持つ
10YR7/4 にぶい黄橙色	—	—	—	不明瞭	—	—	透かし孔を持つ
7.5YR6/4 にぶい橙色	—	—	—	不明瞭	—	—	
7.5YR7/6 橙色	—	—	—	ヨコハケ(6本/cm)	—	—	
5YR6/6 橙色	タテハケ (6本/cm)	B種ヨコハケ (6本/cm)	—	斜め方向に指ナデ	—	—	透かし孔を持つ。静止痕は垂直で、間隔は4.8cm
10YR7/6 明黄褐色	タテハケ (5～6本/cm)	—	タテハケ (5～6本/cm)	不明瞭	—	—	
5YR5/3 にぶい赤褐色	—	—	指ナデ上げ	斜め方向に強く指ナデ	—	—	底部端をヘラ調整する。底面に格状圧痕
7.5Y7/1 灰白色	タテハケ	—	タテハケ (9～11本/cm)	斜め方向に指ナデ、下端に指オサエ	—	—	底面に網状圧痕、格状圧痕 草鞋Bの蓋底部か

遺物番号	出土位置	種別	部位	焼成	色調	胎土	備考
埴輪49	第Ⅱトレンチ	蓋形埴輪	飾り板	土師質	7.5YR5/4 にぶい褐色	砂粒、雲母を含む	
埴輪50	第Ⅱトレンチ	蓋形埴輪	笠部中位突帯	土師質	7.5YR6/6 明褐色	砂粒、クサリ礫、雲母を含む	笠部外面はヨコハケ調整する。
埴輪51	第Ⅱトレンチ	蓋形埴輪	笠部中位突帯	土師質 (硬質)	7.5YR6/6 橙色	1～2mmの礫(チャート・長石・石英)、砂粒、雲母を含む	笠部外面はヨコハケ調整する。
埴輪26	第Ⅰトレンチ	蓋形埴輪	飾り板	土師質	7.5YR7/6 橙色	7mm大の礫、4mmまでの石英・礫、砂粒、クサリ礫、雲母を含む	
埴輪27	第Ⅲトレンチ	円形埴輪	角	土師質 (硬質)	2.5YR6/4 にぶい橙色	砂粒、雲母、クサリ礫を含む	中空である。土師器甕・鉢などの把手の可能性あり。
埴輪28	第Ⅳトレンチ	家形埴輪	棟部分	土師質 (硬質)	7.5YR6/4 にぶい橙色	砂粒、雲母、クサリ礫を含む	壁から床まで一挽きで作られている
埴輪20	外濠内	蓋形埴輪	飾り板	土師質	7.5YR7/6 橙色	0.5～1mmの白色粒、クサリ礫を含む	2条の線刻
埴輪21	外濠内	蓋形埴輪	飾り板	土師質	10YR7/4 にぶい黄橙色	砂粒、クサリ礫を含む	2条の平行線と曲線
埴輪22	外濠内	蓋形埴輪	飾り板	土師質	10YR7/4 にぶい黄橙色	0.5～1mmの白色粒、クサリ礫を含む	2条の線刻
埴輪23	外濠内	蓋形埴輪	飾り板	土師質	7.5YR7/6 橙色	0.5～1mm大の石英、砂粒、クサリ礫を含む	蓋表の線刻は異なる
埴輪24	外濠内	蓋形埴輪	飾り板交差部分	土師質	7.5YR6/6 橙色	クサリ礫、砂粒を含む	赤色顔料が残る
埴輪25	外濠内	蓋形埴輪	飾り板交差部分	土師質	7.5YR6/6 橙色	クサリ礫、砂粒を含む	赤色顔料が残る
埴輪26	外濠内	蓋形埴輪	飾り板受部	土師質	7.5YR7/6 橙色	砂粒、雲母を含む	赤色顔料が残る
埴輪27	外濠内	蓋形埴輪	笠部中位突帯	土師質 (硬質)	7.5YR6/8 橙色	2～3mmの礫(チャート・長石・石英など)、砂粒を含む	赤色顔料が残る
埴輪28	外濠内	蓋形埴輪	笠部下半部	土師質 (硬質)	7.5YR7/4 にぶい黄橙色	砂粒、0.5～3mm大の石英・長石などを多く含む	方形板をヨコハケ静止痕で表現
埴輪29	外濠内	家形埴輪	屋根部分	土師質	7.5YR6/8 橙色	砂粒、雲母を含む	四注部のコーナー
埴輪30	外濠内	家形埴輪	棟根部分	土師質 (硬質)	10YR7/3 にぶい黄橙色	0.5～4mm大の石英・長石、砂粒を多く含む、クサリ礫を含む	道具と壁の接合部分。内側に突起が残る
埴輪31	外濠内	不明	—	土師質 (硬質)	7.5YR6/6 橙色	1～5mmの礫(石英・チャートなど)、砂粒、雲母を含む	棒状のものを巻り付けていた？

表7　第8次調査形象埴輪観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	器高	口径	底径	色調	備考
52	第Ⅱトレンチ	土師器	小型壺	7.1	7.1	／	10YR6/4 にぶい黄橙色	埴輪C内から完形で出土
53	第Ⅱトレンチ	須恵器	杯蓋	4.8	12.7	／	10YR5/1 灰色	
54	第Ⅱトレンチ	須恵器	杯身	5.0	10.4	／	5Y5/1灰色	
55	第Ⅱトレンチ	須恵器	高杯蓋	4.7	12.7	／	7.5YR6/2 灰黄褐色	摘み径2.3cm
56	第Ⅱトレンチ	須恵器	高杯蓋	5.0	12.9	／	7.5Y5/1 灰色	摘み径2.3cm
57	第Ⅱトレンチ	須恵器	高杯蓋	(4.0)	13.0	／	2.5Y5/2 暗灰黄色	摘み欠損

表8　第8次調査土師器・須恵器・韓式系土器観察表（1）

遺物番号	出土位置	種別	器種	器高	口径	底径	色調	備考
58	第Ⅱトレンチ	須恵器	有蓋高杯	10.1	10.8	8.8	2.5Y4/1黄灰色	
59	第Ⅱトレンチ	須恵器	有蓋高杯	8.6	11.3	9.5	5Y5/1灰色	墳端C内から割れた状態で出土。
60	第Ⅱトレンチ	須恵器	有蓋高杯	—	11.4	—	2.5Y6/2灰黄色	
61	第Ⅱトレンチ	須恵器	有蓋高杯	—	—	8.7	N5/0灰色	
62	第Ⅱトレンチ	須恵器	甕	—	19.0	／	5Y5/1灰色	頸部に1条の波状文
63	第Ⅱトレンチ	須恵器	甕	19.7	14.5	／	2.5YR4/1赤灰色	部分的に7.5YR4/1褐灰色を呈す
64	第Ⅱトレンチ	須恵器	甕	—	22.6	／	N4/0灰色	頸部に2条の波状文
65	第Ⅱトレンチ	須恵器	甕	—	20.4	／	10YR4/1褐灰色	
66	第Ⅱトレンチ	須恵器	甕	(29.7)	22.4	／	5Y5/1灰色	7.5Y5/2灰オリーブ色の自然釉が掛かる
67	第Ⅱトレンチ	須恵器	器台	43.3	33.1	28.8	5Y5/1灰色	透かしは長方形と三角形
68	第Ⅱトレンチ	須恵器	器台	35.5	33.6	26.3	5Y5/1灰色	透かしは三角形
69	第Ⅱトレンチ	韓式系土器	甕	—	—	—	10YR6/4にぶい黄橙色	外面に平行タタキを櫛子状に、内面に同心円文の当て具痕

表9　第8次調査土師器・須恵器・韓式系土器観察表（2）

遺物番号	出土位置	種別	器種	器高	口径	底径	備考
1	外濠内	須恵器	杯身	4.0	10.8	／	
2	外濠内	瓦器	椀	—	11.8	—	内面にミガキ
3	外濠内	瓦器	椀	—	—	4.0	高台は形骸化
4	外濠内	白磁	碗	—	—	7.0	中国　内面に沈線
5	第Ⅱトレンチ	土師質	土製品	(6.0)	—	—	丁寧形土製品
6	第Ⅱトレンチ	瓦	軒丸瓦	／	／	／	左巻き三巴文
7	第Ⅲトレンチ	土師質土器	皿	1.2	6.5	／	口唇部に煤が付着
8	第Ⅲトレンチ	土師質土器	皿	1.6	7.0	／	口唇部に煤が付着
9	第Ⅲトレンチ	陶器	碗	—	—	4.0	瀬戸・美濃

表10　第8次調査遺物観察表

第２節　御願塚古墳第９次調査

調査面積　33.75㎡（2.5 × 13.5 m）
調査期間　平成 12 年 11 月 17 日～平成 13 年 1 月 31 日
調査担当者　小長谷正治

１．調査の概要

この調査は、御願塚古墳の環境整備事業に伴い、墳頂部にある南之神社に通じる石段下の確認調査を実施したものである。御願塚古墳は、昭和 40 年に伊丹市が、翌年には兵庫県が史跡に指定した。

この指定を受けたのを期に、地元の強い要望もあって古墳の環境整備事業が進められることになった。環境整備事業の大きな目的は次の３点であった。

１．墳丘封土の崩れた箇所に盛土する。
２．周濠の泥土を除去し、水質の浄化を図る。
３．外堤の護岸を整備し、遊歩道を設ける。

この整備事業に先立ち、昭和 44 年に主に外堤部にトレンチを入れ、周濠外側の立ち上がりの位置確認や外堤部の埴輪列の有無など、外堤部の状況確認に主眼をおいた調査を行った。この調査では、墳丘そのものに調査の手は及ばなかったが、御願塚古墳の考古学的な調査としては最初のものとなった。

昭和 44 年の環境整備事業から 30 年が経過し、周濠には厚く泥土やゴミが溜り、墳丘封土の崩壊も進んだため、再度本格的な環境整備対策を講じる必要が生じてきた。また、市民憩いの場としての史跡公園としての再整備も考える時期にきていたので、古墳入口付近の民有地を購入して新たな整備を行うことになった。

神社に通じる石段の設置時期は明らかではないが、永年の使用により、各段にズレや起伏が生じ危険であることから、環境整備事業にあたり一旦石段をすべて撤去して、据えなおすことになった。その際、石段の片側にステンレス製の手すりを設置する計画であったので、この工事が遺構の保存に問題がないか確かめることになった。

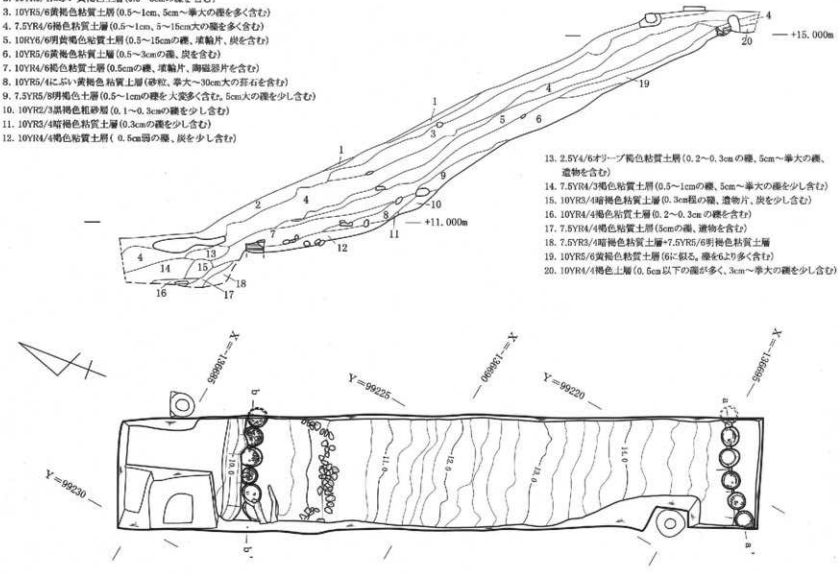
（１）調査の経過

石段の撤去後、手すりを含めた範囲に、幅 2.5 m、長さ 13.5 mの長方形に調査区を設定した。石段直下の面で精査を行ったが、石段下の基礎固めの土と不安定な後世の堆積層と判断されたので、平面図作成および写真を撮影した後、掘り下げることにした。遺構面までの深さが不明なため、下層の状況を探るために試掘することにし、東壁に沿って幅 0.5m のサブトレンチを設定した。サブトレンチは墳頂部から裾部にかけて設定し、土層の堆積を確かめながら慎重に掘り下げていった。

発掘調査前の計画では、地表下 0.7m ほどで墳丘に到達するものと考えていたが、石段下の後世の堆積層は意外と厚く、墳頂部では 0.5m 程度であったが、裾部になると 1.5m までさがることがわかった。また、全体に松の根や根跡の軟弱な地盤が所々にあり、サブトレンチでの遺構面の検出は困難を極めたが、墳頂部近くでは搗き固めた土が認められ、裾部では葺石の堆積がみられたので、その深さを目途に全体の掘り下げを行うことを決めた。

トレンチ全体の掘り下げが完了した後、全面的に精査と埴輪列の検出を試みた。墳頂部の平坦面から墳丘斜面の境目に埴輪が集中することがわかったので、その辺りを中心に埴輪片を原位置に残しながら、周囲を若干掘り下げたところ、埴輪列を確認することができた。円筒埴輪は６基で、最も東側

1. 2.5Y7/3浅黄色土層（0.5cm前後の礫をまんべんなく多く含む）
2. 10YR5/4にぶい黄褐色土層（0.5～3cmの礫を含む）
3. 10YR5/6黄褐色粘質土層（0.5～1cm、5cm～拳大の礫を多く含む）
4. 7.5YR4/6褐色粘質土層（0.5～1cm、5～15cm大の礫を多く含む）
5. 10RY6/6明黄褐色粘質土層（0.5～15cmの礫、埴輪片、炭を含む）
6. 10YR5/6黄褐色粘質土層（0.5～3cmの礫、炭を含む）
7. 10YR4/6褐色粘質土層（0.5cmの礫、埴輪片、陶磁器片を含む）
8. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土層（砂粒、拳大～30cm大の浮石を含む）
9. 7.5YR5/8明褐色土層（0.5～1cmの礫を大変多く含む。5cm大の礫を少し含む）
10. 10YR2/3黒褐色粗砂層（0.1～0.3cmの礫を少し含む）
11. 10YR3/4暗褐色粘質土層（0.3cmの礫を少し含む）
12. 10YR4/4褐色粘質土層（0.5cm岡の礫、炭を少し含む）
13. 2.5Y4/6オリーブ褐色粘質土層（0.2～0.3cmの礫、5cm～拳大の礫、遺物を含む）
14. 7.5YR4/3褐色粘質土層（0.5～1cmの礫、5cm～拳大の礫を少し含む）
15. 10YR3/4暗褐色粘質土層（0.3cm程の礫、遺物片、炭を少し含む）
16. 10YR4/4褐色粘質土層（0.2～0.3cmの礫を含む）
17. 7.5YR4/4褐色粘質土層（5cmの礫、遺物を含む）
18. 7.5YR3/4暗褐色粘質土層+7.5YR5/6明褐色粘質土層
19. 10YR5/6黄褐色粘質土層（6に似る。礫を6より多く含む）
20. 10YR4/4褐色土層（0.5cm以下の礫が多く、3cm～拳大の礫を少し含む）



第28図 平面図・断面図

の円筒埴輪（埴輪１Ａ）は大部分が東壁に埋まり、わずかに４分の１がトレンチ側に出ている状態であった。これらの円筒埴輪は緩く弧を描いて並んでいた。

段築部の埴輪列は、松の大きな根に邪魔され検出が困難であったが、木の成長に影響を与えない範囲で根を切断して埴輪の検出を試みた。その結果、５基の円筒埴輪が確認できたが、裾部の崩壊や根の撹乱により、西側の埴輪の遺存状況は極めて悪かった。これらの円筒埴輪も緩く弧を描いて並んでいるようすが確認できた。

埴輪片は、できる限り原位置で平面実測を行い記録したが、早くに撹乱を受け遊離した埴輪片は土層名を記して取り上げた。葺石は裾部に堆積した状態で確認できたが、墳丘全体に葺かれたにしては量が少なかった。原位置をとどめているものは平面実測し、記録にとどめた。

（２）調査方法

今回の調査は古墳の環境整備事業に伴うものであったため、調査範囲は必要最小限にとどめる方針で行った。墳頂部に鎮座する南之神社の石燈籠や鳥居などはその場に残す必要がある上、調査中の倒壊を防ぐために十分な安全策を講じる必要があったので、裾部から周濠にかけては充分な調査を行うことはできなかった。

調査は先ず石段を撤去し、一旦その段階の写真撮影や平板を用いた平面測量を行い、それ以後はすべて手作業で掘り下げを行った。また、調査後の埋め戻し作業も人力で行う必要があったため、掘削土はトレンチ脇に配置したベルトコンベアーで墳頂まで送り、そこを土砂置き場とした。埋め戻しにあたっては、土砂の崩壊を防ぐため土嚢に詰めて積み上げる方法を採用した。

遺構や埴輪の実測には、国土座標を基準とする測量杭を設定し、それをもとに実測を行った。また、等高線図の作成にあたっては、水準点の高さを基準に実測を行った。トレンチ内で検出した埴輪はすべて位置を記録した後、取り上げている。墳頂部の埴輪列のうち東端の円筒埴輪（埴輪１Ａ）の４分の３と、段築部の埴輪列のうち東端の円筒埴輪（埴輪２Ａ）の約半分が東壁に入り込んでいたが、検討の結果、埴輪の保存を考慮し、調査の最終段階で壁に入り込んでいた部位も取り上げることにした。

２．基本層序（第 28 図、図版 19・20）

土層については、トレンチの両側（東壁と西壁）の断面実測を行ったが、両土層断面とも共通した堆積状況を示していたので、比較的残りの良い東壁を用いて土層堆積状況を説明する。

第１層は表層で、浅黄色の締まりのない盛土である。第２・３層は礫を多く含む黄褐色土層で、石段を施工した段階の盛土と考えられる。第４層は、墳頂部から裾部まで厚く堆積する土層で、褐色から黄褐色をし、やや粘性がある。江戸時代後期（19 世紀前半）の陶磁器を含んでいることから、この頃の盛土かと考えられる。第５層明黄褐色粘質土、第６・19 層黄褐色粘質土、第７層褐色粘質土は、ともに埴輪片を含んでいることから、墳丘上部からの崩土と考えられる。ただし、第７層の上部から江戸時代前期の陶磁器が出土しているので、堆積時期は比較的新しいと見なければならない。第８・12 層も崩土で、崩れた葺石を多く含み、第 16・17 層は褐色粘質土で裾部の堆積層で、埴輪片を含んでいた。

調査を行った石段付近は、周囲より盛り上がっていることが、調査前の等高線図からも確認できていた。とくにこの辺りは墳頂にある南之神社の参拝道として後世の盛土の堆積を予想していたが、結果は予想を上回るものであった。少なくとも、第１～６層の間は、17 世紀中頃の神社本殿建築以降の盛土、あるいは境内整備の過程で削平された墳頂の崩土の堆積と見られ、その厚さは下部では 1.2 mほどにおよんでいる。

3．調査成果（第28・29図　図版18～20）

今回の第9次調査は、平成10年に行った外濠部と造り出しの調査（第8次）に続くものである。墳丘部の調査としては、前回の造り出しに続いて2度目の調査である。調査対象となった石段部分は、墳頂にある南之神社の参道として作られていたもので、神社参詣者のみならず古墳見学者にも利用されていたため、石段のズレや起伏を修正し、合わせて手すりを設けることにした。調査範囲は石段修理範囲が対象であったが、今後の環境整備に備える意味でも2段築成の状況や埴輪列の存在を確認しておく必要があると判断し、石段の範囲よりやや広めに調査区を設定した。

発掘調査により下記の事実を確認することができた。

1．2段築成
2．葺石
3．墳頂部の埴輪列
4．段築部の埴輪列

以下、今回の発掘調査で確認された事実関係について説明を加えたい。

（1）墳丘と段築

墳丘の規模と形状については、『伊丹市史』編纂時の測量調査により、現況では全長52mの帆立貝式古墳で、今回調査を行った後円部は、直径が39m、高さ7mの2段築成という結果が得られていた。

今回の調査範囲は、後円部の北面側で行った。トレンチは現況の墳頂平坦面を2mほど含み、下方では段築平坦面を1.6mほど含んだ範囲で、周濠に架かる橋の手前にある鳥居の下も調査の対象とした。

調査の結果、墳丘裾部では段築は確かに存在し、2段築成であることが確かめられた。ただし、現状で確認できる段築は、墳丘の崩土の堆積や後世の盛土の上に存在していることがわかった。実際の段築から墳丘への立ち上がりの位置は、現況から内側へ2.3m入り込んでいた。また、深さも0.4mほど下に位置することがわかった。段築の幅は東壁で1.6～1.8mを測るが、埴輪列の位置が段築縁辺で認められ、埴輪2Bと埴輪2Cの円筒埴輪などが周濠に向かって崩れている状況を見ると、元の段築はもう少し周濠側に広がっていたと考えられる。段築の周濠側への崩壊が進み、かろうじて埴輪列の位置で崩壊が止まったものと推測される。

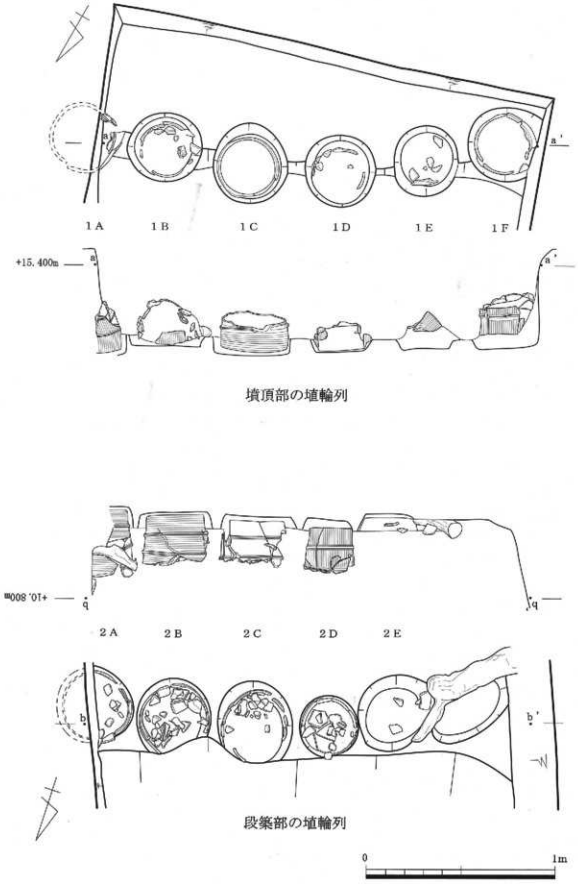
（2）葺石

段築上に川原石が集中することが確認された。その川原石は、長さ15～20cmのものがもっとも多く、30cmにおよぶものがわずかに含まれていた。出土状況を見ると、段築より少し上に上方よりの崩土とともに堆積していたものが多く、原位置を保っていたものは、段築から墳丘に立ち上がるわずかな範囲に存在するのみであった。この川原石は墳丘外表を覆うほどの量がなく、これをもって葺石とすることができるか多少の疑問もあるが、平成10年度に行った造り出しの調査（第8次）でも、造り出し東側のくびれ部から多量の川原石（長さ10～20cm）が出土しており、葺石の多くが墳丘の崩土とともに下方に流失したものと判断される。ただし、葺石が墳丘全体におよんでいたのか、あるいは段築付近にのみ限定的であったのか、今後の別の地点での調査による検証を待つ必要がある。

ただ、今回と前回の発掘調査から判断すると、限定的範囲で葺石が設けられた可能性が高いと考えられ、その範囲は段築から墳丘斜面にかけてではなかったかと推測する。

（3）墳頂部の埴輪列

墳頂縁辺から円筒埴輪6基（埴輪1A～1F）が並んで検出された。この埴輪列は緩やかに弧を描



墳頂部の埴輪列

段築部の埴輪列

第 29 図　墳頂部の埴輪列と段築部の埴輪列平面図・立面図

くように並び、その位置は墳頂縁辺に位置していた。埴輪列の位置から傾斜が始まっており、元は掘り方に埋まっていたはずの埴輪基底部が現れるなど、墳丘封土の流出がかなり進んだものと考えられる。円筒埴輪は0.1～0.15 mの間隔で配置され、直径0.36～0.4 mの掘り方に埋められていた。埴輪の遺存状況をみると、部分的に２条目の突帯まで残るもの（埴輪１A・１B）があるが、埴輪１C・１Fは基底部から１条目の突帯までであり、埴輪１Eは細かく割れ破片のほとんどが流出していた。

（4）段築部の埴輪列

埴輪列は段築縁辺から検出された。トレンチの範囲内からは６基の円筒埴輪が並んでいたと考えられるが、西側の２基（埴輪２E・２F）は崩壊流出しており、掘り方のみの検出にとどまった。段築部でも墳丘封土の流出が著しく、埴輪列の外縁から周濠に向かう斜面が始まり、埴輪２B・２Cなどは、外側が欠失している。またトレンチ西側から延びる松の根による攪乱も著しく、埴輪２E・２Fはその影響を受け埴輪が原位置にて確認できず、破片となって散乱する状況であった。

埴輪列設置の間隔は、埴輪２Aと埴輪２Bが0.06 m、埴輪２Bと埴輪２Cが0.09 m、埴輪２Cと埴輪２Dが0.1 mで、墳頂部に比べかなり狭い。埴輪の遺存状況は墳頂部の埴輪列に比べて良好で、埴輪２A～２Dは２条目突帯から３条目突帯にかけて残っていた。また、埴輪２A～２Dの内部には埴輪片が落ち込んだ状況で検出された。

（5）段築部の埴輪の出土状況

段築部では、葺石に混じって埴輪片が多数出土した。これらの埴輪片のうち、段築の埴輪列周辺から出土したものはそれに関係するものであるが、埴輪列の内側で葺石などとともに出土した埴輪片は墳頂部からの流出と考えられる。大半の破片は円筒埴輪（朝顔形埴輪）であるが、蓋形埴輪などの器材埴輪も出土した。（小長谷）

4．出土遺物

（1）墳頂部の埴輪

埴輪については御願塚古墳第８次調査で使用した各属性に準じて報告を行う。墳頂部で検出した埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪片である。全ての円筒埴輪は上部が大きく失われており、周辺でも口縁部は検出されなかった。

1）円筒埴輪（第30図　図版21）

埴輪１A　残存高25.5㎝、底部径30.9㎝、底部高10.7～11.6㎝、突帯間隔10.2～10.4㎝。突帯の形状は（b'）で、幅1.7㎝、高さ0.8㎝である。基底は５～６㎝幅の粘土帯２枚を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に幅２㎝ほどの粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整を行っており、原体幅約４㎝/30本（７～９/㎝）のハケ工具が使用されている。２段目は突帯を貼り付ける際のヨコナデによって広くタテハケがナデ消されている。タテハケはほぼ垂直方向に丁寧に施されている。内面は斜め方向に強く指ナデ調整し、突帯貼り付け位置に指オサエを加えている。３段目におそらく円形となる透かし孔を持つ。

胎土はクサリ礫、砂粒、２～10㎜のチャート・石英・長石粒などを多く含んでいる。土師質（硬質）で、明赤褐色を呈している。底面に幅1.5～２㎝の棒状圧痕、藁状圧痕、木目痕が残っている。

埴輪１B　残存高23.1㎝、底部径29.6㎝、底部高10.8㎝、突帯間隔10.0㎝。突帯の形状は（b）で、幅2.1㎝、高さ0.6㎝である。基底は５～６㎝幅の粘土帯２枚を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に約３㎝幅の粘土紐を積み上げていく。

外面はタテハケによる１次調整を施し、ハケ原体の条数は12本/㎝で大変緻密である。器面にハ

ケ工具のアタリ痕をよくとどめる。内面は風化が著しく調整はあまり明瞭ではない。おそらく、１段目は指ナデ、下端に指オサエを加え、２段目以上には指ナデのあとタテハケを施し、突帯貼り付け位置は指オサエを行っていたようである。３段目に円形の透かし孔が設けられている。

胎土は砂粒、２～７㎜のチャート・石英・長石等が多く含まれている。土師質（軟質）で、橙色を呈す。底面に作業台の木目痕が残っている。

埴輪１Ｃ　残存高 22.6㎝、底部径 32.1㎝、底部高 9.9 ～ 11.0㎝、突帯間隔 10.7 ～ 11.1㎝を測る。

１条目突帯の剥離面に突帯間設定の幅３㎜の凹線が残っており、１段目の凹線までの間隔は 10㎝である。突帯の形状は（ｂ'）で、幅 2.3㎝、高さ 0.8㎝を測る。基底は４㎝幅の粘土帯を反時計回りに４枚貼り合わせて輪を形作り、その上に２～３㎝幅の粘土紐を積み上げている。

２段目の残存状態は良好ではないが、外面調整はタテハケによる１次調整のあと、Ｂｃ種ヨコハケによる２次調整を施している。２段目に１ヵ所ヨコハケの重なりが確認できるが、これはヨコハケの始発位置と思われ、ハケ工具を器面の右から左へ移動させて、ヨコハケを施していった様子がわかる。１段目の静止痕の間隔は 3.7 ～５㎝、２段目は 3.5㎝前後の細かいピッチを刻んでいる。タテハケ・ヨコハケ原体条数は５～８本 /㎝で、同一工具によるハケ調整と考えられる。

１段目の内面調整は風化のため明瞭ではないが、斜め方向にハケ調整し、２段目をヨコハケしたあと、１段目に斜め方向の指ナデを行っている。ハケ原体条数は５～８本 /㎝で、外面調整と同じハケ工具を用いているようである。粘土紐接合痕がナデ消しきれずに、比較的明瞭に残っている。

下端には指オサエを加えている。底面に木目痕の他、幅 1.5 ～３㎝の棒状圧痕が残っているが、幅５㎝の圧痕については板状の敷物が想定される。胎土は２～６㎜のチャート・石英・長石粒、砂粒、クサリ礫を含んでいる。土師質（軟質）で、明黄褐色を呈する。

埴輪１Ｄ　残存高 25.4㎝、底部径 26.2㎝、底部高 11.3㎝、突帯間隔 10.0㎝である。２条目突帯剥離面に突帯間設定の幅７㎜の凹線が確認でき、突帯の上部を凹線に合わせて貼り付けていくようすが観察できる。突帯の形状は（ｂ）で、幅 1.9㎝、高さ 0.7㎝を測る。基底は４～５㎝幅の粘土帯をおそらく２枚貼り合わせており、その上に２～３㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整のあと、２段目以上はＣａ種ヨコハケを施しており、突帯間を一気に一周し、ハケの終始位置（切り合い）が明瞭に観察できる。ヨコハケは幅が狭く、全く突帯間を満たしていない。１段目にはハケ工具の調整時のアタリが残っている。タテハケ工具原体条数は４～５本 /㎝、ヨコハケ工具は原体幅 6.2㎝ /26 本（４～６本 /㎝）のものを使用している。

内面調整はタテハケによるが、原体幅約 4.2㎝ /13 本（４～５/㎝）の工具が使用されており、外面と内面のタテハケ調整には同一工具を使用していたものと推測される。３段目に２孔１対の円形透かし孔を設けている。底面には木目痕、籾状圧痕が残っている。胎土は砂粒、クサリ礫、１～８㎜の石英・長石・チャートを含む。土師質で、橙色を呈している。

埴輪１Ｅ　残存状態が大変悪く、突帯１条分を残すのみであるが、円形透かし孔が残っていることから、残存部分は３段目と４段目、あるいは５段目と６段目のいずれかであると推測される。胴部最大径は 32.5㎝である。突帯の形状は（ｂ）で、幅 2.0㎝、高さ 0.9㎝を測る。

外面調整はタテハケによる１次調整を施し、内面はヨコハケの後、タテ・ヨコ方向に指ナデを行っている。ハケ原体の条数は４～６本 /㎝で、内外面のハケ調整には同一工具を使用したようである。

胎土は２～３㎜のチャート・長石・石英粒、クサリ礫、砂粒を含んでいる。土師質で、橙色を呈している。

埴輪１F　残存高 22.3㎝、底部径 30.5㎝、底部高 10.5 ～ 10.8㎝、突帯間隔は 10.2 ～ 10.6㎝である。突帯間設定は凹線によるものと思われるが、突帯剥離面の残存状態が悪いこともあって、明瞭に痕跡を確認できない。

突帯の形状は（ｂ）で、幅 1.9㎝、高さ 0.8㎝を測る。４㎝幅の粘土帯を同じ側に２枚貼り合わせて基底とし、その上に幅 1.5 ～ 2.5㎝の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整を施した後、１段目に指ナデやヨコナデ、２段目にはヨコナデを所々に加えている。タテハケには原体幅 3.8㎝ /29 本（６～９本 /㎝）の工具が使用されている。

内面は斜め方向に指ナデ調整し、突帯貼り付け位置には指オサエを行っている。３段目に透かし孔の痕跡がわずかに確認できる。

胎土は砂粒、クサリ礫、１～５㎜の石英・長石・黒色粒を含んでいる。土師質で、橙色を呈している。底面に藁状圧痕の他に幅２㎝ほどの棒状圧痕が残っているが、幅 3.5㎝の半円に例られたものは、粘土を内側に折り残している。

（２）段築部の埴輪

段築部では樹立している円筒埴輪のほかに、朝顔形埴輪、形象埴輪を検出している。

１）円筒埴輪・朝顔形埴輪（第 31 ～ 34 図　図版 22 ～ 25）

埴輪２A　樹立残存部に上半部が落ち込んだ状態で検出された。接合面を失っているため不明確ではあるが、出土状況・内外面の調整・胎土などから同一個体と考えられ、全形は５条突帯６段構成の朝顔形円筒埴輪であったと推測し、復元的に図化した。復元高 99.4㎝、口縁部径 67.2㎝、頸部突帯径 32.6㎝、底部径 30.7㎝、底部高 11.3 ～ 11.8㎝、突帯間隔は 10.8 ～ 12.0㎝、肩部高 12.8㎝である。１段目と突帯間はほぼ同じ高さで制作されていると考えられる。２・３条目突帯剥離面に突帯設定の凹線が観察でき、突帯の上部を凹線に合わせて貼り付けているようすがわかる。３段目の凹線までの間隔は 11.7㎝である。突帯の形状は（ｂ'）で、幅 1.9㎝、高さ 0.7㎝を測る。頸部突帯は鋭角を持つ三角形で、幅 1.4㎝、高さ 0.9㎝を測る。

基底は約５㎝幅の粘土帯を同じ側に２枚貼り合わせて輪を形作り、その上に幅２～３㎝の粘土紐を積み上げている。

外面調整は、タテハケによる１次調整のあと、２段目～５段目に Bb 種ヨコハケ調整を施している。突帯間隔が広く、１周のヨコハケでは全く満たされないため、数回に分けて下から上へヨコハケを施している。最初のヨコハケは静止痕が真っ直ぐで、間隔は 3.5㎝前後である。２周目以降のヨコハケには静止痕がほとんど見られず、突帯間を一気にほぼ１周している。その間では１次調整のタテハケを明瞭に確認することができる。タテハケは原体幅 2.8㎝ /24 本（９本 /㎝）の工具を使用し、ヨコハケは原体幅５㎝ /41 ～ 43 本（７～ 10 本 /㎝）のハケ工具を使用している。下端をヨコナデする。

内面調整は１段目ではタテハケのあと、斜め方向に強く指ナデしている。２段目から３段目はタテハケ、４段目から５段目は斜めハケを施したあとに、突帯貼り付け位置を指オサエ・ヨコナデしており、さらにその上部に同様な幅で横位の爪圧痕が残る。肩部上半はタテハケを施し、６段目～肩部下半はヨコ・斜め方向に強い指ナデによって斜めハケを丁寧にナデ消している。頸部突帯貼り付け位置は指オサエを行っている。口縁部はヨコハケ調整である。タテハケ原体条数は７～ 10 本 /㎝で、器面のハケ条痕のようすからも外面のタテ・ヨコハケ調整と同一工具を使用していると推測できる。

透かし孔は円形で、５段目と６段目に直交方向に２孔１対と、２段目に６段目と同位置に２孔１対を設けている。底面に幅 0.5 ～２㎝の棒状圧痕、藁状圧痕が残る。胎土は砂粒、２～４㎜の礫（チャート・石英・長石など）を多く含んでいる。土師質（硬質）で、橙色を呈している。

埴輪２Ｂ　残存高 34.9㎝、底部径 31.0㎝、底部高 9.9㎝、突帯間隔 9.7 ～ 10.1㎝である。突帯の形状は（ｂ）で、幅 2.2㎝、高さ 0.7㎝を測る。

基底は７～８㎝の粘土帯２枚を同じ側に貼り合わせて輪を形作り、その上に２～３㎝の粘土紐を積み上げている。接合痕は比較的明瞭に残っている。

外面はタテハケによる１次調整のあと、Ｂｃ種ヨコハケによる２次調整を施している。静止痕の間隔は１段目で 4.2 ～ 7.4㎝、２段目以上は 2.3 ～ 6.3㎝である。タテハケ原体条数は４～５本 /㎝、ヨコハケ原体条数は６～７本 /㎝である。

内面は風化による摩耗が進んでいるが、タテハケ調整を施し、突帯貼り付け位置に指オサエ、下端はナデ調整を行っていることが観察できる。タテハケには原体条数４～５本 /㎝と７～８本 /㎝の工具を併用しており、前者は外面のタテハケ原体と同一である。粘土紐接合痕が比較的明瞭に残る。３段目に 6.5 × 7.5㎝の円形透かし孔を持つ。底面に藁状圧痕が残る。胎土は 0.5 ～６㎜の石英・長石・チャート、クサリ礫を多く含む。土師質で、明黄褐色を呈している。

埴輪 17・18 は埴輪２Ｂ内から出土した口縁部片である。口縁の形状は（ｃ）で、上端は強いヨコナデにより外反する。内外面は風化により調整がかなり不明瞭ではあるが、外面調整のヨコハケ、内面調整のヨコハケが確認できる。ハケ原体条数は６～７本 /㎝である。胎土は長石・石英・チャート、クサリ礫を多く含んでいる。出土状況や属性から見て埴輪２Ｂの口縁部と考えられる。

埴輪２Ｃ　残存高 24.3㎝、底部径 28.6㎝、底部高 9.7 ～ 10.0㎝、突帯間隔 10.1㎝である。突帯剥離面に突帯設定の幅３㎜の凹線が観察でき、突帯の上部を凹線に合わせて貼り付けているようすがわかる。凹線までの間隔は１段目で 10.0㎝、２段目は 9.7㎝である。突帯の形状は（ｅ）で、幅 1.6㎝、高さ 0.5㎝を測る。２条目突帯はヨコナデ調整を施すが、１条目突帯は押し付けによる粘土貼り付けのあと、板押圧による整形を行っている。突帯は扁平で、突帯面に斜め横位のハケ工具圧痕が残っている。基底は幅５㎝の粘土帯２枚を交互に貼りあわせて輪を形作り、その上に２～３㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整は１次調整のタテハケのあと、１段目と２段目は同じ調整でタテ・斜め方向に強い指ナデを行い、雑なヨコハケを加える。３段目はＢｄ種ヨコハケを施す。ヨコハケ原体条数は９本 /㎝である。

内面は斜め・タテ方向に指ナデ調整し、下端はヨコナデ・指オサエを施す。３段目に円形透かし孔を穿けている。胎土は 0.5 ～５㎜の石英・長石・チャート、砂粒を多く含んでいる。土師質で、橙色を呈している。

埴輪２Ｄ　５段目の一部を欠くが、全形は６条突帯７段構成に復元できる。復元高 67.1㎝、口縁部径 35.2㎝、底部径 27.8㎝、底部高 9.0 ～ 9.6㎝、突帯間隔は２段目 10.5 ～ 11.0㎝、３段目～６段目は 9.1 ～ 9.5㎝、最上段高 9.5㎝である。２段目だけが幅広く設定されており、それ以外はほぼ同じ高さを保っている。

口縁の形状は直線的に外方へ開き、上端は外傾している（ｃ）。突帯の形状は（ｂ）で、幅 2.2 ～ 2.8㎝、高さ 0.7㎝を測る。幅８㎝ほどの粘土帯２枚を同じ側に貼り合わせて基底とし、その上に２～３㎝幅の粘土紐を積み上げている。

外面調整はタテハケによる１次調整を行い、下端はヨコナデしている。タテハケ原体条数は４～６本 /㎝である。内面調整は１段目から６段目まではタテハケを施し、最上段はヨコハケ調整をしている。１段目にはタテハケ調整前に施された斜め方向の強い指ナデが残っている。下端には指オサエを行う。６条目突帯貼り付け位置には指オサエが加えられている。粘土紐の接合痕は比較的明瞭に観察できるが、特に６段目以上には大変顕著に痕跡が残っている。上部は明らかに丁寧さに欠けるので、

この位置で作り手が替わったと推測できる。ハケ原体条数は４～６本/cmであり、内外面のハケ目調整は同一原体工具によるものと思われる。

３段目と５段目に直交する位置で２孔１対の円形透かし孔を設けている。底面に棒状圧痕が残っている。胎土は砂粒、２～４mm大の石英・長石・チャートなどを含んでいる。土師質で、にぶい橙色を呈す。

埴輪２Ｅ　掘り方内とその周辺に散乱していた破片で、同様な属性を持つ口縁部、突帯部、基底部の各部位が認められた。口縁部の形状は（ｃ）。突帯の形状は（ｂ'）で、幅1.8cm、高さ0.7cmである。

外面調整はタテハケによる１次調整のあと、Ｂ種ヨコハケによる２次調整を施しているが、静止痕はやや斜めに傾いている。１段目は１次調整だけだったと思われる。最上段におそらく「×」のヘラ記号が付けられていたようである。

内面調整は１段目と突帯部にはタテハケ、最上段はヨコハケのあとタテハケを施している。ハケ原体条数は６～７本/cmで、内外面ともに同一原体を使用している。胎土は雲母、砂粒、１～４mmの長石・石英・チャートを多く含んでいる。土師質（硬質）で、橙色を呈している。

埴輪12～18　円筒埴輪の口縁部である。口縁部形状より（ｂ）埴輪12・13、（ｃ）埴輪14～18を確認している。

埴輪12は埴輪２Ａ内から検出しているが、属性の違いから埴輪２Ａの口縁部ではないと判断した。上端に強いヨコナデによる沈線が廻る。外面調整はタテハケによる１次調整のあと、ヨコハケを施し、内面はヨコハケ、タテハケ、斜めハケの順にハケ調整を行っている。斜めハケは原体条数５本/cm、それ以外の内外のハケ原体条数は７本/cmである。

埴輪19～26　円筒埴輪の突帯部である。突帯の形状により（ｂ）埴輪23～26、（ｃ）埴輪20、（ｄ）埴輪21・22、（ｅ）埴輪19の４種類を抽出している。

埴輪19は突出度の低い幅1.4cm、高さ0.5cmの突帯で、押し付けによる粘土貼り付けのあと、板押圧による整形を行い、さらにヨコナデ調整を加えている。１条目突帯と思われる。

外面調整はタテハケによる１次調整がわずかに観察でき、そのあと２次調整のヨコハケを施す。

内面調整は風化により不明瞭であるが、指ナデを行っているようである。板押圧による整形を行っている１条目突帯を持つ埴輪２Ｃの部分片の可能性がある。

埴輪21は外面調整に１次調整によるタテハケを施し、内面にタテハケ調整を行うものであるが、突帯貼り付け位置付近でハケ原体条数が５本/cmから６～７本/cmに変っている。小片であるが、このラインで粘土紐積み上げを休止し、作り手が代わったことが窺える。そのように見ると、外面のタテハケは突帯を境にして斜め方向のハケからタテハケに変っていることに気が付く。

埴輪24は平面形が扁平であることから、横断面が楕円形を呈する円筒埴輪の短軸側の破片と思われる。また、透かし孔を設けていることから、おそらく５段目から最上段にかけての部位にあたると思われる。最上段高8.1cm、突帯間隔9.3～10.4cmを測る。口縁の形状は（ｃ）で、やや外反気味に立ち上がる。突帯の形状は（ｂ'）で、幅2.1cm、高さ0.7cmである。透かし孔は楕円形である。

外面調整は斜め方向の強い指ナデによる。内面調整は斜め方向の強い指ナデのあと、５段目にヨコナデ、最上段の突帯貼り付け位置以外にヨコナデを施している。内外面の指ナデは全て上から下へ施されており、このような器面調整を行っている埴輪は他に確認していない。粘土紐積み上げの接合面の傾きは内傾しており、正立していたことを示しているが、そのままでは調整し難い状態である。

埴輪25は突出度の高い幅2.1cm、高さ1.1cmの突帯を持ち、突帯剥離面に突帯間隔設定の幅２mmの凹線２条を残す。突帯の上部を凹線に合わせていることがよく分かる。

外面調整はタテハケによる１次調整のあと、Bd 種ヨコハケによる２次調整を施している。ハケ原体条数は５本 /㎝。内面調整は斜め方向に指ナデを行い、突帯貼り付け位置をヨコナデしている。

埴輪 27 ～ 32　朝顔形埴輪である。

埴輪 27 は口縁部突帯で、突帯部径は 41.7㎝である。突帯は強くヨコナデされ、幅約 1.9㎝、高さ 0.9㎝の断面M字形をなしている。受部に入れた接合用のキザミ目が陽刻状に残っている。外面調整はタテハケ（９本 /㎝）を施し、突帯付近をヨコナデする。内面はヨコハケ（７～ 10 本 /㎝）調整する。胎土は砂粒、クサリ礫、２～３㎜大の長石・石英を含んでいる。土師質で、橙色を呈す。

埴輪 28 は口縁部突帯で、突帯部径は 40.3㎝である。外面調整はタテハケ、内面はタテハケ調整を施しているが、粘土紐の接合痕は明瞭に残っており、約２㎝幅の粘土紐を積み上げているようすが分かる。ハケ原体条数は５～６本 /㎝で、内外面ともに同一原体を使用している。胎土は２～４㎜大の石英・長石粒、砂粒を多く含んでいる。

埴輪 29 ～ 31 は頸部突帯から肩部上半である。埴輪 29 は突帯部径 32.9㎝、外面はタテハケ、内面は指ナデを施し、突帯貼り付け位置は指オサエする。

埴輪 30 は突帯部径 33.7㎝、外面はタテ・斜めハケ（７～９本 /㎝）、内面は肩部をタテハケし、頸部はヨコハケを行い、ハケ原体条数は６～９本 /㎝である。何れも頸部突帯は鋭角な三角形を呈す。

埴輪 31 は突帯部径 31.1㎝、外面はタテハケを施す。内面肩部は斜め方向の指ナデ、受部はヨコハケ、突帯貼り付け位置はヨコナデを行っている。内外面のハケ原体条数は７本 /㎝である。

埴輪 32 は頸部突帯から肩部突帯付近である。突帯部径 31.6㎝、突帯先端に沈線状の強いヨコナデを加えている。肩部突帯は突出度の低い断面台形（ｄ）で、幅 2.0㎝、高さ 0.4㎝を測る。

外面調整は受部ではタテハケ、肩部は斜めハケ、最上段は B 種ヨコハケで、静止痕は左に傾いている。

内面調整は受部ではヨコハケ、肩部以下はヨコ方向の強い指ナデ、突帯貼り付け位置はケズリを施している。受部内外面のハケ原体条数は６～７本 /㎝、外面肩部以下は７～８本 /㎝のハケ原体を使用している。胎土は砂粒、１～５㎜大のチャート・石英・長石粒が目立っている。

２）形象埴輪（第 35 図　図版 25）

形象埴輪では蓋形埴輪の破片が出土している。

埴輪 33・34 は飾り板である。埴輪 33 は内縁を残す資料で、表裏面は同様の刻線を描いている。下端に２条の平行線を配し、そこから内縁に沿うような２重の弧線と、外縁側にそれと平行する２条の弧線を描く。

埴輪 34 は内縁と長方形透かし孔の一辺を残す資料である。表裏面は同様の刻線を持つ。内縁に沿って２重の弧線を刻み、そこから外縁に向かって２条一組の平行する弧線を不等間隔に３組配している。長方形透かし孔は下半の２組の間にあけられている。

埴輪 35 は笠部中位突帯付近である。外面笠部上半に斜めハケ、下半にタテハケ調整が確認できる。内面は強いヨコナデを施す。白灰色と灰色を呈する２種類の粘土を混ぜているようすが観察できる。

埴輪 36 は立ち飾り軸部である。残存高 15.5㎝、底径 7.8㎝。２枚の粘土帯を貼り合せて円筒を作り、絞って形を整えている。外面調整はタテナデ、内面は強く指ナデ調整する。

（３）その他の遺物（第 35 図）

トレンチ掘り下げ中に近世の陶磁器が出土している。時期は、江戸時代前期と後期の２時期に分けられる。江戸時代後期の陶磁器は第３・４層から出土したものが多く、江戸時代前期の陶磁器はそれより下層から出土し、もっとも下層は第７層上部からの出土である。灯明皿および花瓶については、

墳頂にある南之神社で使用されたものと考えられる。

37・38 は唐津焼皿である。37 には見込みに胎土目が、38 には砂目が付いている。

39 は肥前陶器鉄絵皿である。見込みに砂目が付いている。17 世紀前半頃の所産で、神社建築時に近い時期の遺物である。

40・41 は肥前磁器染付碗である。

43 は丹波焼擂鉢の口縁部片である。内面に段を有し、7本1単位の櫛描きを施す。17 世紀後半頃のものである。

44・45 は京焼系陶器御神酒徳利で、外面にそれぞれ銅緑釉、瑠璃釉が施されている。

46～48 は軟質施釉陶器灯明皿、**49** は受皿である。口唇部に煤が厚く付着している。48 のみは煤の付着が認められず、未使用品と思われる。

50 は京焼系陶器灯明皿で、口唇部に煤が付着している。

51 は左巻き三巴文軒丸瓦である。珠文は大粒で、内区を分ける圏線を持つ。44～51 は 19 世紀後半の所産である。他に近代の瀬戸磁器色絵碗 42 が出土しているが、現在も神社が祀られていることからすれば至極当然のことであろう。（瀬川）

5．小結

今回の調査は、当古墳の墳丘の調査としては造り出しを調査した第8次調査に次いで2度目の調査になる。両調査とも当古墳の環境整備事業に伴って実施したもので、墳丘全体の規模や構造を調べるためのものではなく、必要最小限の範囲の調査を行ったものであったが、墳頂部と段築部の埴輪列の存在や葺石の確認など多くの成果が得られた。

当古墳は、墳頂に旧御願塚村の3社（北ノ神社・中ノ神社・南ノ神社）の一つ南之神社が祀られ、古くから村の崇拝を集めてきた（『御願塚村社寺明細書』明治 12 年）。神社造営の際に墳頂部は削平され、北側の集落に向けて石段が設けられるなど、古墳の外形に少なからず影響を与えてきたが、付近の古墳が消滅していることを考えれば、神社の存在が当古墳の保存に大きく寄与してきたことは否めない事実である。

今回の調査で、神社造営による墳丘への影響についても明らかになった。その一つは、調査地点の石段付近が、石段に沿って大きく盛り上がっていたが、それは後世の盛土で、厚い所では 1.2 mほどあることがわかった。盛土が行われた時期は、第7層から出土した唐津焼胎土目皿(37)、同砂目皿(38・39）などから 17 世紀前半以降の盛土であることがわかった。現在の社殿の建立時期は、建築学的調査によって 17 世紀中期と推定され（伊丹市教育委員会 2000)、また明治 32 年の「御陵墓故跡取調書」(『本田家文書』）所収の社殿棟札の写しによれば、延宝9年（1681）の建築となっている（「補論Ⅱ」参照）ので、今回の調査結果が社殿や覆屋建立時期と概ね符合することがわかった。

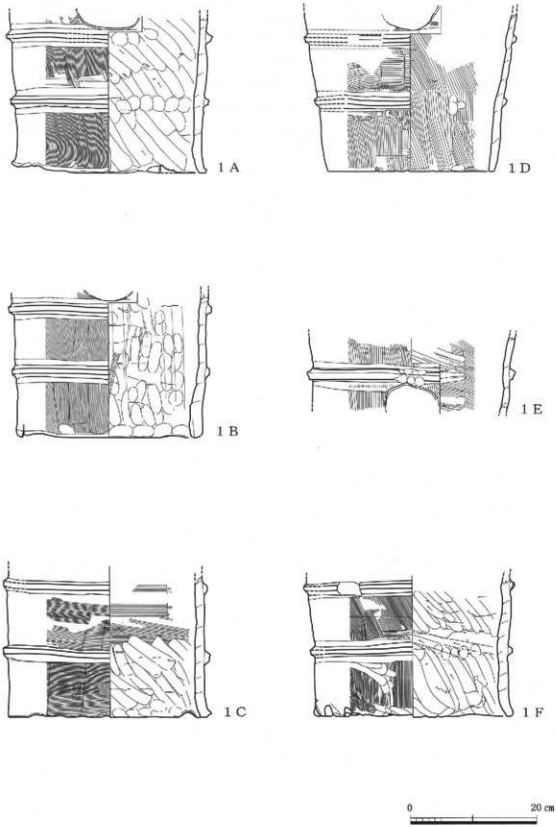
しかし、盛土は一度に行われたものではなく、神社が造営された延宝9年頃に第一段階の盛土が行われ、第3層出土の陶磁器（42・44～51）からみて、幕末から明治以降にさらに盛土が行われ、その上に石段が設けられたことがわかった。また、墳頂部の埴輪列については神社境内の整地時に埴輪上部が大きく削平を受けていることもわかった。円筒埴輪は基底部から1・2段目までが残っていたに過ぎず、墳丘封土の流出が埴輪列付近まで迫り、基底部が顔を出すような状態であった。

墳頂部では6基の円筒埴輪が 0.1～0.15 mの間隔で配列されていた。その配置は緩やかに弧を描いているので、墳頂部を巡っているものであろう。

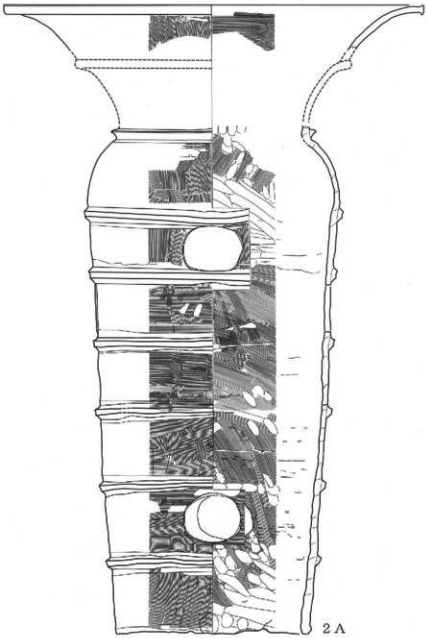
墳丘裾の段築部では6基の埴輪の存在が確認できたが、うち2基（埴輪2E・2F）は木の根の攪

乱および封土の流出によって埴輪埋設の掘り方のみの確認となった。段築部の埴輪２Ａは朝顔形埴輪である。この朝顔形埴輪と円筒埴輪がどのような配列で置かれていたのかは、今回の調査では明らかにできなかった。形象埴輪は、段築部から蓋形埴輪が４点出土した。いずれも破片であって原位置は確認できないが、出土状況から判断すると墳頂部に存在した可能性が高いと考えられる。

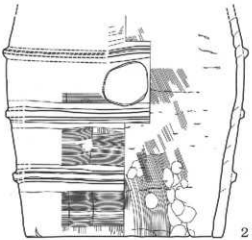
葺石は、段築に集積していたほか、一部は段築から墳丘斜面に貼り付いた状態で検出された。その出土状態から墳丘斜面に葺石が存在していたことは間違いないが、その量は墳丘全体を覆うほどではなかった。今回はわずかな範囲での調査でもあり、葺石の葺かれていた範囲が限定的なものであったかどうか即断することはできないが、部分的な葺石にとどまっていた可能性があることを指摘しておきたい。（小長谷）

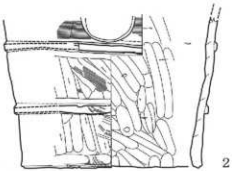


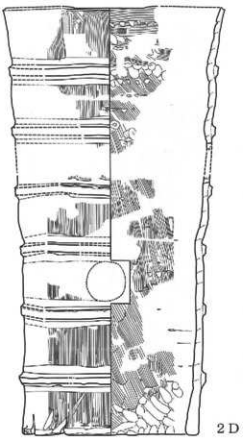
第30図　墳頂部出土埴輪



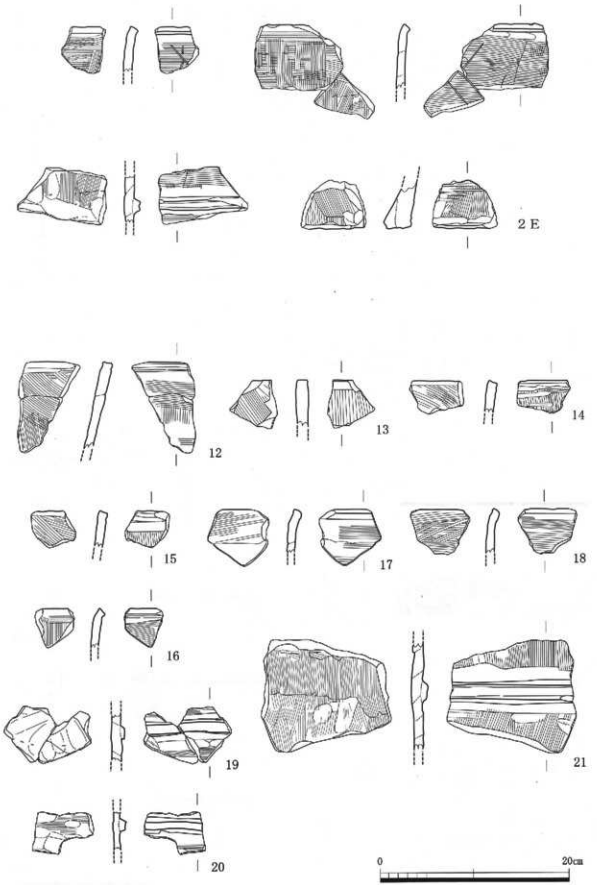
第 31 図　段築部出土埴輪（1）



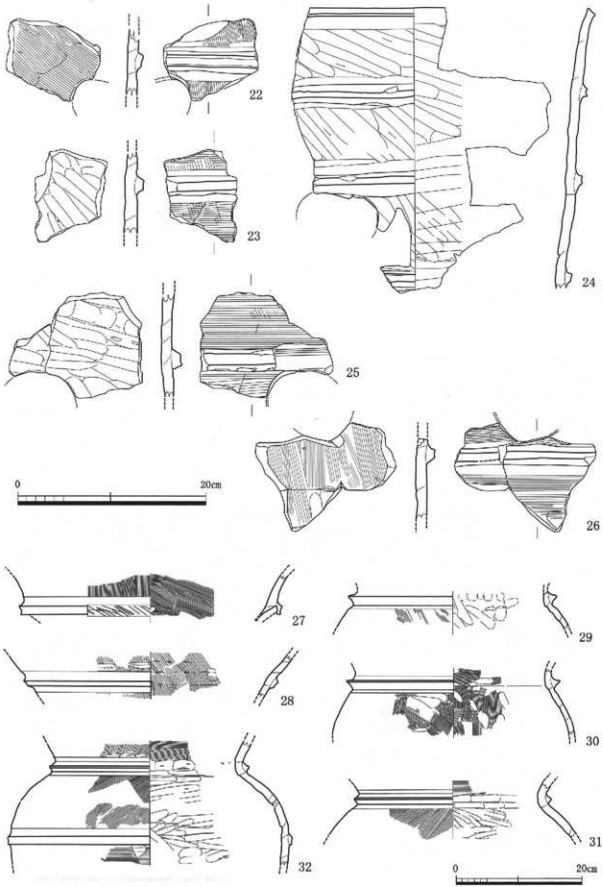




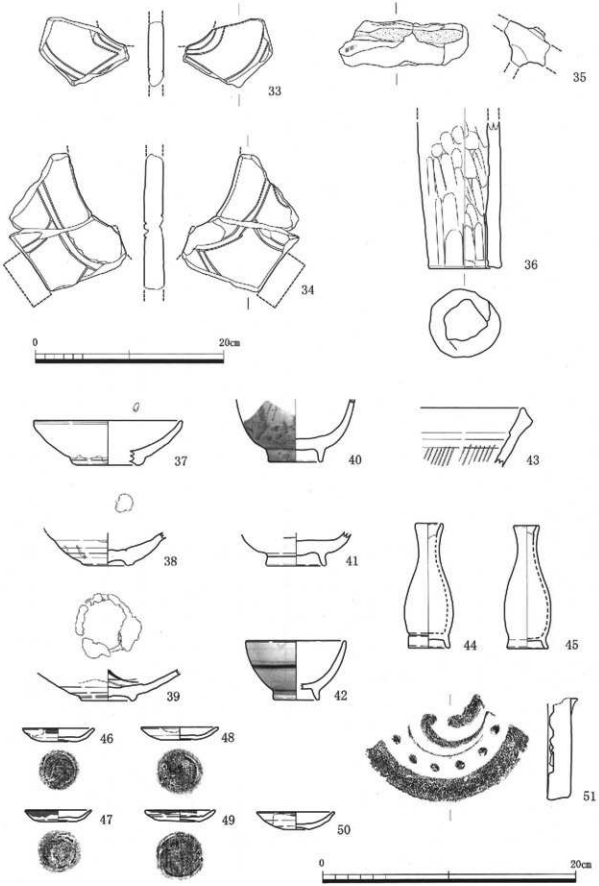
第32図　段築部出土埴輪（2）



第33図　段築部出土埴輪（３）



第34図　段築部出土埴輪（4）



第35図　段築部出土埴輪（5）、出土遺物

遺物番号	出土位置	種別	部位	法量						胴破厚	口縁部	突帯		焼成
				器高	底径	口径	底部高	突帯間隔	最上段高	1段目/以上	形状	形状	幅/高さ	
埴輪1A	墳頂部	円筒	1段目～3段目	(25.5)	30.9	—	10.7～11.6	10.2～10.4	—	1.1～1.5 1.2～1.6	—	b'	1.7 0.8	土師質 (硬質)
埴輪1B	墳頂部	円筒	1段目～3段目	(23.1)	29.6	—	10.8	10.0	—	1.2 1.4～2.2	—	b	2.1 0.6	土師質 (硬質)
埴輪1C	墳頂部	円筒	1段目～3段目	(22.6)	32.1	—	9.9～11.0	10.7～11.1	—	1.2～1.4 1.4～1.6	—	b'	2.3 0.8	土師質
埴輪1D	墳頂部	円筒	1段目～3段目	(25.4)	26.2	—	11.3	10.0	—	1.1 1.4	—	b	1.9 0.7	土師質
埴輪1E	墳頂部	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.8～1.1	—	b	2.0 0.9	土師質
埴輪1F	墳頂部	円筒	1段目～3段目	(22.3)	30.5	—	10.5～10.8	10.2～10.6	—	1.7 1.7	—	b	1.9 0.8	土師質
埴輪2A	段築部	朝顔	1段目～最上段5条6段	99.4	30.7	67.2	11.3～11.8	10.8～12.0	—	1.2～1.4 1.4～1.6	/	b'	1.9 0.7	土師質 (硬質)
埴輪2B	段築部	円筒	1段目～4段目	(34.9)	31.0	—	9.9	9.7～10.1	—	0.7～1.4 1.2～1.4	—	b	2.2 0.7	土師質
埴輪2C	段築部	円筒	1段目～3段目	(24.3)	28.6	—	9.7～10.0	10.1	—	1.1～1.3 1.7	—	e	1.6 0.5	土師質
埴輪2D	段築部	円筒	6条7段	67.1	27.8	35.2	9.0～9.6	9.1～9.5 10.5～11.0	9.5	1.1～1.4 2.0	c	b	2.2～2.8 0.7	土師質
埴輪2E	段築部	円筒	口縁部 突帯部 基底部	—	—	—	—	—	—	0.8～0.9 1.7～3.0	c	b'	1.8 0.7	土師質 (硬質)
埴輪12	段築部	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.2	b	—	—	土師質
埴輪13	段築部	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	1.2～1.4	b	—	—	土師質
埴輪14	段築部	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	1.0	e	—	—	土師質
埴輪15	段築部	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.9	c	—	—	土師質
埴輪16	段築部	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.8～0.9	e	—	—	土師質
埴輪17	段築部	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.9	e	—	—	土師質
埴輪18	段築部	円筒	口縁部	—	—	—	—	—	—	0.8～0.9	c	—	—	土師質
埴輪19	段築部	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0～1.1	—	e	1.4 0.5	土師質
埴輪20	段築部	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.6～0.8	—	c	1.6 0.7	須恵質
埴輪21	段築部	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0～1.2	—	d	2.5 0.6	土師質
埴輪22	段築部	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0～1.1	—	d	2.0 0.5	土師質
埴輪23	段築部	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.1～1.4	—	b	2.1 0.7	土師質 (硬質)
埴輪24	段築部	円筒	最上段～5段目	(30.0)	—	—	—	9.3～10.4	8.1	0.8～1.1	c	b'	2.1 0.7	須恵質
埴輪25	段築部	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0～1.1	—	b	2.1 1.1	土師質

表11　第9次調査埴輪観察表（1）

色調	外面調整			内面調整	透かし孔	突帯間隔	備考
	1次調整	2次調整	1段目(最上段)		配置	設定技法	
5YR3/0 明赤褐色	タテハケ (7～9本/cm)	×	タテハケ (7～9本/cm)	斜め方向の指ナデ、突帯貼り付け位置は指オサエ	3段目	—	タテハケは丁寧に施す。ハケ原体幅約4cm/30本。底面に棒状圧痕、葉状圧痕、木目痕
7.5YR5/6 橙色	タテハケ (12本/cm)	×	タテハケ (12本/cm)	指ナデのあとタテハケ。下端は指オサエ	3段目	—	タテハケは大変丁寧に施す。底面に作業台の木目痕
10YR6/6 明黄褐色	タテハケ (5～8本/cm)	Be種コハケ (5～8本/cm)	Be種コハケ (5～8本/cm)	1段目は斜めハケ調整のあと指ナデ。2段目はヨコハケ。	—	回線	基底は4攻の粘土帯を反時計周りに貼り合せる
5YR6/6 橙色	タテハケ (4～5本/cm)	Bd種ヨコハケ (4～6本/cm)	タテハケ (4～5本/cm)	タテハケ(4～5本/cm)	3段目	回線	底面に木目痕、葉状圧痕
7.5YR6/8 橙色	タテハケ (4～6本/cm)	×	—	ヨコハケ(4～6本/cm)、ヨコナデ	○	—	脚部最大径32.5cm、3段目と4段目、あるいは5段目と6段目
2.5YR6/6 橙色	タテハケ (6～9本/cm)	×	タテハケ (6～9本/cm)	斜め方向の指ナデ、突帯貼り付け位置に指オサエ	3段目	回線？	タテハケは丁寧に施す。底面に葉状圧痕、棒状圧痕
5YR5/8 橙色	タテハケ (9本/cm)	Bb種ヨコハケ (7～10本/cm)	タテハケ (9本/cm)	1段目はタテハケのあと斜め指ナデ。2・3段目はタテハケ、4・5段目は斜めハケ、頂部上半はタテハケ、6段目～胴部下半は斜めハケのあとヨコ・斜めの指ナデ。口縁部はヨコハケ、ハケ原体条数7～10本/cm。	6段目 5段目 2段目	回線	タテ・ヨコハケは丁寧。口縁部外面はタテハケ(9～10本/cm)
10YR7/6 明黄褐色	タテハケ (4～5本/cm)	Be種ヨコハケ (6～7本/cm)	Be種ヨコハケ (6～7本/cm)	タテハケ(4～5本/cm、7～8本/cm)、下端はナデ調整、突帯貼り付け位置は指オサエ	3段目	—	底面に葉状圧痕。埴輪17・18が口縁部。外面調整はヨコハケ(6～7本/cm)、内面はヨコハケ調整(6～7本/cm)
5YR6/8 橙色	タテハケ	Bd種ヨコハケ (9本/cm)	タテ・斜めの指ナデ	斜め・タテ方向の指ナデ、下端はヨコナデ・指オサエ	3段目	回線	1条目突帯は板押圧による整形
5YR6/4 にぶい橙色	タテハケ (4～6本/cm)	×	タテハケ (4～6本/cm)	最上段はヨコハケ、以下はタテハケ調整(4～6本/cm)。下端は指オサエ	3・5段目	—	内外面ハケ目は同一原体を使用。底面に棒状圧痕
7.5YR5/6 明褐色	タテハケ (6～7本/cm)	B種ヨコハケ (6～7本/cm)	タテハケ (6～7本/cm)	1段目と突帯部はタテハケ調整、最上段はヨコハケの後、タテハケ調整	—	—	最上段にヘラ記号 内外面ハケ目は同一原体
10YR6/6 明黄褐色	タテハケ (7本/cm)	—	ヨコハケ (7本/cm)	ヨコハケ、タテハケ、斜めハケ(5本/cm)	—	—	
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (4～6本/cm)	—	タテハケ (4～6本/cm)	斜めハケ(4～6本/cm)	—	—	
5YR6/6 橙色	タテハケ (5本/cm)	—	タテハケ (5本/cm)	斜めハケ(5本/cm)	—	—	
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (5本/cm)	—	タテハケ (5本/cm)	斜めハケ(5本/cm)	—	—	
5YR6/6 橙色	—	—	ヨコハケ (6本/cm)	ヨコハケ・タテハケ(6本/cm)	—	—	
7.5YR6/6 橙色	—	—	ヨコハケ (6～7本/cm)	ヨコハケ(6～7本/cm)	—	—	埴輪2Bの口縁部
7.5YR6/6 橙色	—	—	ヨコハケ (6～7本/cm)	斜め・ヨコハケ(6～7本/cm)	—	—	埴輪2Bの口縁部
7.5YR5/6 橙色	タテハケ	ヨコハケ (7本/cm)	—	指ナデ	—	—	突帯は板押圧整形、1条目突帯か
10YR6/4 にぶい黄褐色	—	ヨコハケ (7～8本/cm)	—	ヨコハケ(7～8本/cm)、ナデ・指オサエ	—	—	
7.5YR6/8 橙色	タテハケ (6～7本/cm)	×	—	タテハケ(6～7本/cm・5本/cm)	—	—	内面タテハケ原体が突帯位置で異なる
7.5YR6/8 橙色	タテハケ (6～7本/cm)	×	—	斜めハケ(5～6本/cm)	○	—	
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (4本/cm)	B種ヨコハケ (5本/cm)	—	斜め方向の指ナデ	—	—	静止痕が斜めに傾く
2.5YR6/6 橙色	斜め指ナデ	×	斜め指ナデ ヨコナデ	斜め方向の指ナデ、5段目にヨコナデ、突帯貼り付位置をヨコナデ	5段目	—	横断面が楕円形の円筒埴輪 透かし孔は楕円形
7.5YR6/6 橙色	タテハケ	Bd種ヨコハケ (5本/cm)	—	斜め方向の指ナデ、突帯貼り付け位置はヨコナデ	○	回線	回線は2条

遺物番号	出土位置	種別	部位	法量						器壁厚	口縁部	突帯		焼成
				最高	底径	口径	底部高	突帯間隔	最上段高	1段目/以上	形状	形状	幅/高さ	
埴輪26	段築部	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.1～1.2	—	b	2.2 0.8	土師質
埴輪27	段築部	朝顔	口縁部 突帯	—	—	—	—	—	—	1.1～1.4	—	/	1.9 0.9	土師質
埴輪28	段築部	朝顔	口縁部 突帯	—	—	—	—	—	—	1.1	—	/	2.3 0.7	土師質
埴輪29	段築部	朝顔	頸部突帯	—	—	—	—	—	—	0.9～1.0	—	/	2.5 1.1	土師質
埴輪30	段築部	朝顔	頸部突帯	—	—	—	—	—	—	0.9	—	/	2.7 1.1	土師質
埴輪31	段築部	朝顔	頸部突帯	—	—	—	—	—	—	1.3	—	/	1.7 0.6	土師質
埴輪32	段築部	朝顔	頸部突帯 ～胴部	—	—	—	—	—	—	1.1～1.2	—	d	2.0 0.4	土師質

表 12　第 9 次調査埴輪観察表（2）

遺物番号	出土位置	種別	部位	焼成	色調	胎土	備考
埴輪33	段築部	蓋形埴輪	飾り板	土師質	7.5YR6/6 橙色	砂粒、クサリ礫、1～3mm大の石英・長石・チャート粒を多く含む	内縁を残す
埴輪34	段築部	蓋形埴輪	飾り板	土師質	7.5YR6/8 橙色	砂粒、クサリ礫、1～3mm大の石英・長石・チャート粒を多く含む	内縁と長方形透かし孔の一辺を残す
埴輪35	段築部	蓋形埴輪	笠部中位突帯	土師質	7.5YR6/8 橙色	0.5～8mm大の石英・長石、砂粒を多く含む	7.5Y7/1白灰色と7.5Y5/1灰色の胎土がマーブル状
埴輪36	段築部	蓋形埴輪	立ち飾り軸部	土師質	7.5YR6/8 橙色	砂粒、雲母、クサリ礫、2mm大の礫（長石・石英・チャートなど）を含む	

表 13　第 9 次調査形象埴輪観察表

色調	外面調整			内面調整	透かし孔	突帯調整	備考
	1次調整	2次調整	1段目(最上段)		配置	設定技法	
10YR8/6 明黄褐色	タテハケ	B種ヨコハケ (6～7本/cm)	—	タテハケ(6～7本/cm)	○	—	
10YR8/4 にぶい黄橙色	—	—	タテハケ (8本/cm)	ヨコハケ(7～10本/m)	—	—	突帯部径は41.7cm
7.5YR6/3 にぶい褐色	—	—	タテハケ (5～6本/cm)	タテハケ(5～6本/cm)	—	—	突帯部径は40.3cm
10YR8/6 明黄褐色	タテハケ (9本/cm)	—	—	指ナデ	—	—	突帯部径は32.9m
7.5YR6/4 にぶい褐色	タテ・斜めハケ (7～9本/cm)	—	—	胴部はタテハケ、頸部はヨコハケ(8～9本/m)	—	—	突帯部径は33.7cm
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (7本/cm)	—	—	胴部は斜め方向の指ナデ、受部はヨコハケ、突帯貼り付け位置はヨコナデ	—	—	突帯部径は31.1cm
7.5YR6/6 橙色	タテハケ (7～8本/cm)	B種ヨコハケ (7～8本/cm)	—	受部はヨコハケ(6～7本/cm)、突帯貼り付け位置はケズリ、肩部以下はヨコナデ	—	—	胴部突帯幅2.0m、高さ0.4cm 突帯部径31.6cm 受部外面はタテハケ(8～7本/cm)

遺物番号	出土位置	種別	器種	器高	口径	底径 高台径	備考
37	第7層	陶器	皿	3.6	11.7	5.2	唐津　胎土目
38	第7層	陶器	皿	—	—	4.1	唐津　砂目
39	第7層	陶器	皿	—	—	4.0	肥前 鉄絵　砂目
40	第2層	磁器	碗	—	—	4.0	肥前 染付　蛇付無釉
41	第2層	磁器	碗	—	—	4.6	肥前 染付　蛇付無釉
42	第3層	磁器	碗	4.8	7.8	3.5	瀬戸 色絵
43	第2・3層	陶器	擂鉢	—	—	—	丹波
44	第3層	陶器	御神酒徳利	10.0	2.0	3.2	京焼系 外面に鉄釉無、高台は露胎
45	第3層	陶器	御神酒徳利	9.8	1.9	3.1	京焼系 外面に褐鉄釉、高台は露胎
46	第3層	軟質施釉陶器	皿	1.1	5.7	/	口唇部に煤付着
47	第3層	軟質施釉陶器	皿	0.9	5.2	/	口唇部に煤付着
48	第3層	軟質施釉陶器	皿	1.0	6.1	/	口唇部に煤の付着なし
49	第3層	軟質施釉陶器	受皿	0.9	5.6	/	口唇部に煤付着
50	第3層	陶器	皿	2.1	6.2	/	京焼系 口唇部に煤付着
51	第3層	瓦	軒丸瓦	/	/	/	左巻き三巴文

表14　第9次調査遺物観察表

第３節　御願塚古墳第 10 次調査

調査面積　52㎡（6.5 × 8 m）
調査期間　平成 17 年２月１日～２月 18 日
調査担当者　小長谷正治　細川佳子

１．調査の概要

この調査は、個人住宅建設に伴う、発掘調査と範囲確認のための学術調査を実施したものである。当調査地点は御願塚古墳の前方部の西側に位置し、近年の調査で明らかになった二重目の周濠（以下、外濠）の南側延長上にあたっている。従前建物は木造２階建てであったため、地下遺構の存在が危ぶまれたが、建物解体時に基礎が地山まで及んでいないことが分かり、外濠の確認を主眼とする調査となった。

調査方法

今回の調査は外濠を検出することが目的であったため、南隣接地で行った第５次調査成果（伊丹市教育委員会 1994）をもとに調査範囲の設定を行った。敷地内の南・北側は隣接家屋があるため、東寄りに住宅建設で杭を打つ部分（19㎡）を中心に南北 6.5 m、東西 8 m の長方形の調査区を設定した。

調査は遺構を確認できる直前までを重機で掘削し、それ以後はすべて人力で掘り下げ・精査を行った。適宜、実測・写真撮影を行い記録保存につとめた。

掘削残土は場外搬出せずに調査区西側に仮置きし、調査終了後に速やかに埋め戻した。

２．基本層序（第 36 図　図版 26）

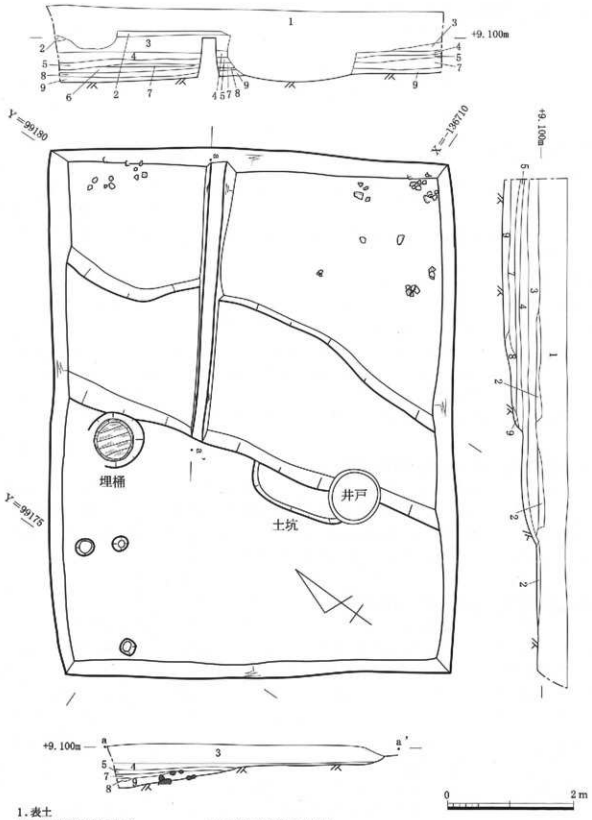
土層については、トレンチ南・北・東壁と、外濠内の堆積状況を観察するために外濠中央に設けた東西畦で断面実測を行っている。第１層は表土で、従前建物に伴う堆積層である。調査区全体に 0.4 ～ 0.5 m の厚さで堆積する。第２層は暗灰黄色土層で、この層を除去すると地山が現れる。遺構はすべて地山で検出している。第３層から９層は外濠埋土である。

３．調査成果（第 36 図　図版 26）

今回の調査で検出した遺構は外濠の他に、コンクリート枠の井戸１基、近世の埋桶１基、ピット３基、土坑１基である。ピットからは時期を示す遺物は出土していない。土坑は外濠に切られている。

外濠は調査区内を南北方向に走る西肩を確認することができた。検出面の標高は約 9.0 m で、規模は長さ 6.3 m、最大幅 5.3 m、最深部の深さ 0.6 m である。外濠の西側法面は下端から上端まで一度に傾斜せず、２段に落ちる構造を呈していることが確認できた。西肩から 0.11 ～ 0.16 m で落ちる傾斜角 30 度の斜面から、幅 1.1 ～ 2.1 m のテラス状の平坦面が続き、そこからさらに東壁に向かって約 0.4 m の比高差で傾斜（傾斜角 10 度）していく。

外濠は先ずシルト（第９・８層）と埴輪片を多く含む粘土層（第７・６層）の上に、第５層が堆積してテラス東側が埋まり、７世紀から 16 世紀の遺物を含む第３・４層で外濠全体が埋没する。外濠内から埴輪片が出土しているが、テラス側では全く検出されず、テラス東側、特に東壁寄りで検出されていることから、堤に並べられていた埴輪類が外濠内に落ち込んだものと考えられる。埴輪片は底面に貼り付いた状態ではなく、全て 0.1 m 以上浮いた状態、あるいは埋土からの出土である。第８・９層は 10㎝大の礫を多く含んでいるが、古墳に伴うものかどうかは不明である。



1. 表土
2. 2.5Y4/2暗灰黄色土層
3. 2.5Y5/6黄褐色粘質土層
4. 5Y5/3灰オリーブ色砂質土層
5. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土層
6. 10YR3/3暗褐色粘土層
7. 10YR3/2黒褐色粘土層
8. 10YR3/4暗褐色シルト層
9. 10YR4/1褐灰色シルト層（10cm大の礫を多く含む）

第36図　平面図・断面図

４．出土遺物

外濠内から埴輪片、須恵器片が出土した。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪を確認している。須恵器はほとんどが甕の体部破片であるが、器形を把握できる資料はなかった。須恵質の埴輪片は器面調整がよく残っているが、土師質の埴輪片は風化による磨耗が著しく、器面調整はかなり不明瞭であった。埴輪の記述に関しては第８次調査の埴輪属性に準じている。

１）円筒埴輪・朝顔形埴輪（第 37・38 図　図版 27）

埴輪１　上から４段目までの破片である。残存高 35.8㎝、口縁部径 41.9㎝、最上段高 11.0㎝、突帯間隔は 9.5㎝と 11.1㎝である。口縁の形状は（ｂ）で、上面は強いナデによりＭ字形を呈している。突帯の形状は（ｄ'）で、幅 2.4㎝、高さ 0.4㎝である。

外面調整はタテハケによる１次調整のあと、２段目にＢc 種ヨコハケを施す。静止痕の間隔は５～７㎝前後で、静止痕の長さからヨコハケ原体幅は 8.5㎝（10 本 /㎝）程度であったと考えられる。突帯間隔の狭い３段目にはヨコハケが施されていないことから、４段目も突帯間隔が狭いものと推測される。タテハケ原体条数は 10 本 /㎝で、タテ・ヨコハケは同一工具によるものと思われる。

内面調整は４～３段目はタテ方向に指ナデ、３段目～最上段は斜め方向に指ナデを施す。胎土は砂粒、１～５㎜大の長石・石英・白色粒が大変目立っている。

埴輪２　上から２段目までの破片である。残存高 22.2㎝、口縁部径 33.2㎝、最上段高 11.5㎝を測る。口縁の形状は（ｂ）で、上面に強いヨコナデを加えている。突帯形状は（ｄ'）を呈し、幅 2.0㎝、高さ 0.5㎝である。

外面調整は２次調整によるＢ種ヨコハケを施している。最上段のヨコハケは１周で、静止痕は垂直である。２段目は突帯間を、１周のヨコハケで満たすことが出来ないため、ヨコハケを少なくとも２周させている。静止痕はやや傾いているが、静止痕の間隔は 3.5 ～ 5.5㎝である。ハケ原体条数は８本 /㎝で、原体幅は７㎝程度と思われる。

内面調整は２段目に斜め方向の指ナデを施し、最上段は原体条数７本 /㎝の斜めハケ調整を行っている。最上段下に円形透かし孔を設けていることから、透かし穿孔位置が５段目であり、埴輪２が５条突帯６段構成であったことが推測される。胎土は砂粒、１～ 10㎜大の石英・長石・チャートなどが大変多く含まれている。

埴輪３～埴輪 22　突帯部の破片である。突帯の形状により（ｂ）埴輪 10 ～ 22、（ｃ）埴輪５、（ｄ）埴輪６～９、（ｅ）埴輪３・４の４種類を確認している。

埴輪３・４は幅 1.3㎝、高さ 0.4㎝を測るたいへん小振りな突帯で、埴輪５はそれらよりも高さを持つ突帯である。

埴輪６～９は外面に２次調整のヨコハケを施しているが、静止痕はほぼ垂直になっており、静止痕の間隔は短い。内面は指ナデやタテハケ調整を行っている。

埴輪 20 は外面にＢ種ヨコハケを施し、静止痕は垂直に残っている。透かし孔を持っている。砂粒、クサリ礫、石英・長石粒を多く含む胎土である。

埴輪 23　胎土・焼成状態・内面調整などの特徴から埴輪１の基底部と考えられる。外面は指ナデ、内面は斜め方向に指ナデ調整し、下端を指オサエしている。

埴輪 24　朝顔形埴輪口縁部突帯である。突帯の形状は断面台形で、幅 2.5㎝、高さ 0.8㎝を測る。器面調整は風化によりかなり不明瞭であるが、外面はタテハケを施し、内面にはヨコハケ調整が認められる。ハケ原体条数は６本 /㎝である。

2）形象埴輪（第38・39図　図版28・29）

形象埴輪には蓋、家、大刀、人物、馬が見られる。[1]

①蓋形埴輪

埴輪25・26は飾り板である。風化による器面剥離が著しく、線刻はかなり不明瞭である。

埴輪25は内外縁を残す資料で、外縁に沿って平行線を2条配し、内縁側の刻線にはV字状に弧線が結ぶ。向かって左面も同様の刻線であったと思われる。

埴輪26は内縁を失っているが、それに沿って配された2条の平行線が辛うじて残っている。表裏面は同様の線刻を持っていたと思われる。

②家形埴輪

埴輪27は入母屋造りの上屋根部分である。内側下端に突起が廻っていて、上・下屋根が分離する組み合せ式の可能性があるが、下屋根上端と接する部分が擬口縁状になっているだけかもしれない。

外面には屋根材を押さえる押縁を表現した粘土帯の剥離面が桁行方向に残っているが、屋根材の表現はなされていない。内外面はナデ調整を施している。

埴輪28は切妻形の屋根部分で、破風板に直角に取り付く2本のレール状の部材と剥離痕が残存する。その上に堅魚木が載ると見られる。破風板の表面には円弧状の線刻が残っており、棟木の剥離痕も残っている。風化のため表裏面の調整は不明瞭であるが、上面に赤色顔料がわずかに残る。

埴輪29は切妻形の屋根の部材で、おそらく破風板に接して取り付くものである。

埴輪30は屋根部片で網代文様が描かれている。網代は格子区画内に縦・横線を線刻で表現している。裏面に壁の剥離面が残っている。

③大刀形埴輪

埴輪31は柄頭または柄元の飾り部分である。幅4㎝、厚さ1.3㎝で、長方形を呈していたと思われる。磨耗のため、調整や装飾は不明瞭である。

④人物埴輪

埴輪32は美豆良である。先端から4.7㎝ほどが残存しており、断面は1.9×1.5㎝のやや楕円形である。磨耗が著しく調整は不明瞭。

埴輪33は胴部片である。腰に締めた幅広の腰帯から上衣の裾が開く。裾にはタテハケを施し、帯と内側はナデ調整を行っている。

⑤馬形埴輪

埴輪34は断面T字形のたてがみである。頂部は幅4.7㎝の丸みを帯びた平坦面を呈している。斜め方向のハケ調整を施し、それ以外はヨコナデを施している。

埴輪35は右耳の付根付近である。耳と面繋は剥離している。左側先端部にたてがみのハケ目が確認できる。外面は不定方向にナデ調整し、内面は耳の貼り付け位置に強くナデを加えている。

埴輪36は右顔である。面繋の剥離面と、そこから下の顔側面を形作る粘土板の剥離面が平行して残っている。板の上に鞍に結ぶ手綱が貼り付けられている。磨耗が著しく、外面の調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整が観察できる。

埴輪37は右顔の破片である。埴輪36に比べてかなり小型の馬形埴輪で、顔側面は一続きに作られている。面繋の剥離面が残っており、その下の手綱には幅1㎝、高さ0.7㎝の断面台形の突帯を貼り付けている。

埴輪38は馬の脚で、埴輪37のような小型馬の脚であったと思われる。粘土板を筒状にして絞り込

んで成形したもので、内面にその痕跡が残っている。脚は円柱ではなく、足先を屈曲させて蹄を作りだしている。外面調整は磨耗により不明瞭である。

⑥不明

埴輪39は板状の部分が途中から二又に分かれた破片で、馬の頭部かもしれない。表面はタテハケ、裏面にはヨコ・斜めハケを施している。ハケ原体幅は約2.8cm、条数8～9本/cmである。たてがみに当たる頂部は丁寧にヨコナデする。首部はヨコ方向の強い指ナデ、内面はナデ調整を施している。

埴輪40は埴輪39がたてがみとすると、その前端部にあたると考えられる。右上端が外反しており、たてがみ先端の飾りへ続く。二面ともタテ・ヨコハケを施している。

埴輪41は動物埴輪の胴部と脚の付根部分かと思われる破片で、直立する脚部から胴部へ向かって湾曲していくようすや粘土紐を積み上げているようすが観察できる。外面は下から上への強い指ナデ、内面は強くヨコナデを施している。焼成状態や内外面の調整、胎土などから判断して埴輪39と同一個体と考えられる。

埴輪42は動物埴輪の胴部かと思われ、復元径約3.8cmの孔が穿たれている。孔は外側から内側に向かって穿孔されており、内外面はナデ調整を施している。

3）その他の遺物（第39図）

外濠埋土第3・4層から古墳時代以降の遺物が出土しており、外濠の埋まった時期をある程度示している。図示した遺物のほかに、土師器、黒色土器、龍泉窯青磁碗などが出土している。

43は須恵器平瓶の口縁部である。口縁部はハの字に大きく開き、上面は丸くおさめている。中位に1条の凹線が巡っている。

44は須恵器甕口縁部である。外面肩部に平行タタキ、内面に青海波痕が確認できる。

45は備前焼擂鉢である。口縁の縁帯はすでに幅広であるが、凹線による段は発達していない。端面は内傾して、強いヨコナデを加えられている。内面にやや斜め方向の櫛目を刻んでいる。口縁部は灰赤色、体部内外面はにぶい赤褐色を呈している。

46は瓦質碁盤である。縦横の線刻によって、約2cm四方の桝目を作っている。

5．小結

今回の調査では調査範囲が狭かったものの、かなり良好な状態で外濠を検出することができた。従前の調査成果と合わせて、外濠の構造や埴輪についてまとめておく。

これまでの調査では後世の削平もあり、検出された外濠の深さは0.2～0.3mの浅いものであったが、今回は最深部で0.6mを測り、実際にはかなり深さがあったことがわかった。外濠幅は東肩が調査区外であるため確実な幅を確認することが出来なかったが、残存幅が5.3mあり、上面幅はそれ以上であることは明らかである。南隣接地の第5次調査で検出された外濠の幅は3.4～3.8mで、当調査区に比べてかなり狭くなっている。検出面の標高は約8.8mで、当調査区より0.2mほど低くなっていることから、より削平をうけた結果だと思われる。ここでは外濠内側肩を検出しており、第8次調査の外濠内側肩ラインとあわせて外濠プランを推定すると、約5.8mの外濠幅を導きだすことができる。

ここで第10・5次調査区を合わせて外濠外側肩のラインを見てみると（第40図）、直線ではなく緩く弧を描いていることに気づく。現在の前方部西側の形状は直線を呈しているが、内濠は後世多くの改変を受けているため、築造時に近い形状を保っている可能性は極めて低い。改変を受ける以前の

形状がどうであったかを知る手掛りとして、明治から大正期に描かれた御願塚古墳の絵図面が残されている（P 107 図B、P 114 図D）。それらを見ると前方部西辺は直線ではなく弧状に描かれ、対する内濠外縁（内濠）も弧状を呈していたことがわかる。今回確認した弧状を呈する外濠は、絵図面を考古学的に評価しえるものである。

外濠の形状は、今回の調査と第５次調査成果から判断して、前方部側の外濠外肩は２段に落ち、内肩はそのまま立ち上がる構造であることが分かった。外濠外側の堤（外堤）の有無であるが、今回の調査では確認することができなかった。しかし、外濠内肩側（墳丘側）には堤が存在していることを考えれば、それとは違った外濠形状（２段落ち）を示している西側にはあえて堤を造らなかった、あるいは必要としなかった可能性も考えられる。

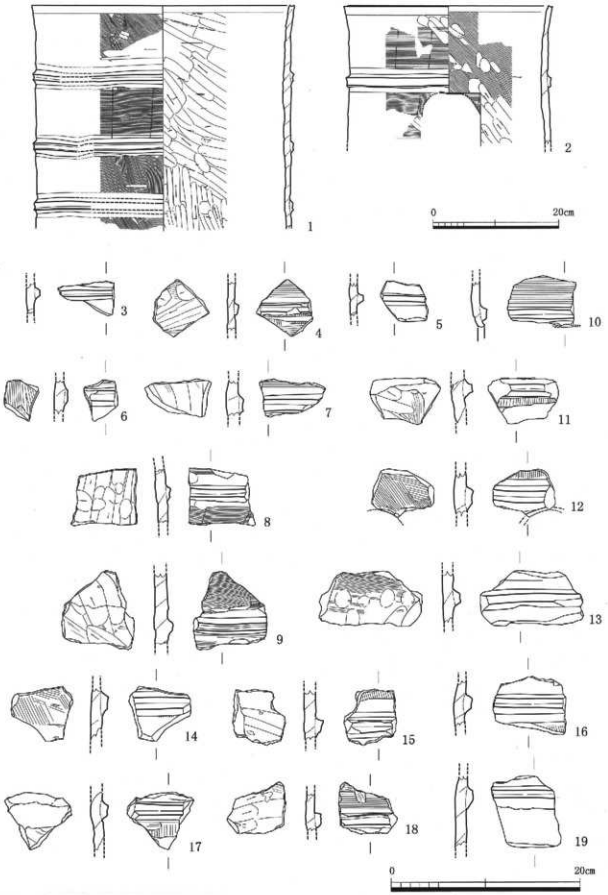
外濠から円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪を検出している。埴輪はすべて外濠の東側で検出されていることから、堤に並べられていた埴輪類が次第に外濠内に落ち込んでいったものと考えられる。円筒埴輪・朝顔形埴輪に関しては、土師質の埴輪片が多くを占めているが、須恵質のものも１/３程度見られ、器体には黒斑が認められないことから、窖窯焼成であることが分かる。外面調整はタテハケによる１次調整だけのものと、Ｂ種ヨコハケによる２次調整を施すものが観察できる。Ｂ種ヨコハケには、静止痕が真っ直ぐに残っているＢc 種ヨコハケが盛行している中で、Ｂd 種ヨコハケが一定量認められるなど、第８・９次調査の埴輪と同じ様な特徴を備えていることから、川西編年第Ⅳ期（川西 1978）に属するもので、５世紀後半の年代が与えられる。

形象埴輪は蓋・家・大刀・人物・馬がある。中でも馬形埴輪には大小が揃っていたことが窺え、たてがみがＴ字形の馬も見られる。さらに、人物埴輪は小型馬形埴輪に伴う馬引き（馬子）である可能性が指摘されている。第８次調査の外濠部（以下、第８次調査）と同様に、これまでの外濠の調査に比べると、形象埴輪が豊富に検出されたと言える。外濠をすべて調査したわけではないので想像の域を出ないが、第８次調査位置が「造り出し」という特別な場所と対峙しているために、そのような特殊性を示しているのではないだろうか。そうであれば、当調査区の様相は、前方部正面にあたる堤が特別に意識され、そこに形象埴輪が並べ立てられていたことを物語っているのかもしれない。円筒埴輪の様相から、検出した埴輪類は古墳築造当初から堤に並べられていたものと判断している。

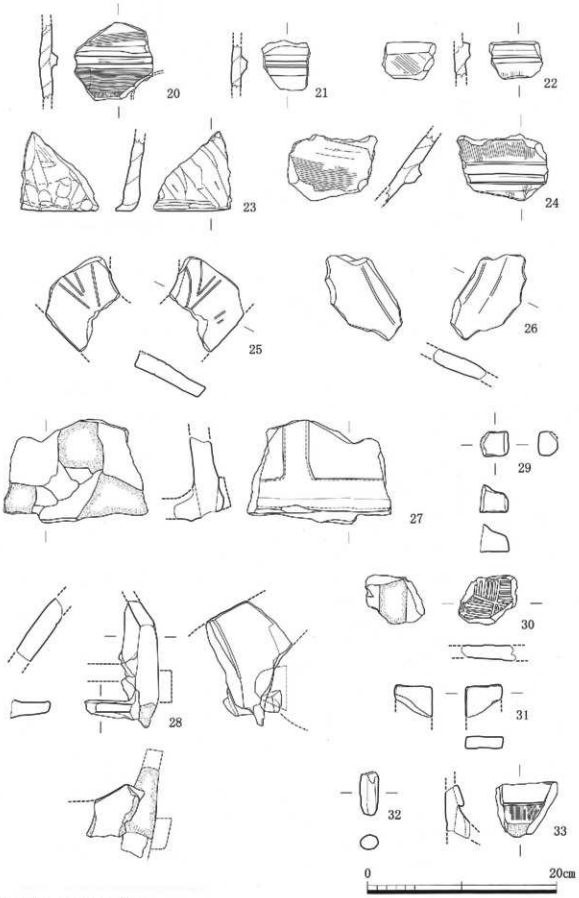
（瀬川）

註

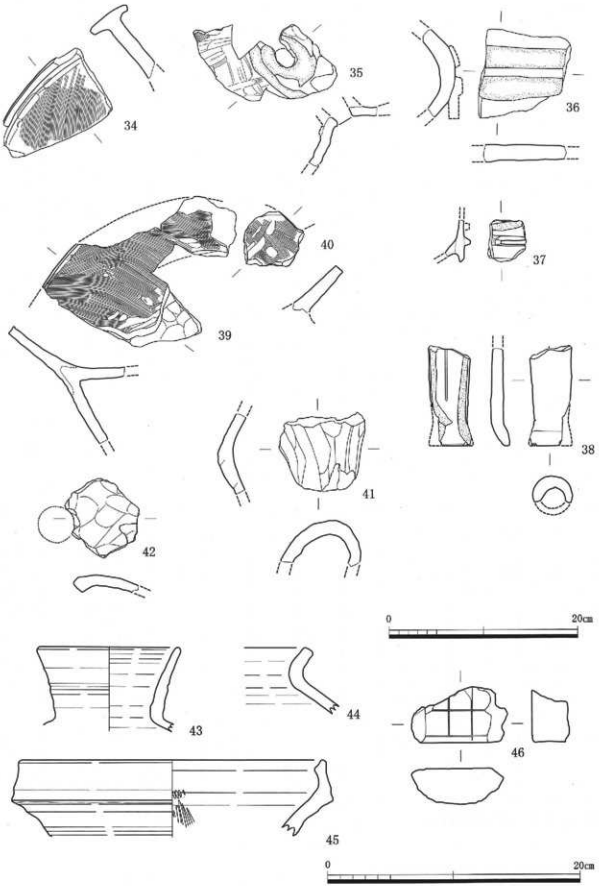
（１）形象埴輪については高橋克壽氏にご教示いただいた。



第37図　出土埴輪（1）



第38図　出土埴輪（2）



第 39 図　出土埴輪（３）、出土遺物

遺物番号	出土位置	種別	部位	法量						器壁厚	口縁部	突帯		焼成
				器高	底径	口径	底部高	突帯間隔	最上段高	1段目/以上	形状	形状	幅／高さ	
埴輪1	外濠	円筒	最上段～4段目	(35.8)	—	41.9	—	11.1 9.5	11.0	0.8～1.3	b	d'	2.4 0.4	須恵質
埴輪2	外濠	円筒	最上段～2段目	(22.2)	—	33.2	—	—	11.5	0.7～1.2	b	d'	2.4 0.5	須恵質
埴輪3	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9	—	e	1.3 0.4	土師質
埴輪4	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.7～0.9	—	e	1.3 0.4	土師質 (硬質)
埴輪5	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.8	—	c	1.3 0.6	土師質
埴輪6	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	d	1.9 0.3	土師質
埴輪7	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1～1.2	—	d	2.1 0.4	土師質 (硬質)
埴輪8	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	d	1.7 0.4	土師質 (硬質)
埴輪9	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.3	—	d	1.8 0.5	土師質 (硬質)
埴輪10	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9	—	b	1.8 0.6	土師質
埴輪11	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.3	—	b	2.1 0.8	土師質
埴輪12	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.2	—	b	2.6 0.7	土師質
埴輪13	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.1	—	b	1.8 0.7	土師質
埴輪14	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.1	—	b	2.7 0.8	土師質
埴輪15	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.2	—	b	2.2 0.8	土師質
埴輪16	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	0.9～1.0	—	b	2.2 0.6	土師質
埴輪17	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.1	—	b'	2.2 0.6	土師質 (硬質)
埴輪18	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	1.6 0.6	土師質
埴輪19	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.1	—	b	2.4 0.7	土師質
埴輪20	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.2	—	b	1.9 0.7	土師質
埴輪21	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.0	—	b	2.2 0.7	土師質
埴輪22	外濠	円筒	突帯部	—	—	—	—	—	—	1.1	—	b	2.3 0.7	土師質
埴輪23	外濠	円筒	基底部	—	—	—	—	—	—	1.1～1.8	—	—	—	須恵質
埴輪24	外濠	朝顔	口縁部 突帯	—	—	—	—	—	—	1.0～1.3	—	—	2.5 0.8	土師質

表 15　第 10 次調査埴輪観察表

色調	外面調整			内面調整	透かし孔	突帯擬似	備考
	1次調整	2次調整	1段目(最上段)		配置	設定技法	
7.5YR6/2 灰褐色	タテハケ (10本/cm)	Bc種ヨコハケ (10本/cm)	タテハケ (10本/cm)	最上段～3段目は斜め方向の指ナデ。4段目以下はタテナデ。	—	—	2段目には2次調整にBc種ヨコハケを施し、突帯間隔は広い。
10YR5/2 灰黄褐色	—	Bb種ヨコハケ (8本/cm)	Bc種ヨコハケ (8本/cm)	2段目に斜め方向の指ナデを施し、最上段は原体条数7本／cmの斜めハケ調整	5段目？	—	Bb種ハケは上方が広い、5条突帯4段構成か？
2.5Y7/4 浅黄色	—	—	—	—	—	—	
10YR6/4 にぶい黄褐色	—	ヨコハケ (6本/cm)	—	ヨコナデ、ヨコハケ	—	—	
2.5Y7/4 浅黄色	—	—	—	—	—	—	
5YR6/8 橙色	—	ヨコハケ	—	タテハケ(5本/cm)	—	—	
7.5YR5/6 明褐色	—	ヨコハケ	—	タテナデ	—	—	
7.5YR6/4 にぶい橙色	—	B種ヨコハケ (8本/cm)	—	タテナデ	—	—	
7.5YR6/6 橙色	—	B種ヨコハケ (9本/cm)	—	タテナデ	—	—	
2.5Y6/3 にぶい黄色	—	B種ヨコハケ (8本/cm)	—	ナデ？	○	—	
10YR7/4 にぶい黄橙色	タテハケ	ヨコハケ	—	タテハケ、斜め方向のナデ	—	—	
2.5Y7/4 浅黄色	タテハケ (6本/cm)	—	—	斜め+ヨコハケ(6本/cm)	○	—	
10YR7/2 にぶい黄橙色	—	—	—	ヨコハケ、ナデ、突帯貼り付け位置を指ミサエ	—	—	
10YR7/3 にぶい黄橙色	タテハケ	—	—	斜めハケ	—	—	
5YR6/6 橙色	タテハケ (6本/cm)	—	—	ナデ	—	—	
10YR7/3 にぶい黄橙色	タテハケ	—	—	—	—	—	
7.5YR5/4 にぶい褐色	タテハケ (4～5本/cm)	—	—	斜め方向のナデ	—	—	
7.5YR6/4 にぶい橙色	—	B種ヨコハケ (6本/cm)	—	ヨコナデ	—	—	
7.5YR7/4 にぶい黄橙色	—	—	—	—	—	—	
10YR6/6 明黄褐色	タテハケ	B種ヨコハケ (9本/cm)	—	—	○	—	静止痕は垂直
10YR7/4 にぶい黄橙色	タテハケ？	—	—	—	—	—	
10YR7/4 にぶい黄橙色	タテハケ	—	—	斜めハケ	—	—	
10YR5/1 褐灰色	—	—	斜め方行に指ナデ	指ナデ、指オサエ	—	—	墳輪1の基底部
10YR7/6 明黄褐色	—	—	タテハケ (6本/cm)	ヨコハケ(6本/cm)	—	—	

遺物番号	出土位置	種別	部位	質感	色調	胎土	備考
埴輪25	外濠	蓋形埴輪	飾り板	土師質	7.5YR5/6 明褐色	1～3mm大の長石・石英粒、砂粒、クサリ礫を多く含む	内外接を残す
埴輪26	外濠	蓋形埴輪	飾り板	土師質	7.5YR6/6 橙色	石英・長石粒、砂粒、クサリ礫を多く含む	
埴輪27	外濠	家形埴輪	上屋根	土師質	7.5YR6/6 橙色	2～4mmの長石・石英粒、砂粒、クサリ礫を含む	
埴輪28	外濠	家形埴輪	上屋根	土師質	5YR6/6 橙色	2mm大の長石・石英、砂粒、クサリ礫を含む	縦板状に接刷
埴輪29	外濠	家形埴輪	屋根部材	土師質	5YR6/6 橙色	クサリ礫、砂粒を含む	棟木？
埴輪30	外濠	家形埴輪	棟垂木	土師質（硬質）	5YR6/6 橙色	2～3mm大の石英・長石、砂粒を多く含む	縦代文板を縦刷
埴輪31	外濠	大刀形埴輪	鼻り	土師質	7.5YR6/6 橙色	雲母、砂粒を含む	柄頭あるいは柄元の鼻り部分
埴輪32	外濠	人物埴輪	美豆良	土師質	7.5YR6/6 橙色	雲母、砂粒を含む	
埴輪33	外濠	人物埴輪	胴部片	土師質	7.5YR6/6 橙色	砂粒・クサリ礫を含む	男子？
埴輪34	外濠	馬形埴輪	たてがみ	土師質	10YR5/6 黄褐色	2～3mm大の石英・長石粒、砂粒、雲母、クサリ礫を含む	断面T字形のたてがみ
埴輪35	外濠	馬形埴輪	右耳付根	土師質	7.5YR6/6 橙色	クサリ礫、砂粒、1～3mmの礫を多く含む	耳と面繋の剥離痕
埴輪36	外濠	馬形埴輪	右顔側面	土師質	5YR6/6 橙色	クサリ礫、砂粒を含む	
埴輪37	外濠	馬形埴輪	右顔側面	土師質	7.5YR5/6 明褐色	砂粒、クサリ礫、雲母を含む	小型馬、面繋の剥離面、手綱突善が残る
埴輪38	外濠	馬形埴輪	脚部	土師質	10YR5/6 黄褐色	クサリ礫が目立つ、砂粒、雲母を含む	埴輪37のような小型馬の脚
埴輪39	外濠	不明	たてがみ？	土師質（硬質）	7.5YR5/3 にぶい褐色	砂粒・クサリ礫、2～3mm大の石英・長石粒などを含む	馬か？たてがみと鞍部が一緒き？
埴輪40	外濠	不明	たてがみ？	土師質（硬質）	7.5YR6/6 橙色	砂粒・クサリ礫、2～3mm大の石英・長石粒などを含む	埴輪39の前端部？
埴輪41	外濠	不明	脚と胴部の付根	土師質（硬質）	7.5YR5/6 明褐色	1～2mm大の石英・長石粒、砂粒、クサリ礫を多く含む	埴輪39と同一個体？
埴輪42	外濠	不明	胴部	土師質（硬質）	7.5YR6/6 橙色	クサリ礫、砂粒、1～3mmの礫を多く含む	穿孔あり、埴輪39と同一個体？

表16　第10次調査形象埴輪観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	器高	口径	底径	備考
43	外濠	須恵器	平瓶	—	11.0	—	
44	外濠	須恵器	甕	—	—	—	
45	外濠	備前陶器	擂鉢	—	21.0	—	口縁部7.5YR4/2灰赤色、体部内外部2.5YR5/4にぶい赤褐色
46	外濠	瓦質土器	茶盤	—	—	—	

表17　第10次調査遺物観察表

補　論

Ⅰ．土製品の表面にみられる砂礫

御願塚古墳から出土した埴輪・土師器・須恵器資料の一部、42 点の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。初めに資料全体を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率 25 倍の実体顕微鏡で調べた。観察した砂礫構成をもとに砂礫の採取地について推定した。

砂礫の特徴

識別された砂礫種は、花崗岩・流紋岩・砂岩・泥岩・チャート・石英・長石・黒雲母・角閃石である。砂礫の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大 8㎜である。石英と長石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色、灰色、暗灰色、黒色、褐色、赤褐色、茶褐色、赤茶色、茶色と様々で、粒形が角、亜角、亜円、円、粒径が最大 12㎜である。石基はガラス質である。石英の斑晶があるものや溶結がみられるものがある。

砂岩：色は灰色、褐色、黄灰色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大 8㎜である。細粒砂からなり、丹波層群に分布するような古期層の硬い砂岩である。

泥岩：色は灰色、暗灰色、黒色で、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大 8㎜である。古期層の泥岩である。

チャート：色は暗灰色、灰色、茶褐色、粒形が角、亜角、粒径が最大 5㎜である。

石英：無色透明、灰色透明で、粒形が角、粒径が最大 2㎜である。複六角錐あるいはその一部がみられるものがある。

長石：灰色、黄灰色、淡桃色で、粒形が角、亜角、粒径が最大 2㎜である。

黒雲母：黒色、金色で、板状をなし、粒径が最大 2㎜である。

角閃石：黒色、粒形が角、亜角、粒径が最大 0.2㎜である。短柱状、粒状をなす。

砂礫構成と砂礫の採取推定地

観察した砂礫を砂礫の構成をもとに類型に区分し、砂礫の採取地を推定する。砂礫構成は、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする 1 類型と流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする 4 類型である。更に、少量含まれる砂礫をもとに細区分すれば、1 類型は 1 b 類型、1 bd 類型、1 bdg 類型、4 類型は 4 a 類型、4 ab 類型、4 ag 類型、4 agn 類型、4 d 類型、4 g 類型、4 gn 類型、4 n 類型となる。砂礫の採取推定地については、土製品出土地に一番近い地で同じような砂礫構成を示す地層が分布する付近とする。また、地域の区分として、安威川以東の摂津を東部、千里丘陵から武庫川の範囲を中部、西宮市以西を摂津西部とする。

1 b 類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は花崗岩や花崗閃緑岩が分布する地域の砂礫と推定され、西宮市付近が推定される。

1 bd 類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は花崗岩や花崗閃緑岩が分布する地域の砂礫と推定され、西宮市付近が推定される。

1bdg 類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は花崗岩や花崗閃緑岩が分布する地域で、古期層の砂岩や泥岩の砂礫も含まれる安威川付近が推定される。

4a 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布し、花崗岩も分布するような宝塚市付近が推定される。

4ab 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布し、花崗岩も分布するような宝塚市付近が推定される。

4ag 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩やチャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布し、花崗岩も分布するような宝塚市付近が推定される。

4agn 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、チャートや他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布し、花崗岩も分布するような宝塚市付近が推定される。

4d 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布するような地が推定される。近距離地では宝塚市の武庫川左岸付近が推定される。

4g 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、泥岩やチャートや砂岩の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布するような地が推定される。近距離地では宝塚市の武庫川左岸付近が推定される。

4gn 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩や他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫相を示す砂礫は泉北丘陵に分布する大阪層群の粘土層中の砂礫の一部に似ている。丘陵北部の日置荘付近の砂礫とは異なる。

4n 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

このような砂礫は流紋岩が広く分布するような地が推定される。近距離地では宝塚市の武庫川左岸付近が推定される。

おわりに

埴輪の配列と埴輪に含まれる砂礫との関係をみれば、酷似・類似する砂礫構成の埴輪が２本～４本ずつ並んでいる場合がみられる。墳丘上段では１Ｃ・１Ｄ・１Ｅ、下段では２Ｄ・２Ｅ、造り出しの南側ではＩ・Ｊ、北側ではＦ・Ｇの埴輪が流紋岩のみの砂礫で、流紋岩と花崗岩を含む砂礫からなる埴輪は墳丘上段の１Ａ・１Ｂ、造り出しの北側ではＫ・Ｌ・Ｍ・Ｎ、流紋岩と角閃石を含む埴輪は造り出し北側のＣ・Ｄ・Ｅである。このような現象は同じ粘土を使用して作られた埴輪が並べられているように考えられる。

古市付近の埴輪に形態的に似ていることから、古市付近で製作された埴輪ではないかと言われていたが、埴輪に含まれる砂礫構成は古市や土師里付近の砂礫構成とは全く異なり、流紋岩質岩が分布する地域で製作された埴輪と花崗岩質岩が分布する地域の埴輪である。千里丘陵から武庫川にかけての付近の河川の砂礫や丘陵地の粘土層に含まれる砂礫を検討すれば、より詳細な埴輪の製作地が推定されるだろう。

（奥田尚）

表１　御願塚古墳出土土製品の表面にみられる砂礫

資料番号	器	種	石						種										質										物						胎土分析の対象資料
			絹雲岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		黒雲母		角閃石		輝石								
			測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍	測視	30倍							
A	円筒埴輪						L-微 横内	M-微 内											M-中L-微 E-微		M-微														4d 粗密 酒井中部
B	円筒埴輪		M-微 内				L-微 横内		L-微 横内		L-微 横内								M-微								S-微								1bdg 粗密 酒井東部
C	円筒埴輪						L-微 横内	L-中 横内											M-微		L-微 E-中		M-微		M-中		S-微								4a 粗密 酒井中部
D	円筒埴輪						L-微 横行	M-中 横内													M-中 E-微		M-微		M-微		S-微								4a 粗密 酒井中部
E	円筒埴輪						L-中 横内	M-微 横内											M-微				M-微				S-微								4a 粗密 酒井中部
F	円筒埴輪						L-微 横行	M-中 横行											M-微		M-中 E-微				M-中										4d 粗密 酒井中部
G	円筒埴輪						L-微 横内	L-微 横内											M-微		M-中				L-中										4d 粗密 酒井中部
H	円筒埴輪						L-中 横内	M-微 横内			L-微 横内								M-微		M-中		M-微		M-微										4g 粗密 酒井中部
I	円筒埴輪						L-多 横内	M-微 横内											M-微		M-多 E-微		M-微		S-多										4d 粗密 酒井中部
J	円筒埴輪						L-微 横内	M-微 横内											M-微		M-微 E-微		M-微		S-微										4d 粗密 酒井中部
K	円筒埴輪		M-微 内					M-微 横行					L-微 内	M-微 横内					L-微		S-多 E-微		M-微		S-中		S-微								4dgm 粗密 酒井中部
L	円筒埴輪		M-微 内				L-微 横行	L-微 横内			L-微 内	S-微 内	L-微 内						M-微		M-多		L-多		M-微										4ag 粗密 酒井中部
M	円筒埴輪		L-微 内				L-微 内	L-多 横内											L-中		M-多		L-中		S-微										4a 粗密 酒井中部
N	円筒埴輪						L-中 横内	L-中 横内			L-微 横内								M-中		L-微 E-微				M-微										4ag 粗密 酒井中部
O	円筒埴輪		L-微 内		M-微 内																S-微		L-微		M-多 E-微		S-微 横		S-微						1b 粗密 酒井西部
71	円筒埴輪						L-微 内	L-中 横内											M-微		M-中L-微 E-微		M-微												4d 粗密 酒井中部
I－A	円筒埴輪		L-微 内					M-微 内						L-微 内					M-微		M-多L-中 E-中		M-微												4ag 粗密 酒井中部
I－B	円筒埴輪		M-微 内				L-多 横内	L-微 横内											L-微		M-中 E-微		L-微		M-微										4a 粗密 酒井中部
I－C	円筒埴輪						L-微 横内	M-微 横内											M-微		M-多L-微 E-微		M-微												4d 粗密 酒井中部
I－D	円筒埴輪						L-微 横内	L-微 横内											M-微		M-多 E-微		M-微												4d 粗密 酒井中部
I－E	円筒埴輪						L-微 横内	L-微 横内											M-微		M-中 E-微		M-微		M-微		L-微 横								4d 粗密 酒井中部
I－F	円筒埴輪						L-微 横内	M-微 横内											M-微		M-多 E-微		M-微		M-微				S-微						4a 粗密 酒井中部
2－A	朝顔形埴輪						L-微 横内	L-微 横内						L-微 横内					L-微 E-微		M-微		M-微												4g 粗密 酒井中部
2－B	円筒埴輪						L-中 横内	L-微 横内				L-微 横行							M-微		M-中		M-微		S-中										4g 粗密 酒井中部
2－C	円筒埴輪						L-微 横内	L-中 横内			M-微 横内								M-微		M-中L-中 E-微		M-微												4g 粗密 酒井中部
2－D	円筒埴輪						L-微 横内	M-微 横内											M-微		M-中 E-微		M-中		M-中 E-微										4d 粗密 酒井中部
2－E	円筒埴輪						M-微 横内	L-微 横内											M-微		M-中 E-微		M-微		S-中										4d 粗密 酒井中部
第24図19	円筒埴輪		L-微 内				L-中 横内	L-微 横内													M-中		M-微		M-多				S-微						4ab 粗密 酒井中部
第24図20	円筒埴輪						L-中 横内	L-微 横内											M-微		M-中		M-微		S-多										4d 粗密 酒井中部
第24図26	円筒埴輪						L-中 横内	L-多 横内				L-微 横行									M-中		L-微		M-微										4g 粗密 酒井中部
第20図51	円筒埴輪						L-微 横内	L-微 横内											M-微		M-中 E-微		M-微		M-微										4d 粗密 酒井中部
第25図4	円筒埴輪						L-微 横内	L-中 横内											L-微		M-中 E-中		M-微		L-中										4d 粗密 酒井中部
第25図3	円筒埴輪						L-中 横内	L-中 横内											M-微 E-微		M-中		L-微		L-多										4d 粗密 酒井中部
第25図6	円筒埴輪		L-微 内	L-微 内															M-微		M-中		L-微		L-多				S-微						1b 粗密 酒井西部
第26図17	円筒埴輪		L-微 内				L-微 横内												L-微		M-中 E-微		M-微						S-微						1bd 粗密 酒井西部
第20図44	円筒埴輪							M-中 内											M-微		S-微 E-微		M-微		S-多										4d 粗密 酒井中部
実171	形象埴輪																				S-中				S-多		S-微 横		S-微						1b 粗密？ 酒井西部？
第21図52	十剣形 小形丸底						L-微 内	M-中 内											L-微		M-中 E-微				M-中										4d 粗密 酒井中部
第37図1	鼓形器							L-微 内													M-中 E-微		M-微		M-多				S-微						4a 粗密 酒井中部
第21図60	鼓形器 高坏										M-微 横内		M-微 横内						L-微		M-微 E-多								S-微						4gn 粗密 御殿山系
実41	鼓形器 坏身						L-微 内	L-微 内			L-微 横内										M-中 E-多								S-微						4gn 粗密 御殿山系
実45	鼓形器							S-多 内													S-中 E-微				S-中										4d 粗密 酒井中部

測視＝測視観察　測視による観察：　L＝粒径が2mm以上　M＝粒径が2mm未満0.5mm以上　S＝粒径が0.5mm未満　赤＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　微＝量が微少　横＝量がごく微少　内＝量がごくごく微少　30倍＝実体顕微鏡の倍率が30倍　実体顕微鏡による観察：　L＝粒径が1mm以上　M＝粒径が1mm未満0.3mm以上　S＝粒径が0.3mm未満　－＝以下の粒径がある　E＝自形　酒井＝酒井氏分は奥山ほか（1992）『江内式土器研究』2を参照。

＊実41・45・171は図版未掲載

Ⅱ．御願塚古墳に関する史料（古文書）から

古文書の概要

御願塚の本田喜應氏宅に御願塚古墳に関する書類綴りが伝わっている。各書類は明治期に試みられた発掘の状況、墳頂に鎮座する南之神社の祭神に関する教部省・内務省とのやりとり、古墳にまつわる伝承等、興味深い内容を含んでいる。そのうち発掘状況については高井悌三郎「御願塚古墳」（『伊丹市史』第４巻）にも一部引用されている。

形態は、おおむね前半部はＢ４版（その多くは罫紙）、後半部はＡ４版の用紙を用いて筆書きし、袋綴じ（挿図は折り込み）にしてコヨリで綴じた文書 20 点（中に挿図８点）を、最終的にコヨリで綴じて一括している。中には書きこみ・訂正があって明らかに下書きと思われるもの、また、以前に書かれた文書を翻案・転記している文書もあり、内容的に重複する部分も多い。

翻刻の方法

今回、発掘調査報告書の刊行にあわせ、前記重複部分を除いて編冊の順に翻刻することとした。史料の性格上、縦組みとするので、次ページ以後に掲載する。なお、見開きページでは右ページ→左ページの順にレイアウトした。

翻刻は、旧字体の使用を避けて当用漢字を主体とし、句読点を適宜補った。原文で抹消されているものは⊟で、虫損・湿損等により判読不能の文字は□（字数が不明の場合は［　　］、または□）で示し、前後から文字が推定できる場合は右側に（　）または（　ヵ）で記した。また誤字・脱字が明らかな場合も、同様に（　）を付して訂正した。（ママ）は誤記であるが、原文のまま記したことを示す。

史料の内容

翻刻した範囲で史料に記された事実および伝承のうち、今回の報告に関するものを抽出して以下に記し、あわせて年表（108 頁）を作成した。なお、とくに注記のないものは史料 10 による。

①塚地築造の伝承　史料 13 によれば、『摂陽群談』塚の部を引用し、天平勝宝年中（749 ～ 57）聖武天皇の勅願により行基が四十九院を開いて熊野権現を勧請したとき、天皇が行幸して 49 ヵ所の中央であることからこの塚を築かせ、御願塚と命名したと記す。なお、亀形の丘であることから亀甲山車塚とも称するという。

②「御願塚」の称　御願塚に加え掛塚・抜目塚・破レ塚・三ツ塚の４塚があることから「五ヶ塚」と称したが、昆陽寺を開基した行基が弘法のためこの塚に祈願した由縁から、後に御願塚村に改めたという。①に記した説とは異なるが、地名のいわれとしては現在はこちらの説がよく用いられる。なお、４塚の名には種々の字が当てられるが、『伊丹の文化財』では掛塚・温塚・破塚・満塚としている。

③「孝謙天皇」「孝徳天皇」の称　棟札から延宝９年（1681）９月に上葺（雨覆・覆い屋）を建立したことが明らかだが、それが初めてのことかどうかは不明で、このうちに記られた社殿（本殿であろう）の創造年代も不詳という。また、享保４年（1719）２月 29 日付の修復時の棟札には「孝謙天皇社」とあり、また、古老の口碑でも古来より孝謙天皇御陵として奉仕してきたという。ところが文政５年（1822）雨覆普請願いを大阪町奉行所に提出した際、神職が不在であることから孝謙天皇ではなく孝徳天皇であると指導を受け、以来孝徳天皇御陵墓と称することになった。しかし、

奉行所側に確固とした根拠があったのかどうかは知らないという。

石田茂輔「大阪磯長陵」（吉川弘文館『国史大辞典』）によれば、孝徳天皇陵はすでに「元禄の山陵探索の際、（中略）現陵に決められた」とある（⑥参照）。こうした不明確さが、維新後の明治８年（1875）の発掘調査につながっていくことになる。

④土器の出土　50～60年前（1820年前後）に樹木（史料19では霧島・五月）を植えるため東北側の塚腹を掘削したとき、口径７～８寸（25cm前後）の壷が１個出土した。ある人の説に「御陵墓の周囲には必ず12個の壷があり、12人の侍女が頭髪を切って壷に納めて埋める例がある」といい、この壷はその12個の一つで、御陵墓である証拠であるという。

⑤明治８年の発掘　明治８年９月ごろ、兵庫県社寺係官吏のカミ谷氏が巡回の際、この山陵について質問があり、本村には確たる書類がないと答えたところ、「普通の神社ではないので、掘穿して結果を見るがよい」といわれた。村民は「この山陵を鋤・鍬で掘穿すれば、即座に体に障りがあるとの言い伝え」により辞退したが、カミ谷氏から「そのようなことは決してない。現場に出動するので掘穿せよ」指示され、掘穿に着手した。その結果、６尺（約２ｍ）余り下から濃栗色で油分を含んで日光を反射しそうな漆喰を山高の形に平坦に敷き、その下に野面石で亀甲の形に組み立てた石垣があった。その上面は同一で、周囲に厚さ７～８寸（25cm前後）の漆喰が幅５尺（約1.65m）ほど敷かれていた。官吏（カミ谷氏）は以上の状況を実見の上、現場をそのままにして概ねの形状を伺い出るよう命じた。そこで絵図面を添え、兵庫県令神田孝平あて同年10月25日付で現地見分取調べを願う伺書を提出した。なお、史料11に添付された図Ｄによると、このとき発掘されたのは南之神社本殿の床下であり、上屋をいったん取り除いて行われたものと思われる。

⑥否定された天皇陵　史料11によれば、県は⑤の伺書を受けて取り調べの上、村から提出された書面・絵図を添えて教部大輔宍戸璣あて11月27日付で「陵所の儀に付き上申」した。これに対する国の答は、早くも同年12月７日付で返され、「御願塚村孝徳天皇神社と伝える社内の古塚は今までどおり埋め置くこと。孝徳・孝謙両天皇の山陵は確定済み」とのことであった。孝徳天皇陵は大阪磯長陵（大阪府南河内郡太子町）、孝謙天皇陵は高野陵（奈良市山陵町）にそれぞれ決められている。

⑦再発掘願い（明治32年）　村民は⑥により御陵墓であることを否定されても、なお「高位貴官の御墳墓」であると信じていた。そして、このまま放置することは不敬であり、将来のためにも事実を明らかにする必要があるとして、もう１回掘穿することを申請した（明治32年９月14日付。宛先不明。史料９）。同日付で川辺郡長佐藤忠夫宛にも実地見分を上申している（史料４）。これに先立つ同年３月27日付で内務大臣西郷従道に宛てた「御陵墓故跡取調書」（史料19）でも、史料10に記された経緯を再掲の上、「両天皇陵は確定している旨を達せられ、実に遺憾であったこと。有馬王子が有馬温泉へ行く途中、当村で亡くなったという言い伝えがあること」を記し、一度発掘して実証を確認することが本村の年来の希望であると述べている。

⑧円筒埴輪の発掘　御願塚古墳の墳丘部１反２畝25歩（実測面積１反３畝７歩＝約1310㎡）は国有林法第８条第３号により大正２年(1913)７月14日付で払い下げを受けた。これを受けてか、翌３年３月中旬、墳丘に桧・杉苗木2000本余りを植え込んだが、その際、地中より円筒埴輪に似た種々の土器破片が出土した（史料19）。

⑨丘陵発掘願　おそらくは⑧の埴輪出土に刺激され、村民一同は一致協力して、大正４年３月付で発掘願いを兵庫県知事服部一三宛提出した。添付された「発掘理由書」には⑦で上げられた理由

のほか、「土中から掘り出された古器・埋却物を我が国歴史上の故実調査の資料に供し、微力ながら国家に貢献したい」という意図が示されている。

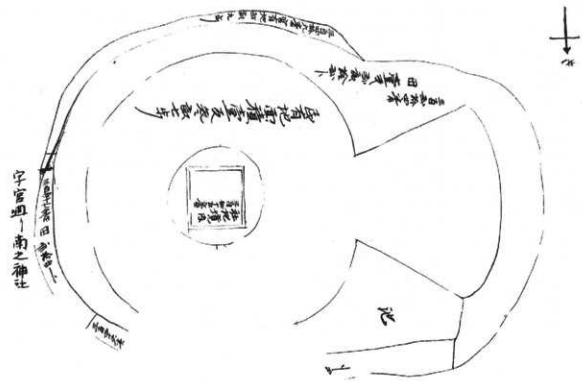
これと関係があるのかどうかは不明だが、同6年4月ごろ、内務省大臣官房地理課の職員が史蹟調査のため出張してきた。その際、地元御願塚の本田熊次郎区長がおそらくは⑦の「御陵墓故跡取調書」（史料19）を持参して現地説明を行った。稲野村役場の福井書記がその書類を借用して謄写本を地理課へ発送した後、返却している（史料11添付の図Dおよび史料12）。

おわりに

以上、史料の内容を概説したが、とくに興味深いのは明治8年の発掘が地元の発意によるのではなく、「兵庫県社寺係官吏カミ谷氏」の強い指導によって行われた経緯が明らかとなったことである。カミ谷氏は自ら現場に出勤して発掘を監督し、その結果から「大いに御陵墓の感を起さし」て県令に報告し、その報は教部大輔まで上申されたが、地元で伝承されていた「孝徳・孝謙両天皇の山陵」は確定済みとのことで却下されてしまった。大正4年の再度の調査願いについての回答書は綴られていないが、おそらくは再度却下の憂き目に終わったことと思われる。

今後、周辺の古墳とあわせてさらに調査が進展することを期待したい。

（和島恭仁雄）



図B　南之神社敷地図

御願塚古墳関連年表　本田家文書より

年　月　日	西　暦	表題　または　内容	差出人→宛て名	資　料　名
延宝9年9月	1681	亀甲山車塚に上葺1宇建立		資料3・10・13・14・18
延宝	1673～81	塚中腹北手の黄金の松枯れ死		資料18・19
享保4年2月29日	1719	孝謙天皇社頭1宇修覆		資料3・10・14・18
寛保	1741～44	大阪奉行所への書類に「孝謙天皇神社」※「享保」の誤りか		資料10
文政5年2月28日	1822	孝徳天皇南面修覆。この時、大阪町奉行所の指導により孝謙天皇から改称		資料3・10・13・14・18
	1839～49	この頃、東北の塚腹より口径7～8寸の壺出土		資料3・10・18・19
明治8年9月	1875	兵庫県社寺係カミ谷氏見分巡廻の際、試掘を指示され、6尺余り下より漆喰の上に築いた亀甲形石垣出土		資料3・10・13・18
明治8年10月25日	1875	伺い書（現地見分取り調べ願い）	鞍谷繁右衛門、副戸長北市十郎・村上弥左ヱ門、鏡惣右衛門	資料6・10
明治8年11月27日	1875	陵所の儀に付き上申（孝徳天皇神社取り調べ報告）	兵庫県令神田孝平→教部大輔宍戸璣	資料10・11
明治8年12月8(7)日	1875	孝徳天皇神社内古塚は従前通り埋め置くように。孝徳・孝謙天皇山陵は確定済み		資料11
明治32年3月14日	1899	伺い書（再発掘許可願い）	氏子惣代北市十郎、鏡熊治郎、鏡和三郎、区長本田熊次郎	資料5・9
明治32年3月14日	1899	上申書（実地ご見分願い）	御願塚村区長本田熊次郎→川辺郡長依藤忠夫	資料4・8
明治32年3月27日	1899	御陵墓故跡取調書付、保存法方補助願い	御願塚村区長本田熊次郎、稲野村長前田半兵衛→兵庫県知事大森鍾一	資料3・7・18
大正2年7月14日	1913	国有林法第8條第3号により払い下げ		資料2
大正3年3月中旬	1914	松・杉苗木数千本植え込みの際、円筒埴輪出土		資料2
大正4年3月	1915	丘陵発掘願い	南之神社信徒惣代　鏡熊次郎、本田熊次郎、尾部岩次郎	資料2・14
大正4年5月	1915	御陵墓御調査願い	南之神社信徒惣代　本田熊次郎、鏡熊次郎、尾部	資料2
大正6年	1917	内務省地理課史蹟調査のため出張		図D・資料12
大正6年4月	1917	亀甲山車塚丘陵無格神社由緒調査書	信徒惣代本田熊次郎→内務省	資料13
大正6年4月6日	1917	内務省地理課史蹟調査の際借用の取り調べ書返却	稲野村書記福井□□→本田熊次郎	資料11・12
大正6年7月	1917	無格社南之神社祭神・考証等	本田熊次郎	資料19

【資料1】（罫紙使用、下半欠損）

一　御願成就塚　　河辺郡
　　御□

右御願成就塚御願塚村南ノ□　経リ七拾間余、高サ三間半程、
伝□　勝宝年中　聖武□　勅願ニ依テ行基菩薩□
権現ノ神霊ヲ勅□　天皇于是行幸□　此塚ヲ築シメ御願□
則地名是ニ因ル□　祠在、御願ノ宮ト唱□　不相知ト雖モ
孝徳天皇ヲ奉祭、伝来ノ旧記□　得トモ中昔ノ頃焼失スル口シ
御座候

【資料2】（罫紙使用、下半欠損）

御陵墓調査願□
兵庫県川辺郡稲野村之内御□　廻リ亀甲山東塚ト称シ、維新南之神
社ト称シ奉ル、古来ヨリ無□　皇ト拝奉ル、大正弐年七月拾四日付
□　林法第八條第参号依リ払下ヲ受タリ、□　参年三月中旬検・
杉苗木数千□　地中ヨリ円筒埴輪ニ相□　尚又種々之埴片ラシキ
物□　三月廿五日丘陵発掘願□　伝エル由緒書相添上申仕□
御陵古墳御調査成被□　添御願申上候
川辺郡稲野村ノ内御願□
無格社南之神社信徒惣代　本田熊次□
　　筧熊□
大正四年五月　　尾邨□

【図A】　南之神社見取り図（図Cと略同様につき省略）

【図B】　南之神社敷地図　（107ページに掲載）

【資料3】　御陵墓及有名家墳墓故跡取調書（資料10と同様につき省略）

【資料4】（罫紙使用）

上　申　書

川辺郡稲野村ノ内御願塚村字宮廻リ御座候我氏神々社、村中之人民御
高貴ノ山陵ト段々申立、何分往古以来確タル書類無之候得共、古来ヨ
リ書類・口碑ニ聞伝来リ候、別紙書之通リ有之而已御座候得共、最一
度掘穿之御許可御伺モ有之候間、猶々実地ニ付テハ口碑ニ伝聞候義モ
有之、何分筆ヲ耕ス不能、右様之次第ニ付、実地御見分之上は、往古
聞仕候言種々申上度事有之間、甚タ恐縮ニ御座候得共、何卒一応御見
分被成下度、此段上申候也
明治三拾弐年三月十四日　　川辺郡稲野村ノ内御願塚村区長
　　本田熊次郎㊞
川辺郡長依藤忠夫殿

【資料5】　伺書（資料9と同様につき省略）

【資料6】　伺書（資料10と同様につき省略）

【資料7】（罫紙使用）

保存法方御伺理由

一　我本村氏神素盞男村社、且外ニ大神宮壱社、猶亀井山トモ云ヒ御願

一所在地　川辺郡稲野村ノ内御願塚村字宮廻リ
一建立若クハ発見ノ年月日
延宝九年九月上葺壱宇建立ト記セリ
此時始メテ建テ、其以前ハ果シテ建物ナカリシヤ否ヲ知ルニ由ナシ、且此内ニ記レル一社殿アリ、創造年代詳ラス、思フニ上葺建立ヨリ早キモ、決シテ晩キニアラスト推測セラレタリ
一考証トナルヘキ書類ノ抜書及其書名
棟札ノ写左ニ

別当昆陽寺宝持院
延宝第九天　神主大工　長右エ門
五右エ門
奉建立上葺壱宇諸願成就祈所　善左衛門
西九月吉祥日　大願主　又七郎
年寄宮座中
又
聖主天中天迦陵頻伽声　別当昆陽寺
奉修覆皇謙天皇祈願　宝持院覚心
哀愍衆生故我等今敬礼
其裏ニ　享保四己亥歳　宮座衆等
又　二月廿九日
天下泰平五穀
奉修覆孝徳天皇壱宇村中安全祈所
成就風雨順時
其裏ニ文政五年二月廿八日トアリ

右ハ本社雨覆建立修覆ノ際、張付ケタル棟札ノ写ニシテ今尚保存セリ、又タ本村古老ノ口碑ニ伝フル所ヲ聞ケハ、古来ヨリ孝謙天皇御陵ナリト唱ヘ奉仕セシ処、文政五年雨覆普請願ノ筋、大阪町奉行所エ孝謙天皇御陵上葺上ケタリ、然ルニ社人有之故ト御尋故、無御座段答申セシ処、御取調ノ上、右ハ孝謙天皇ニテハナク孝徳天皇ナルヘシト申聞カサレタリ、依テ其節ヨリ孝徳天皇御陵墓ト称シ来ル事トハナレリ、然レトモ其際確乎拠ルヘキ所アツテ奉行所ヨリ申聞カサレタル言ナルヤ否ニ至テハ村民等ノ知ル所ニアラズ、且塚ノ中服北手ニ黄金ノ松ト唱ヘ廻リ壱丈余リ古松ノ切株アリ、此下ニ黄金ノ鳥ヲ埋却シタリト伝ヘリ、而シテ此松ヲ切リタル年代ヲ知ル者本村ニ無之、又五六拾年前、樹木ヲ植ヘントシテ東北ノ方塚服ヲ堀穿セシニ、口径七八寸斗リノ壺壱個現出ス、其時或人ハ御陵ノ墓ノ周囲ニ必ス拾二個ノ壺アリ、此壺ニハ拾弐ノ侍女頭髪ヲ切リ壺ニ納メテ埋ムノ例アリト聞ケリ、此ヲ以テ考フレハ、此壺ハ彼ノ拾弐個ノ一ツニシテ、其他ニ必ズ拾壱個(脱カ)捨シアルハ疑ヲ容レザル処ニシテ、御陵墓タルノ一証ナリト云シコトアリ、偖テ壺壱個現出ノ際、堀穿人ノ身体動カサルノ障リアリト云フモノアリ、此言ノ果シテ当レルヤ否ヲ知ラズ
一未タ確定セサル処其要略
明治八年九月頃兵庫本県社事係リカミ谷氏官吏宮見分巡廻ノ際、当山陵ノ御尋ニ相成候処、本村ニテハ確タル書類無之ト前陳ノ如ク申述候エハ、カミ谷氏官吏ノ仰セニハ、普通ノ社ニアラズ、依テ今当一応堀穿シ其実験ヲ見ルガ好シト被申候(マヽ)ニ付、我本村民ニシテハ此山陵ニ鍬鍬ヲ以テ堀穿ナドハ、聞伝ニヨリ手ヲ触ル等シテハ即座ニ身

山トモ云フ一社アリ、合セテ三社ナリ、我小部落（三社ノ保存スルノ○ニシテ○村社○一社）而已ヲ以来御守祭来リ、其雨覆修復等其他ニ係ル推持法大井ニ心苦ヲ尽シ候而已ナラズ、就中該伺神社ハ境内外敷地小丘状ニテ截面ニ神祠建立シ、現況ヲ拝シテモ他ノ二社トハ大井ニ異ルコト大差ナリ、付テハ先キニ差出シタル往古以来書類上申書ニ付添ヘ、此雨覆往古修繕タルヤ、年号不詳、御領主安倍豊後守様より金五百疋御寄付ニ相成リ、且岡野孫一郎様より金百疋御寄付ニ相成リ候寄付札発覚仕リ、考ルニ往古ハ御上様より筋（元）干之御補助有之候哉（可）下存、値テ御高貴之由緒ニ御座候ト相察シ候テハ、甚ダ恐多キコトニ有之、猶去レト保護スルニ不敬之至リニ候得共、何分小部落ニシテ完全ナル保存到抵難出来候間、（右様之次第ニ海見込）何卒保存法方御下付請求伺云々

【資料8】 上申書（資料4と同様につき省略）

【資料9】（罫紙使用）

上申書

川辺郡稲野村ノ内御願塚村字宮廻り亀井山ト称シ奉ル社祠、古来ヨリ孝謙天皇御陵ト云ヒ、或ハ孝徳天皇御陵ト申伝候ニ付、今般取調候処、別紙之通ニ有之、其証跡トスル処明確ナラスト雖モ、既ニ享保年間ニ於テ孝謙天皇タルコトヲ明記シ奉ル棟札ニ掲ケ、且明治八年堀穿シタル当時ノ形跡ナリ口碑ニ伝フル所ナリ、又タ該塚状況ナリ参照スルトキハ果シテ御陵タランカノ感ヲ与フルモノ有之候ニ付テハ、両天皇御陵墓無之トモ、必ズ高貴ノ御墳墓ニ有之様被存候、右ハ村民等ニ於テ堅ク御山陵ト信シ、現今ノ姿ニシテ打過タランニハ甚タ不敬ニシテ、且将来世ニ明ナルノ時来ナラサルヲ患ヘ、依テ遺感之至リニ存候間、最一回堀穿ヲ御許可被成下度、此段氏子惣代・区長連署ヲ以テ御伺奉申上候也

明治三拾弐年三月十四日

氏子惣代
北市十郎
筧熊治郎
筧和三郎
区長
本田熊次郎㊞

【資料10】（罫紙使用）

御陵墓及有名家ノ墳墓故跡取調書

名称	所在地名
掛塚	川辺郡稲野村ノ内御願塚村字上掛塚
抜免塚	同郡同村ノ内同村字抜免塚
破レ塚	同郡同村ノ内同村字上池ノ上
三ツ塚	同郡同村ノ内同村字トテラ

以上ノ四塚ハ今尚其形状ヲ存スト雖モ、之カ原因ヲ詳ニセス、口碑ニ拠レハ此四塚ト外ニ御願塚ヲ合セ五ツノ塚アルヲ以、素ト五ケ塚ト称セリ、然ルヲ昆陽寺開基僧行基ナル者、法弘ノ為ノ此塚ニ祈願シタルコトアリ、其縁由ヲ以テ、后チ御願塚村ノ改メタリト云フ、且現時ノ景況ハ田間ニ小丘状ヲナシ、雑草ヲ生ス

一名　称　御願塚

体恐障アル故辞退シ、左様ナル事決シテ無之、此現場出勤スル故、堀穿ノ仰セニテ人民其力ヲエ、最初人足一ヒ・二フ・三ツ之合声ニテ堀穿ニ着手ス、凡六尺余リ下ニ濃栗色之泥分ヲ含ミタル、日光ニ映セハ光ヲ発スベキ様ナル漆喰ヲ山高之形チニ平坦ニ敷キ、其下ニ野面石ヲ以テ亀甲ノ形チノ石垣ヲ組立アリ、其頂面同一ニシテ周囲ニ厚サ七八寸斗リノ漆喰、巾五尺程敷流アル現場ヲ官吏実見ノ上、此侭ニシテ該形状ヲ伺出ベク様被申付、其伺書ハ左ニ

伺書

第拾区川辺郡

御願塚村

当村神社之内現今孝徳天皇ト相唱居候神社ノ境内、往古孝謙天皇ノ御陵ト申伝ヘ居候ニ付、文政年中ニ右雨覆修覆大阪町奉行所ヱ孝謙天皇神社ト書上候処、孝謙天皇ナラバ社人可有之哉ト御尋有之、右御守人無御座候段奉申上候得バ、社人無之ニ付テハ孝謙天皇ニテハ無之、孝徳天皇(ママ)ト唱替居、然ル処、御一新後度々神社御調之節、村方ニ於テ確書等モ御座ナク候ニ付、孝徳天皇ト奉申上来リ候ヱ共、当節ニ至リ御上様ニモ孝謙天皇御陵無御座候由相承リ、就テハ村中者共往古ヨリ聞伝ノ廉モ有之、然ルニ万一山陵ニ御座候処、我々猥リリニ登リテハ恐入義、右ニ付村中書類段々取調候処、寛保年中ニ大阪奉行所ヘ孝謙天皇神社ト書上候控書、当節見当リ候ニ付、当否明瞭ニ仕度故、右古墳中央堀穿候処、別紙絵図面之通リ石垣積立、石炭ニ詰込メ有之候間、此上ハ現地御見分之上実際御取調被成下度、尤モ本文之義、孝徳天皇御陵ニ無御座候ト申、御歴代之御陵墓ニ相違間敷ト奉存候間、更ニ皆境内御取調被成下度、即チ絵図面相添、此段奉願候也

右村神主　鞍谷繁右ヱ門

副戸長　北　市　十　郎

戸長　筧　惣右ヱ門

明治八年十月廿五日

兵庫県令神田孝平殿

十二号十月卅一日

甲第千百三拾五号

陵所之儀ニ付上申

当県下第拾区川辺郡御願塚村孝徳天皇神社境内堀穿、下タニ石垣組立有之旨等別紙之通リ申出候ニ付実際取調候処、記録等ハ無之、塚形周囲七拾間程、樹木林立有之、今般六尺程堀穿候処、石垣有之候義ト書面之通リ相違無之候ニ付、右村方ヨリ差出候書面・絵図共相添ヘ、此段上申候也

兵庫県令神田孝平

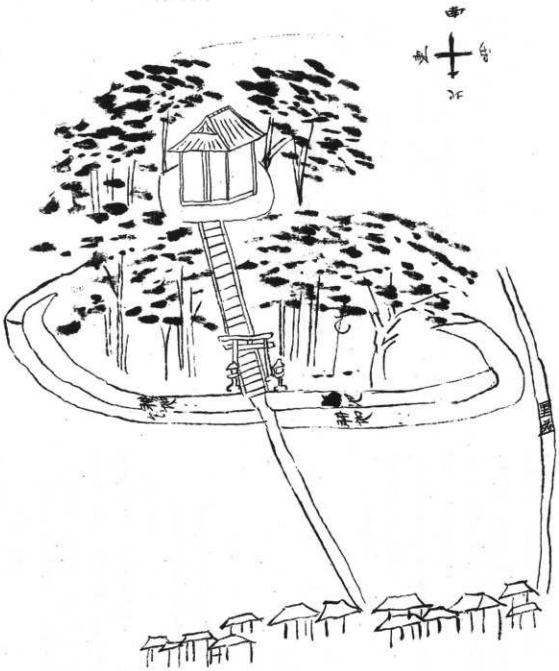
明治八年十一月廿七日

教部大輔宍戸璣殿

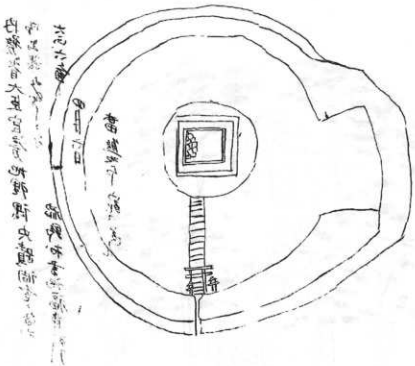
書面御願塚村孝徳天皇神社ト申伝候社内古塚之義ハ従前之通リ堀置可申、尤モ孝徳・孝謙両天皇山陵之儀ハ、別紙ノ通リ確定相成居候事

明治八年十二月七日

孝徳天皇　河内国石川郡



図C　古墳見取り図



図D　堀穿状況見取り図

【資料14】（罫紙使用）

丘陵発堀願

兵庫県摂津国川辺郡稲野村ノ内御願塚村字宮廻リ無格社南之神社亀甲山（天長）東塚丘陵、村民一同一致協力以テ発堀ヲ試之度（ミヘマヽ）度希望ニ付、何卒御許可成（上長）シ被度（下長）、別紙丘陵古伝来口碑由緒取調書及発堀理由書相添エ伺出氏子惣代連署ヲ以テ右願出候也

大正四年参月

兵庫県摂津国川辺郡稲野村ノ内御願塚村

無格社南之神社氏子惣（伺俗）代

篤　熊次郎㊞

本田熊次郎㊞㊞

尾部岩次郎㊞

兵庫県知事　服部一三殿

発掘理由書

仮令歴代之天皇御陵墓ニ無之クトモ、必ズ往古之高位貴官之御墳墓タルヤ言ヲ待タズ、斯ル尊キ神社ヲ現時之状態ニ放棄シ置クハ、敬神上如何ニモ不敬窮り人倫ニ悖ル所ナレバ、再度発掘ヲ試ミ、御陵墓タルヤハタ又御墳墓タルヤ其之事実・真相ヲ検査シ、且発掘ニ依リ土中ヨリ掘出セシ古器却ゝ埋物以テ我ガ国歴史上故実調査之資料ニ供シ、聊カ以テ国家ニ貢献セン所存ニ過ギズ

大阪磯長陵　　山田郷
孝謙天皇　　大和国添上郡
高野陵　　山上郷

【資料11】（罫紙使用）
十二号十月卅一日
甲第千百三拾五号
陵所之儀ニ付上申
当県下第拾区川辺郡御願塚村孝徳天皇神社境内堀穿、下タニ石垣組立有之旨等別紙之通り申出候ニ付実際取調候処、記録等ハ無之、塚形周囲七拾間程、樹木林立有之、今般六尺程堀穿候処、石垣有之候義ト書面之通相違無之候ニ付、右村方ヨリ差出候書面・絵図共相添へ、此段上申候也
明治八年十一月廿七日　　兵庫県令神田孝平
教部大輔宍戸璣殿

書面御願塚村孝徳天皇神社ト申伝候社内古塚之義ハ従前之通リ埋置可申、尤モ孝徳・孝謙両天皇山陵之儀ハ、別紙ノ通り確定相成居候事
明治八年十二月七日
孝徳天皇　　河内国石川郡
大阪磯長陵　　山田郷
孝謙天皇　　大和国添上郡
高野陵　　山上郷

【図C】（古墳見取り図）

【図D】（墨書状況見取り図）
（図D裏書）
「内務省大技官房地理課史蹟調査ノたメ御出張相成候ニ付
稲野村巡記福井ヨリ
大正六年四月六日
本田熊次郎宛ニ送ル」

【資料12】（兵庫県川辺郡稲野村役場）罫紙使用）
拝啓
先達テ内務省より史蹟調査ノたメ御出張相成候節、御足労ニ相成、奉拝謝候、其節拝借致候別紙取調書、謄写ノ上内務省大臣官房地理課へ発送致候ニ付、御了承被下度、別紙御返付致候間、御落手被下度、右得貴意候、拝□
四月六日　　福井□□印
本田熊次郎　殿

（欄外）
「大正六年」

【資料13】
亀甲山車塚丘陵
無格神社由緒調査書（資料18と同様につき省略）

奉修覆孝徳天皇雨覆一宇村中安全祈所
成就風雨順時
其裏
文政五年二月廿八日

以上、本社雨覆建立修覆ノ際、張付タル棟札ノ写ニシテ、今猶保存セリ、又タ本村古老ノ口碑ニ伝ル所ヲ聞ケハ、古来ヨリ孝謙天皇御陵ナリト唱奉仕シ処、（衆）文政五年覆普請ノ節、大阪町奉行所エ孝謙天皇御陵ト書上タリ、然ルニ社人有之哉ト御尋故、無座無ト答申セシ処、御取調ノ上、右ハ孝謙天皇ニテハナク孝徳天皇ナルベシト申聞サレタリ、依テ其節ヨリ孝徳天皇御陵墓ト称シ奉ル事トハナレリ、然レトモ其際確乎拠ルヘキ所アツテ奉行所ヨリ申聞カサレタル言ナルヤ否ニ至テハ村民等ノ知ル所ニアラズ、且墓ノ中服北手ニ黄金ノ松ト唱ヘ廻リ壱丈余リ古松ノ切株アリ、此下タニ黄金ノ鳥ヲ埋却シタリト伝ヘリ、而シテ此松ヲ切リタル年代ヲ知ラズ、又々社殿ノ東軒下ニ往古ヨリ老大杉樹アリ、延宝年間落雷ノ為メ遂ニ枯死ス、是レ御陵埋没ノ際植付タルト昔ヨリ言ヒ伝フ、猶五六拾年前、樹木ヲ植ヘントシテ東北ノ方塚服ヲ堀穿セシニ、口径七八寸斗リノ壺一個現出ス、其時或人ハ御陵ノ墓ノ周囲ニ必ズ拾弐個ノ壺アリ、此壺ニハ拾弐侍女頭髪ヲ切リ壺ニ納メテ埋ムノ例アリト聞ケリ、此ヲ以テ考フレハ、此壺ハ彼ノ拾弐個ノ一ニシテ、其他必ズ拾壱埋捨シアルハ疑ヲ容レサル処ニシテ、御陵墓タルノ一証ナリト云シコトアリ、且近傍に左之四塚アリ

掛　塚　川辺郡稲野村之内御願塚村字上掛塚　本陵ヨリ去ルコト七拾間
抜メ塚　同　郡　同村之内同村字抜メ塚　本陵ヨリ去ルコト百五拾間
破レ塚　同　郡　同村之内同村字東野代　本陵ヨリ去ルコト百間
三ツ塚　同　郡　同村之内同村字王ツ塚（ドツカ）　本陵ヨリ去ルコト百五拾間

以上四塚ハ今尚其形状ヲ存スト雖モ、之ヲ原因ヲ詳ニセズ、口碑ニ拠レハ此四塚ト外ニ本陵ヲ合セテ五ツノ塚アルヲ以テ、素ト五ケ塚ト称セリ、然ルヲ毘陽寺開基ノ僧行基ナル者、法弘ノ為メ此塚ニ祈願シタル事アリ、其縁由ヲ以テ、后チ御願塚村ト改メタリト云フ、且現時ノ景況ハ田間ニ小丘状ヲナシ雑草ヲ生ズ、明治八年九月本県社寺係員宮見分巡廻ノ際、当山陵ノ御尋ニ相成候処、本村ニテハ確タル書類無之ト前陳ノ如ク申述候エハ、吏員ノ仰セニハ、普通ノ社ニアラズ、依テ一応掘穿シ実見セラルニ当リ、凡ソ六尺余下タニ濃栗色ノ油分ヲ含ミタル、日光ニ映セハ光ヲ発スベキ様ナル漆喰ヲ山高ノ形チニ敷キ、其下ニ野面石ヲ以テ亀甲形チノ石垣ヲ組立アリ、其頂面同一ニシテ周囲ニ厚サ七八寸斗リノ漆喰、巾五尺程敷流アル現況ヲ認メラレ、大ニ御陵墓ノ感ヲ起セラレ、県令ヨリ教部大輔迄上申ニ被及候処、両天皇御陵ハ最早確定後、其旨被達、実ニ遺憾ニ御座候、仄ニ聞ク、昔ノ摂州長柄ニ帝都在ラセラルノ際、有馬王子有馬温泉エ御入浴ノ御道中、当村ニ於テ薨去アラセラレシトモ云フ、兎ニ角高貴ノ御墳墓ト被認候ニ付、一度発鑿ノ上、其実証確認致度事、年来本村ノ希望ニ御座候保存法（ママ）方

当村ニ氏神三社アリ、一ツヲ亀甲山或ハ御願山トモ云フ、是即チ当社ナリ、然ルニ本村ハ小部落ニシテ三社ヲ保存スルモ資力乏シキ為メ、

【資料15】（罫紙使用）

経歴及沿革之概略

延宝年間ニ上葺建立シ、享保四年ニ至リ社頭修覆、文政五年雨覆修覆云々ト棟札ニ記載シ之レアリト雖モ、其時建テ換タルモノヽ如ク見エタリ、現在之建物ハ文政五年之建換ニ係リ、本年迄百有余年之星霜ヲ経タルモノナラン、且塚之周囲ニ幅四間乃至五間余リノ堀アリ、然ルヲ今約八拾年程前ヨリ漸次開墾シ九分迄田ニ変ズ、残リ壱部ハ今尚ホ蓮池トシテ存ズ

現在之景況

塚之周囲凡ソ八拾間、高サ斜面凡ソ七間、服部雑木林立シ鬱蒼タリ、北手ニ石段ヲ設ケテ参拝人ノ便ニ供ス、塚上ニ弐間四方之祠北面ス

其他普通神社之体裁ニ異ナラス

【資料16】 川辺郡訓令第壱号（大祭執行の機様申け出ること。省略）

【資料17】 内務大臣等連名（省略）

【資料18】

御陵墓故跡取調書

名　称　亀甲山（天皇）車塚

所在地　川辺郡稲野村之内御願塚村

広　袤　壱段参畝廿五歩

地種目　官有地第一種

現　況　小丘亀甲形ヲナシ頂上迄九間余、別紙図面ノ如キ樹木鬱茂シ御陵ノ態ヲナス

縁由概略　亀甲山車塚ハ延宝九年九月上葺一宇建立ト記セリ、此時始メテ建テ、其以前ハ果シテ建物ナカリシヤ否ヲ知ルニ由ナシ、且其内ニ祀レル一社殿アリ、創造年代詳ナラズ、思フニ上葺建立ヨリハ昔キモ、決シテ晩キニアラスト推測セラレタリ

考証トナルベキ証類抜書及ビ其書明

棟札写左ニ

別当昆陽寺宝持院

延宝第九天　神主大工　長右ヱ門

五右ヱ門

奉建立（上葺）一宇諸願成就祈所　善左衛門

西九月吉祥日　大願主　又七郎

年寄宮座中

又

聖主天中天迦陵頻伽声　別当昆陽寺

奉修覆皇兼天皇社頭一宇村内繁昌祈所

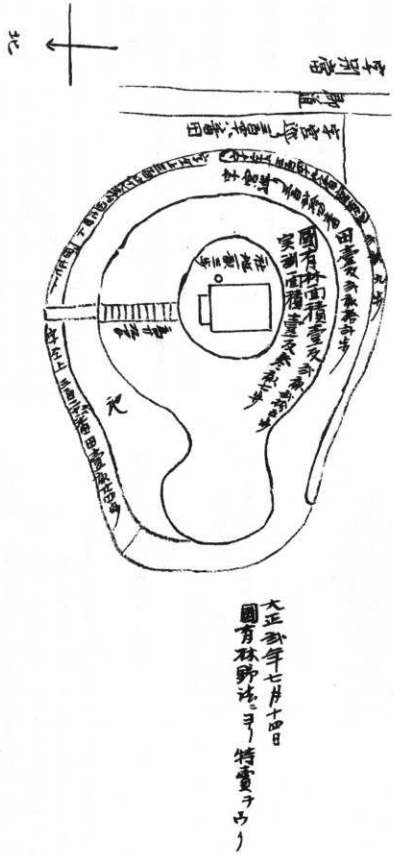
哀愍衆生故我等今敬礼　宝持院覚心

其裏　享保四己亥歳　宮座衆等

二月廿九日

又

天下泰平五穀



図G　南之神社境内周辺図

【資料19】

充分ノ保存法ヲ講スル不能、往古ノ修繕タルヤ、当御領主阿部豊後守様ヨリ金五百疋御寄付ニ相成リ、旗本岡野孫一郎様ヨリ金百疋御寄付ニ相成リ、或ハ協議費ヲ募リ、夫是ノ資金ヲ補修シ来リタルモ、当今ニ至リ大荒廃シ、到底民力ノ不及ル処依リ、金四百円補助ヲ受タルナラバ、年々ノ修補ハ其利子ニテ維持シ得ラルルニ依リ、何卒特別ノ御詮議ヲ以テ御補助被下度、此段奉願候

兵庫県川辺郡稲野村ノ内御願塚村

明治参拾弐年三月廿七日　　区長　本田熊次郎㊞

前書之通相違無之、依テ奥印候也

川辺郡稲野村長

前田半兵衛㊞

明治参拾弐年参月弐拾七日

内務大臣　西郷従道殿

【図E】　南之神社拝殿（省略）

【図F】　南之神社覆屋（省略）

【図G】　南之神社境内周辺図

【図H】　古墳外形図

図H　古墳外形図

川辺郡稲野村之内御願塚字宮廻リ

参百弐拾五番無格社南之神社

一祭神　孝徳天皇

一由緒

一考証　摂陽群談ニ御願成就塚ハ御願塚村南之方壱丁斗リ、周囲七拾間余リ、高サ参間半程地ナリ、天平勝宝年中聖武天皇勅願ニ依テ行基菩薩四拾九院ヲ開テ熊野権現ノ神霊ヲ勧請セリ、此時天皇是ニ行幸、四拾九所ノ中央ヲ以テ此塚ヲ築シメ、御願塚成就塚ト称名アリ、則地名是ニ因ルト申伝、現今ノ上ニ御願宮ト唱、勧請ノ由来年暦相知ト雖モ、孝徳天皇ヲ祭伝来セリ

一口老伝説

御陵祭タル一証ナリト云シコトアリ、近傍ニ左ノ四塚アリ

一字掛ヶ塚　御願塚村字上掛塚　本陵ヨリ七拾間

一字抜メ塚　同　村字抜メ塚　同ヨリ百五拾間

一字破レ塚　同　村字東野代　同ヨリ百　間

一字三ツ塚　同　村字ドテラ　同ヨリ百五拾間

以上四塚ハ今尚其形状ヲ存スト雖モ、之ヲ原因ヲ詳ニセズ、口碑ニ拠レハ此四塚ト外ニ本陵ヲ合セテ五ツノ塚アルヲ以テ素ト五ヶ塚村ト称セリ、本陵中服北手ニ黄金松ト唱ヱ、廻リ壱丈余、古松ノ切株アリ、此下ニ黄金ノ島ヲ埋却シタリト伝ヘリ、而シテ此松を切リタル年代ヲ知ラズ、又社殿ノ東軒下ニ往古ヨリ老大杉樹アリ、延宝年間落雷ノ為メ枯死ス、凡九拾年前霧島五月樹木ヲ植シトキ、東北方塚脱ヲ堀穿セシニ口径七八寸斗リ壷現出ス、其時或人ハ御陵墓ノ囲周ニ必ズ拾弐個ノ壷アリ、此壷ハ拾弐侍女頭髪ヲ切リ壷ニ納メテ埋ム例アリト聞ケリ、而テ此ヲ考フレハ此壷ハ彼ノ拾弐個ノ一ニシテ其他必ズ拾壱個埋捨シアルハ疑ヲ容レサル処ニシテ、御陵墓タルノ一証ナリト云

尚又大正弐年七月拾四日付ヲ以テ国有林法第八條第参号ニ依リ払下ヲ受タリ、大正参年三月中旬、桧・杉木弐千本余植込ノ際、地中ヨリ円筒埴輪ニ相似タル種々ノ土器破片現出セリ

一此ヲ以テ考レハ、御陵墓無之トモ高位高官ノ墳墓タルコト明ニセリ

一社殿瓦葺造　壱棟　此建坪六坪

一境内地　参拾参坪

川辺郡稲野村之内御願塚無格社

南之神社信徒総代

本田熊次郎㊞

大正六年七月

【資料20】（北之神社祭神等。省略）

第４章　総括

前章で述べた第８・９・10次調査の調査成果に若干の考察を合わせ、ここにまとめとしたい。

１．旧地形

当古墳築造前の旧地形については、第８次調査墳丘部（造り出し）調査時に、古墳築造時の旧表土を検出した。上面の標高は9.6 mである。その直下は地山上層（粘土層）となる。地山上面は標高9.4 mを測る。第２～８、10次調査で外濠部の調査時に検出された堤と外濠外側は、後世の削平を受け、地山下層（礫層／標高8.7～8.9 m）での検出となった。

２．墳丘

墳丘は旧表土を残したまま、地山を掘削し、墳丘裾・濠を形成している。墳丘は旧表土から上はすべて盛土で、後円部は２段築成である。第１段テラスは標高10.2 m、テラス幅は約２m以上となる。残存する墳頂は標高15.0 mを測る。もとの墳頂は、神社建築時に削平されたと考えられる。墳頂周囲と第１段テラスには円筒埴輪・朝顔形埴輪が樹立されていたことが確かめられたが、形象埴輪は出土していない。墳丘の斜面は、傾斜角30度を測る。基底石を含め原位置での検出はならなかったが、葺石が施されていたことが確かめられた。但し、墳丘全体に葺かれていたものではないようである。

後円部北西側、第１段テラス下に地山削り出しの造り出しがとりつくが、その前端は失われている。

埴輪列が２方向に現存する。形象埴輪（蓋）・須恵器が出土した。須恵器は出土状況から破砕された可能性がある。

造り出しから一段下がった北側にも、造り出しと後円部をつなぎ、造り出しを載せる格好の平坦面が用意されており、そこでもマツリが行われたと推測できる。

３．周濠

当古墳は、内濠・外濠の二重の濠をもつ。猪名野古墳群内で同様な二重周濠をもつ古墳の報告された例はない。

造り出し正面や前方部に近い堤上では、形象埴輪を樹立させたことが、外濠の調査から推定できる。第８次調査地点（造り出し正面）では蓋・家などの形象埴輪が、第10次調査地点（前方部正面）では外濠理土内より馬・馬子の埴輪がセットで出土している。群馬県保渡田八幡塚古墳例のような形象埴輪樹立区があった可能性が考えられる（群馬町教育委員会2000）。

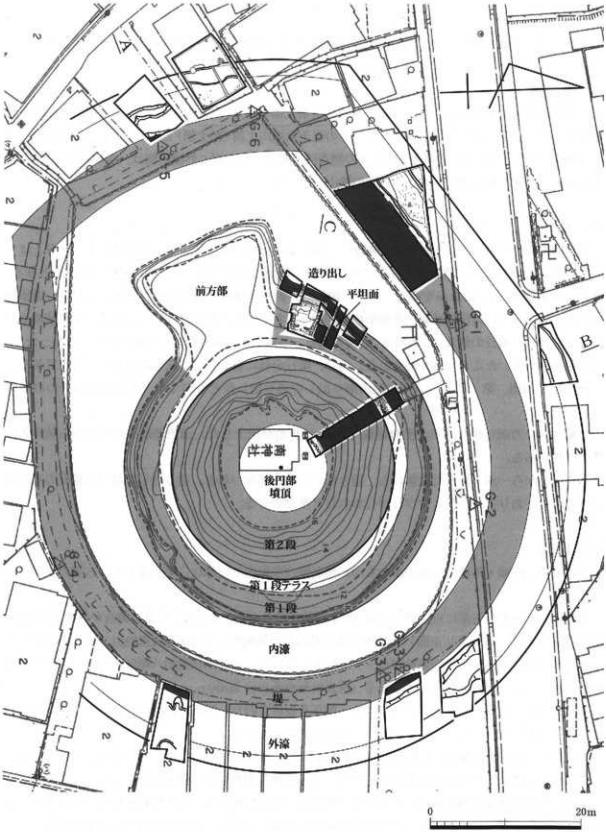
周濠は、内・外濠とも後世に大きく改変・削平を受けており、現状の内濠の底面や外側端は築造当初の姿を残す箇所は極めて少ないことが、発掘調査からわかる。

今回、第10次調査成果にあるように、前方部側の外濠の形状については、従来復元されている直線ではなく、円弧になる可能性が考えられた。今後近隣の調査により確証を得たい。

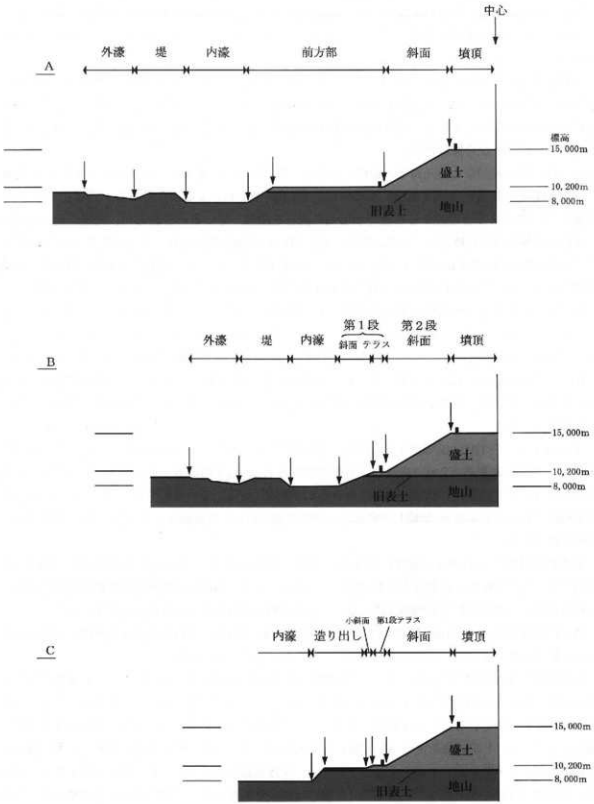
また、当古墳外濠外側法面は、下端から上端まで一度に傾斜せず、平坦な幅広いテラスをもつ。この形状については、加西市マンジュウ古墳の周濠と近似している（加西市教育委員会2007）。

さらには、現在明らかになっていない外濠外周の部分を調査し、外堤の有無を検討することも今後重要な調査課題であろう。

（中畔）



第40図　御願塚古墳平面図復元一案（S＝1/500）



第41図　御願塚古墳断面図復元一案（S＝1/500）

4．埴輪

樹立していた埴輪を中心に、法量・形態・調整などについて観察表をもとにまとめておく。

出土した円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）は底部径が24～33.8cmの中型ないし大型品である。その中では30～31cmの範囲に集中していることがうかがえるものの、24～26cm（平均25cm）のやや小振りのものが約1/4を占めている。

口縁部径は破片資料も含めて31.4～38.5cm（平均34.8cm）の範囲に収まり、平均は35cmである。底部径が25cm前後の小振りの埴輪においては、口縁部径がともに小さいわけではなく、上方へ緩やかに広がる器形を呈している。朝顔の口縁部径は55.7～67.2cmで、細分は可能と考えられるが、資料数が少ないことから保留とする。

高さは完形資料がなく復元高での規格となるが、76cmのもの（埴輪C）と、61.7～67.1cmの範囲のものがある。後者が主流であり、平均すると65cm前後におさまるようである。前述したように、埴輪Cは2段目までを埋設することで埴輪列の高さを調整しているのであるが、同様の埋設状況を示す樹立埴輪を今回は確認していないため、高さ76cmの埴輪は他になかったと考えてよいであろう。

口縁部の形態は直線的に立ち上がる（b・c）が主流となっている。周濠部外濠から外反して上端が肥厚する（a）が出土しており、口縁を加飾する古相の埴輪がわずかに用いられていたと思われる。

突帯形状をみると全埴輪数（破片を含む）での割合は（a）4％、（b）54％、（c）10％、（d）24％、（e）8％を示し、突帯断面台形、あるいはややM字形を呈している、高さ0.8cm前後の（b・c）が主流である。そうした中で、丁寧な1次調整タテハケのみの埴輪の半数に（c）が認められる。

扁平で突出度の低い後出の突帯（d・e）が約1/3を占めており、特に（e）の突帯を持つ埴輪には1条目突帯に押圧技法が認められる。細長く突出する古相の突帯（a）が口縁部と同様にわずかに存在している。

底部高は8.2～13.0cmの範囲に広がるが、そのほとんどが8.5～11cmに集中している。平均は10.2cmである。底部高8.2cmの埴輪Oは突帯間隔約8.4cm、最上段高6.1cmを測り、全てにおいて最小の数値を示している。この埴輪は全形を7条8段構成に復元しているもので、今のところこの形態の埴輪はこれだけであるが、埴輪Lが底部高と突帯間隔において近似値を示しており、同じ構成であった可能性がある。

突帯間隔は8.4～10.9cmの範囲に収まり、平均は9.8cmである。そのほとんどが9.5～10.3cmに集中していることから、底部高よりも収束しているといえる。底部高の範囲内に突帯間隔は含まれていることから、底部高と突帯間隔は同一高（一定の規格）を目指しているものと考えられる。

最上段高は8.5～10.7cmの範囲に収まり、平均は9.9cmである。これも底部高範囲内に収まることから、最上段高も底部高・突帯間隔と一致しつつあることがうかがわれる。

突帯間の外面調整はタテハケによる1次調整のみの埴輪とB種ヨコハケによる2次調整を施す埴輪に大別され、その割合は4：6である。前者に対して、「ヨコハケを行う」一手間をかけている埴輪が過半数を占めていることに注意しておきたい。2次調整にCa種ヨコハケを施す埴輪が1基（1D）検出されている。1次調整をタテハケで終わるものには、タテハケの原体条数が細かく丁寧に施されるもの（H・I・L・N・1A・1B・1F）と、原体条数が粗いもの（E・K・1E・2D）があり、その割合は6：4である。他の属性での違いは認められないが、丁寧にタテハケ調整されているものが多い傾向にある。B種ヨコハケにはBb種・Bc種・Bd種の3種が見られ、その割合は2：5：3である。Bd種が一定量を占めてはいるが、Bc種が過半数を占めており、その充足率が高い。Bc種の静止痕の間隔は相対的に狭い印象を受ける。また、古い要素であるBb種が含まれている。

１段目の外面調整は、１次調整のタテハケのみのもの66.6％、２次調整にＢ種ヨコハケを施すもの16.7％、ナデ上げするもの16.7％である。２次調整を省略するものの比率が高い。１段目は埋められて見えないため、突帯間の調整よりも簡略化が進んでいるようである。

内面調整は、斜め・タテ方向の指ナデ、あるいはハケナデを施すもの73％、タテハケを施すもの19％、ヨコハケを施すもの８％で、ハケ調整を行う比率が低いといえる。ナデ調整を施すものはいずれも突帯貼り付け位置に指オサエ・ナデ調整を行っている。タテハケ・ヨコハケには外面調整のハケ工具を使用している。ヨコハケを施さない埴輪の中で、最上段（口縁部）にのみヨコハケを施すもの（Ｏ・２Ｄ・２Ｅ）が認められる。

焼成は埴輪の外面に黒斑が見られないこと、須恵質に焼き上がっているものがあることから、窖窯焼成によるものと判断される。

以上の諸要素から、御願塚古墳出土の埴輪は川西編年Ⅳ期（川西 1978）の範疇で理解できる。

さらに、外面調整をタテハケ１次調整で終わるものが増加する中で、Ｂ種ヨコハケがまだ優位であること、そしてそのヨコハケではＢc種ヨコハケが目立つ存在でありながらもＢd種ヨコハケが一定量存在する。また、Ｃa種やＢb種ヨコハケを施すものがあること、ばらつきは認められるが底部高・突帯間隔・最上段高で一定の規格が存在すると想定されることなどの特徴から、古市古墳群出土資料を基準とすれば上田編年Ⅳ－３段階（上田 2003）に相当するものと考えておきたい。

埴輪は個々を見ていくとそれぞれが独自の特徴を持っており、まとまり（型式）では捉えられなかった。「補論Ⅰ」にもあるように、埴輪の胎土からは複数の製作地から供給されたことが推測されるが、製作地を越えて形態は規格化されているようで、同一古墳内にはほぼ同一規格の埴輪を集めて、並べている様子が理解できる。

５．須恵器

造り出しで出土した須恵器の器種として杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・器台・甕を確認している。置かれた状態を保っていた資料はない。したがって、個体数を把握することが難しいが、破片の接合状況から器台は２個体、口縁部形状などから判断して甕は８個体であったと考えられる。それ以外の須恵器については、高杯蓋のツマミ、高杯脚部でそれぞれのおよその個体数をつかむことが可能である。それによると高杯蓋７個体、有蓋高杯は15個体、無蓋高杯は口縁部片１点のみの出土であるが、最低でも１個体の存在が推測される。

前述したが、杯・蓋・高杯の口縁部や高杯脚裾部の形状は一様ではなく、かなり多様な様相を呈していることから、ある程度の時期差があるとも考えられる。しかし、全形の分かる資料が少ないため断定できない。今のところ同時期内でのバラエティーであると捉えておきたい。したがって、これらの須恵器をTK23（田辺 1966）併行期のものと考えておく[1]。

（瀬川）

６．まとめ

御願塚古墳は、５世紀後半に築造されたと認識されてきた。今回の調査により、造り出し・後円部第１段テラスに樹立していた円筒埴輪を検討した結果（前述「４．埴輪」参照）、Ⅳ期後半、５世紀第３四半期と考えられる[2]。また、前方部正面堤上に置かれていたと考えられる馬・馬子が合わせて出土したことも、築造時期を考える重要な要素である。

出土した円筒埴輪は、小振りのものが少なく、中型ないし大型のものが全体の３/４を占める。当古墳が50ｍほどしかない帆立貝式古墳にもかかわらず、供給された埴輪の立派さが目を引く。埴輪

の特徴は市野山古墳を含む古市古墳群の埴輪と似通っているが、生産地は異にする可能性がある（「補論Ⅰ」参照）。

造り出しに樹立していた円筒埴輪の中に、据えた時の高さを揃えるために底部を割って短くしたと考えられるものがあったことから、当古墳に使用された円筒埴輪が、1地点の窯で統一した規格によって作られた製品でなく、数地点の窯から集められた埴輪が使用されたとする調査時からの推察は、様々な供給元をあげた「補論Ⅰ」に合致する。

造り出しは、墳丘と同様、旧表土・地山を削り出しその上に盛土して築造されており、マツリの場が当初から計画され用意されたものであることはまちがいない。なお、今回、造り出し上から出土した須恵器は、TK23併行期のものが占める（前述「5．須恵器」参照）。埴輪から市野山古墳築造期としたが、市野山古墳の築造時の須恵器はTK208併行と想定されており、御願塚古墳出土の須恵器は埴輪の時期と微妙に合致しない。古墳の築造と埋葬（マツリ）に時間差があるものと考えたい。さらには追葬や継続祭祀の可能性もあろう。

今回の3次の調査から、当古墳について非常に多くの情報を得たが、主体部・前方部・外濠の外側が未調査であることから、多くの課題も残った。埴輪の供給元は古市古墳群のそれとは異なるようであるが、埴輪は地域（地方）色をもつものでなく、むしろ中央色を帯びた特徴をもつことから、中央王権と深い関係にあったことが窺える。しかし、被葬者論を含めてこれ以上に踏み込むには材料が少ない。当古墳の周濠が、二重・内堤をもつという、一地方にある帆立貝式古墳にしては特異な特徴をもつ点についてもこれからの検討が必要である[3]。

この報告書を通じて、当古墳を含めた猪名野古墳群の重要性が再認識され、広く研究の対象とされることを期待したい。（中畔）

註

（1）埴輪・須恵器については高橋克壽氏、埴輪検討会の方々に実見していただいた。埴輪に関しては、市野山古墳（伝允恭陵）出土埴輪と類似しているとのご指摘をいただいた。

（2）この築造年代観は、あくまでも埴輪のみをもとにしている。主体部の副葬品などを含めての総体的な検討については、今後の調査を待たなければならない

（3）この報告書作成中、ほぼ同時期の帆立貝式古墳である金津山古墳の周濠（馬蹄形）が二重であることが判明した（平成20年1月18日芦屋市教育委員会記者発表）。

参考文献

浅岡俊夫 「信長に消された猪名野の前期古墳ー上臈塚古墳ー」『実証の地域史』 大阪経済法科大学　2001
尼崎市役所 『尼崎市史』第１巻　1966
尼崎市役所 『尼崎市史』第 11 巻　1980
尼崎市教育委員会 「尼崎市中ノ田遺跡２」『尼崎市文化財調査報告書』第 18 集　1987
尼崎市教育委員会 「平成８年度国庫補助事業　尼崎市内遺跡　復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書」『尼崎市文化財調査報告書』第 27 集　1999
尼崎市教育委員会 「平成 10 年度国庫補助事業　尼崎市内遺跡　復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書」『尼崎市文化財調査報告書』第 30 集　2002
尼崎市教育委員会 「平成 11 年度国庫補助事業　尼崎市内遺跡　復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書」『尼崎市文化財調査報告書』第 32 集　2003
尼崎市教育委員会 「平成 14・15 年度国庫補助事業　尼崎市内遺跡　復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書」『尼崎市文化財調査報告書』第 34 集　2005
伊丹郷町研究会 「伊丹郷町遺跡の陶磁器の様相」（第１回伊丹郷町研究会大会発表要旨集）2003
伊丹市役所 『伊丹市史』第１巻　1971
伊丹市役所 『伊丹市史』第４巻　1968
伊丹市教育委員会 「御願塚古墳環境整備に伴う発掘調査概報」『伊丹市文化財調査報告』 1971
伊丹市教育委員会・伊丹市文化財保存協会 「ふるさとのこころをたずねて　破塚の碑（御願塚古墳）」 1974
伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅰ」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第 15 集　1992
伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅱ　御願塚古墳外堤部の調査」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第 17 集　1993
伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅲ」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第 19 集　1994
伊丹市教育委員会 『伊丹の文化財』 1995
伊丹市教育委員会 「高台遺跡第４地点第１次発掘調査実績報告書」 1998
伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査報告書」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第 23 集　1999
伊丹市教育委員会 『伊丹の歴史的建造物』 2000
伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査報告書」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第 24 集　2001
伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査報告書」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第 30 集　2005
伊丹市教育委員会 「伊丹市埋蔵文化財調査報告書」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書』第 32 集　2007
伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会 『有岡城跡発掘調査報告書Ｘ－第 11 次～第 16 次・第 18 次～第 22 次調査の概要』 2003
伊丹地名研究会 「御願塚の地名」『地域研究いたみ』第 15 号　伊丹市立博物館　1985
一瀬和夫 「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』Ⅴ　大阪府教育委員会　1988
上田　睦 「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第５号　埴輪検討会　2003
大阪大学文学部考古学研究室 「鳥居前古墳－総括編－」『大阪大学文学部考古学研究報告』第１冊　1990
大阪府教育委員会 「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書』第 30 輯　1978
大阪府教育委員会 「豊振遺跡」『大阪府文化財調査報告書』第 39 輯　1992
大阪府教育委員会 「土師の里遺跡－土師氏の墓域と集落の調査」『大阪府埋蔵文化財調査報告』 1999
大塚古墳発掘調査団 『摂津豊中　大塚古墳第３次調査概要報告書－大阪府豊中保健所建替工事に伴う発掘調査』 1992
岡山市教育委員会 『遠山第２号古墳　付伝・千足古墳出土遺物』 1992
奥田　尚他 「応神陵古墳外堤出土円筒埴輪の研究」『研究紀要』第４集　埴輪検討会　1998
小長谷正治 「御願塚古墳最近の調査」『地域研究いたみ』第 18 号　伊丹市立博物館　1988
加古川市教育委員会 「行者塚古墳発掘調査概報」『加古川市文化財調査報告書』15　1997
加古川総合文化センター 『行者塚古墳の時代　博物館常設展示あんない　別冊』 2001
加西市教育委員会 「マンジュウ古墳」『玉丘古墳群Ⅲ』 2007

川西宏幸　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号　日本考古学会　1978
川西市教育委員会　『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』　2006
韓式系土器研究会　『韓式系土器研究Ⅰ』　1987
韓式系土器研究会　『韓式系土器研究Ⅱ』　1989
群馬町教育委員会　「保渡田八幡塚古墳群」『群馬町埋蔵文化財調査報告』第 57 集　2000
神戸市教育委員会　『史跡五色塚古墳　小壺古墳　発掘調査・復元整備報告書』　2006
古代の土器研究会編　『古代の土器 1　都城の土器集成Ⅰ』　1992
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　「瓦谷古墳群」『京都府遺跡調査報告書』第 23 冊　1997
堺市教育委員会　「百舌鳥古墳群　鎮守山塚古墳－CJY-1 地点　堺市百舌鳥赤畑町 5 丁－」
『平成 9 年度国庫補助事業発掘調査報告書』　1998
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　「千僧供古墳群」『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』　2002
出土銭貨研究会　『出土銭貨』第 16 号　2001
世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会　『野毛大塚古墳』　1999
高橋克壽　「古墳の葺石」『文化財論叢Ⅲ　奈良文化財研究所学報』第 65 冊　2002
高橋克壽　「埴輪の世紀」『歴史発掘』9　講談社　1996
田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966
中世土器研究会　『概説　中世の土器・陶磁器』　1995
名古屋市教育委員会　『志段味大塚古墳・大久手古墳群』　2006
沼澤　豊　「前方後円墳と帆立貝古墳」『考古学選書』52　雄山閣　2006
野上丈助　『特別展　大阪府の埴輪』　大阪府立泉北考古資料館　1982
埴輪検討会　『埴輪論叢』第 4 号　2003
羽曳野市教育委員会　「羽曳野市内遺跡調査報告書－平成 8 年度－」『羽曳野市埋蔵文化財発掘調査報告書』38　2000
羽曳野市教育委員会　「羽曳野市内遺跡調査報告書－平成 6 年度－」『羽曳野市埋蔵文化財発掘調査報告書』45　2002
羽曳野市教育委員会　「羽曳野市内遺跡調査報告書－平成 11 年度－」『羽曳野市埋蔵文化財発掘調査報告書』46　2002
廣瀬　覚　「摂津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜」『古代文化』55－9　2003
兵庫県　『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第 2 輯　1925
兵庫県教育委員会　「温塚古墳跡」『昭和 59 年度　年報』　1984
兵庫県教育委員会　「片島古墳群・片島遺跡発掘調査報告書－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅹ Ⅶ」
『兵庫県文化財調査報告』第 143 冊　1995
兵庫県教育委員会　「南本町遺跡」『平成 7 年度　年報』　1996
兵庫県教育委員会　「南本町遺跡」『平成 8 年度　年報』　1997
兵庫県教育委員会　「南本町遺跡」『平成 9 年度　年報』　1998
兵庫県教育委員会　「伊丹市　南本町遺跡」『兵庫県文化調査報告』第 179 冊　1998
兵庫県教育委員会　「有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ」『兵庫県文化財調査報告書』第 207 冊　2000
兵庫県教育委員会　「伊丹市所在　有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ」『兵庫県文化財調査報告』第 301 冊　2006
兵庫県教育委員会　「南本町遺跡・北村遺跡」『兵庫県文化財調査報告書』第 320 冊　2007
埋蔵文化財研究会　『中期古墳の展開と変革－5 世紀における政治的・社会的変化の具体相（1）－』
（第 44 回埋蔵文化財研究集会　発表要旨集）1998
埋蔵文化財研究会　『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（第 52 回埋蔵文化財研究集会　発表要旨集）　2003
松阪市教育委員会　「史跡宝塚古墳」『松阪市埋蔵文化財報告書』Ⅰ　2005
三木文雄編　「はにわ」『日本の美術』19　至文堂　1967
遊佐和敏　『帆立貝式古墳』　同成社　1988
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　「象鼻山 1 号古墳－第 3 次発掘調査の成果－」『養老町文化財調査報告書』第 3 冊　1999

報告書抄録

ふ り が な	ひょうごけんいたみし　ごがづかこふんはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	兵庫県伊丹市　御願塚古墳発掘調査報告書
副 書 名	第8・9・10次調査
巻　　次	
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編 著 者 名	中畔明日香
編 集 機 関	伊丹市教育委員会
所　在　地	〒664-8503　兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地
発行年月日	2008年3月

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
御願塚古墳 第8次調査	伊丹市 御願塚4丁目326-1 他	28207	61	34°46′46″	135°25′02″	19980529 ～19980821	180㎡	環境整備事業
御願塚古墳 第9次調査	伊丹市 御願塚4丁目325-1 他					20001117 ～20010131	33.75㎡	
御願塚古墳 第10次調査	伊丹市 御願塚4丁目322-2				135°25′01″	20050201 ～20050218	52㎡	個人住宅建設 学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御願塚古墳 第8次調査	古墳	古墳時代（中期）	造り出し 堤・外濠 埴輪列	円筒埴輪 形象埴輪 須恵器	
御願塚古墳 第9次調査			墳頂・第1段テラス 埴輪列	円筒埴輪 形象埴輪	
御願塚古墳 第10次調査			外濠	円筒埴輪 形象埴輪	

要　約

本報告書では、伊丹市御願塚4の御願塚古墳で行われた第8・9・10次発掘調査の成果を報告する。

第8次調査では、後円部に取り付く「造り出し」が発見された。また、堤・外濠を確認した。第9次調査では、後円部墳頂と第1段テラスから埴輪列が発見され、2段築成であることが確認された。第10次調査では、外濠が確認され、埋土より馬・馬子の埴輪が出土した。

3回の調査により、当古墳が、5世紀後半に築造された二重周濠、造り出し付帆立貝式古墳（2段築成）であることが明らかになったが、外堤については再考を促すこととなった。

図版１

１．第Ⅰ・Ⅲトレンチ全景（西北より）

２．第Ⅰトレンチ全景（西北より）

３．第Ⅰトレンチ南壁断面と平坦面（西北より）

４．第Ⅰトレンチ石列検出状況（北東より）

５．第Ⅰトレンチ石列検出状況（西北より）

図版２

１．第Ⅱトレンチ全景（西北より）

２．第Ⅱトレンチ拡張前（西北より）

３．第Ⅱトレンチと第Ⅳトレンチ（北より）

４．第Ⅱトレンチ北壁断面（南西より）

５．第Ⅱトレンチ埴輪列検出状況（東南より）

図版３

１．第Ⅱトレンチ北側埴輪列
埴輪Ａ～Ｈ（南西より）

２．第Ⅱトレンチ南側埴輪列
埴輪Ｉ～Ｎ（北東より）

３．第Ⅱトレンチ北側埴輪列
埴輪Ａ～Ｈ（東南より）

４．第Ⅱトレンチ南側埴輪列
埴輪Ｉ～Ｎ（東南より）

５．第Ⅱトレンチ南側埴輪列
埴輪Ｉ～Ｎ（西北より）

６．第Ⅱトレンチ北側埴輪列
掘り方（東南より）

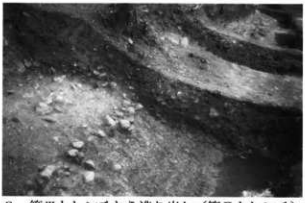
７．第Ⅱトレンチ南側埴輪列
掘り方（東南より）

８．第Ⅱトレンチ南側埴輪列
掘り方と埴輪Ｏ（西北より）

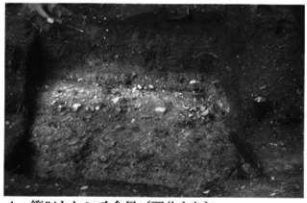
図版 4

1．第Ⅲトレンチ全景（西北より）

2．第Ⅲトレンチ北壁断面と葺石転落状況（南西より）



3．第Ⅲトレンチから造り出し（第Ⅱトレンチ）を見る（北東より）



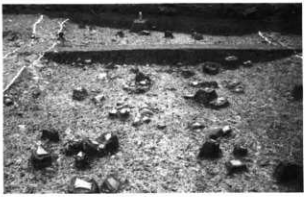
4．第Ⅳトレンチ全景（西北より）

5．第Ⅳトレンチ南壁断面（北東より）

図版５

１．外濠部全景（東より）

２．外濠部西壁断面と外濠畦断面（東北より）

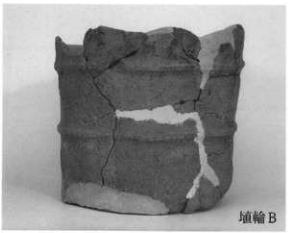


３．外濠部外濠内埴輪出土状況（東北より）

図版 6

埴輪 A

埴輪 C



埴輪 B

埴輪 D

図版７

埴輪Ｅ

埴輪Ｆ

埴輪Ｇ

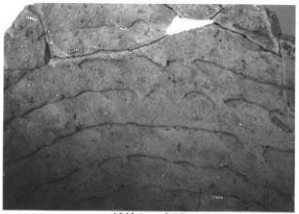
埴輪Ｈ

埴輪Ｉ

埴輪Ｋ

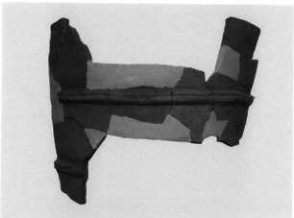
図版 8

埴輪L



埴輪L　内面

埴輪J



埴輪M

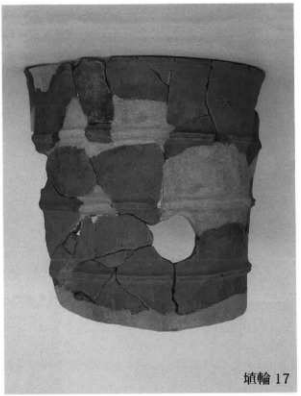
埴輪O

図版９

埴輪N

埴輪 18

埴輪 16


埴輪 17

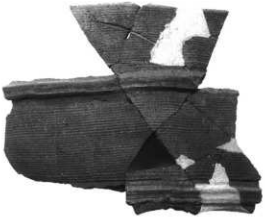
埴輪 19

埴輪 20

埴輪 21

図版 10

埴輪 22



埴輪 26

埴輪 23

埴輪 29

埴輪 31

埴輪 32

埴輪 34

埴輪 39

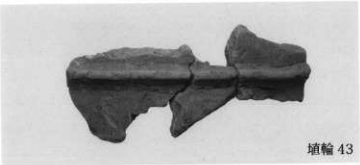
埴輪 27

埴輪 40

埴輪 37

埴輪 41

図版 11


埴輪 43

埴輪 42

埴輪 46

埴輪 44

埴輪 45

埴輪 47

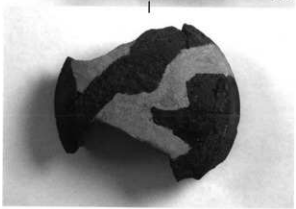
埴輪 50

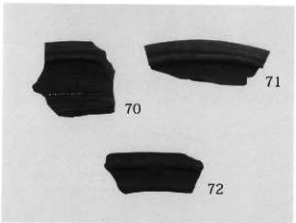
埴輪 49

埴輪 48

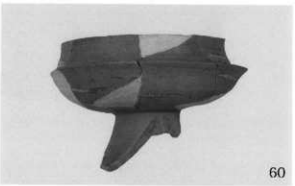
埴輪 51

図版 12





第Ⅱトレンチ出上　甕口縁部片



図版 13

63

66

62

73

64

65

67

68

図版 14

埴輪 1

埴輪 15

埴輪 2

埴輪 4

埴輪 6

埴輪 16

埴輪 3

埴輪 18

埴輪 17

埴輪 19

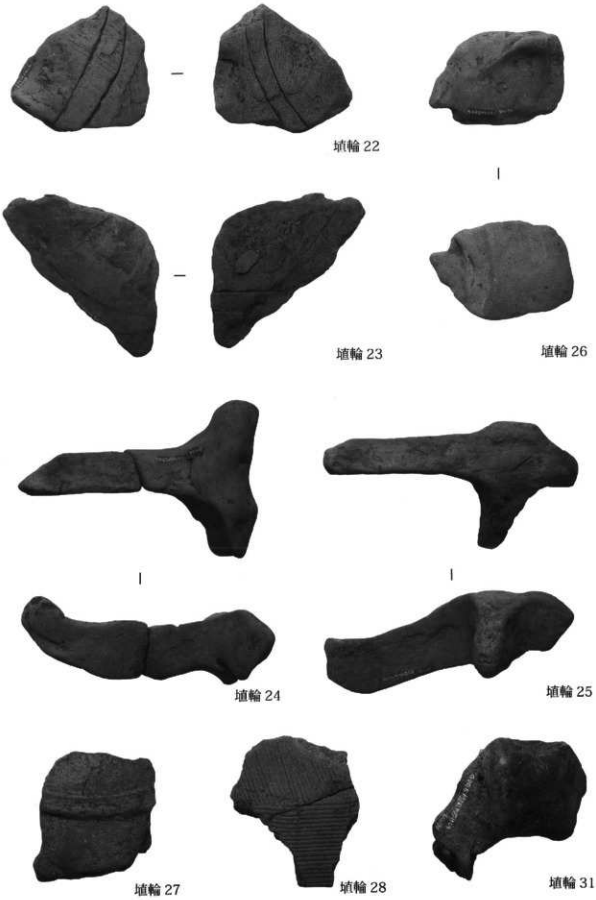
埴輪 7

埴輪 8

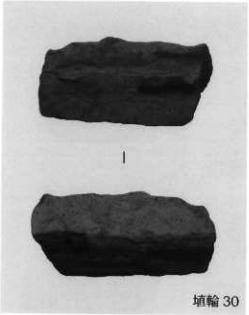
埴輪 20

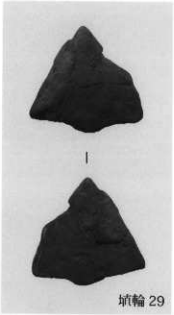
埴輪 21

図版 15



図版 16





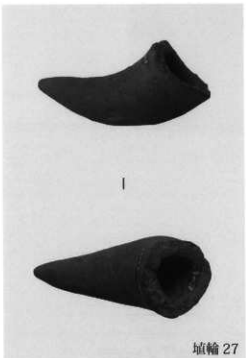
図版 17

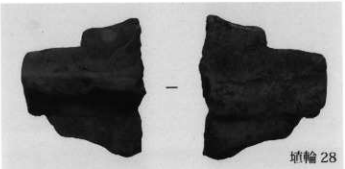
埴輪 22

埴輪 23

埴輪 24

埴輪 25


埴輪 27


埴輪 28

埴輪 26

図版 18

1．調査時航空写真
（南より）
兵庫県立考古博物館提供

2．全景　墳頂部から段築部を
望む（南東より）

図版 19

1．墳頂部の埴輪列（南東より）

2．墳頂部の埴輪列と東壁断面（西より）

3．墳頂部の埴輪列（東より）

4．埴輪 1A と東壁断面（西より）

5．墳頂部の埴輪列
掘り方（西より）

6．墳頂部の埴輪列
掘り方（東より）

図版 20

1．段築部の埴輪列と葺石（北西より）

2．段築部から墳頂部を見る（北西より）

3．葺石と葺石転落状況（南東より）

4．段築部の埴輪列と東壁断面（西より）

5．段築部の埴輪列（西南より）

図版 21

埴輪１Ａ

埴輪１Ｄ

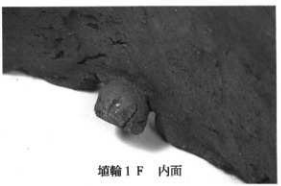
埴輪１Ｂ

埴輪１Ｆ

埴輪１Ｃ

埴輪１Ｆ　外面

埴輪１Ｅ

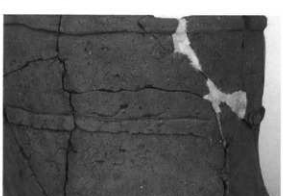


埴輪１Ｆ　内面

図版 22

埴輪２Ａ

埴輪２Ｃ



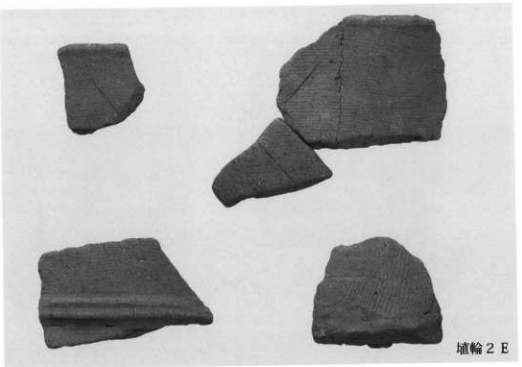
埴輪２Ｃ　外面

図版 23

埴輪２Ｂ

埴輪２Ｄ　外面

埴輪２Ｄ



埴輪２Ｅ

図版 24

埴輪 12

埴輪 13

埴輪 17

埴輪 18

埴輪 16

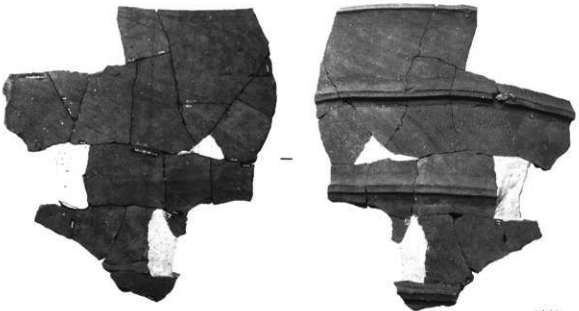
埴輪 19

埴輪 21

埴輪 20

埴輪 22

埴輪 25



埴輪 24

図版 25

埴輪 27

埴輪 28

埴輪 30

埴輪 31

埴輪 32

埴輪 33

埴輪 35

埴輪 34

埴輪 36

図版 26

1．全景（南西より）

2．外濠検出状況（南西より）

3．埴輪・須恵器出土状況（北より）

4．北壁断面（南より）

5．東壁断面（西より）

図版 27

埴輪 1

埴輪 2

埴輪 4

埴輪 5

埴輪 8

埴輪 9

埴輪 12

埴輪 15

埴輪 20

埴輪 23

埴輪 24

図版 28

埴輪 25

埴輪 31

埴輪 26

埴輪 27

埴輪 28

埴輪 30

埴輪 32

埴輪 39

埴輪 33

図版 29

埴輪 40

埴輪 34

埴輪 35

埴輪 36

埴輪 38

埴輪 41

埴輪 37

埴輪 42

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第34集

兵庫県伊丹市

御願塚古墳発掘調査報告書

—第8・9・10次調査—

2008年3月

発行　伊丹市教育委員会
兵庫県伊丹市千僧1丁目1
TEL　072－783－1234
印刷　弘栄堂印刷所
伊丹市中央4丁目1番11号
TEL　072－772－8111

19 教 201-1-065 A4